の栓として用いられたことも考えられる。368は砂岩製の砥石、369～372は銅銭で寛永通宝である。すべて背文を持たない古寛永である。

⑹ 包含層出土遺物

縄文土器（第134図）

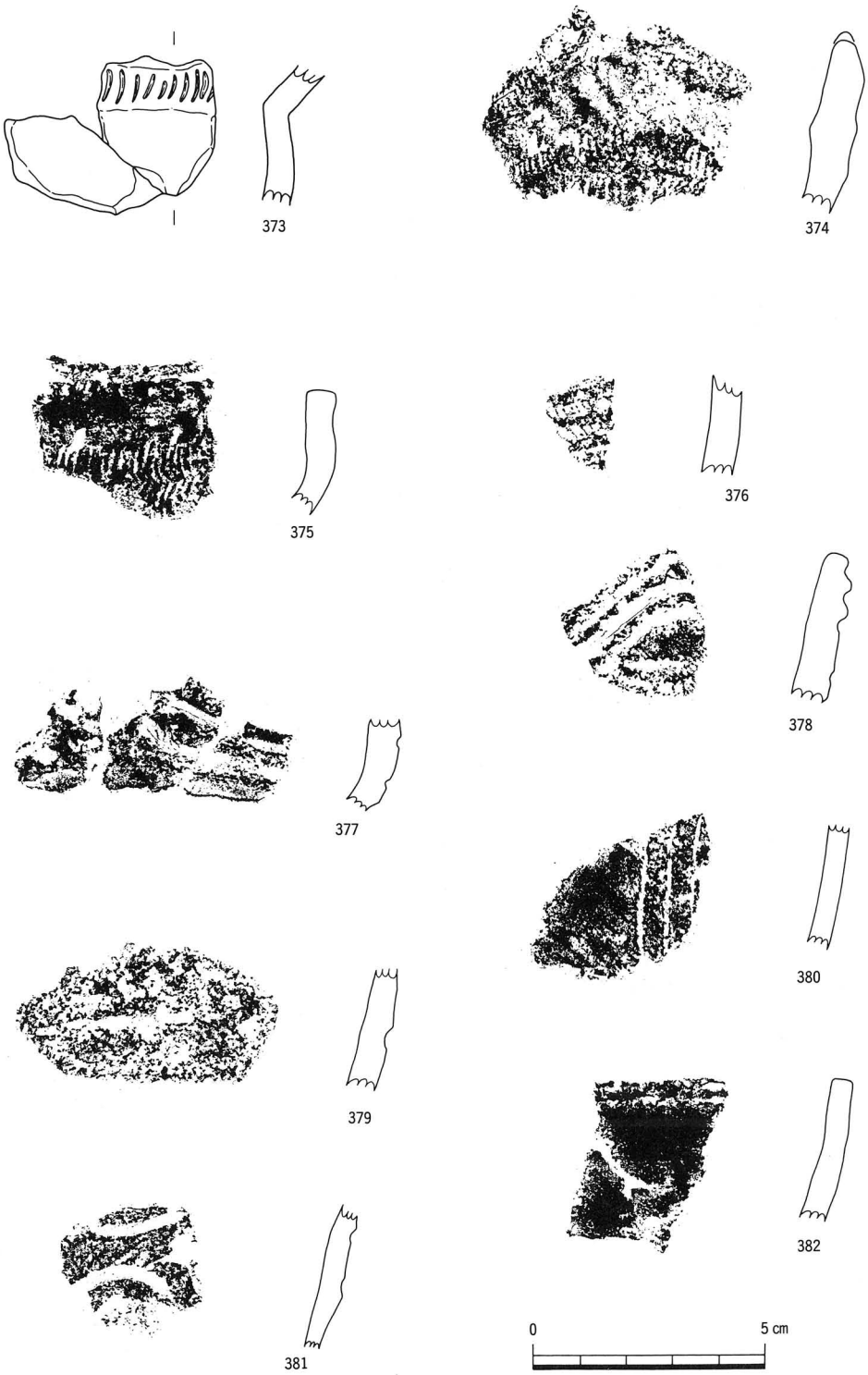
373～382は縄文土器である。373は深鉢形土器の口縁部と体部の境付近である。微隆帯上に爪形文を施す。374は深鉢形土器の口縁部である。山形口縁の頂部に抉りを持ち、外面には太いＲＬの縄文を横位に施文し、２条の微隆帯上に爪形文を施す。375は深鉢形土器である。平口縁の端部と外面の微隆帯上に爪形文を施文する。373～375は縄文時代中期に属す船元Ⅰ式に相当すると思われる。376は体部の破片で太いＬＲの縄文を３条横位に押圧施文している。377は浅鉢形土器の口縁部破片と思われる。山形口縁で頂部に穿孔しており、沈線で区画文を描出する。378は深鉢形土器の口縁部破片とおもわれる。山形口縁部の頂部に沿うかたちで三本沈線により三角形を描出する。379は横位の沈線を１条持つ。380は３条の垂下条線を持つ体部の破片である。381はＬＲの磨消縄文を持つ体部の破片である。382は、無文の口縁部破片である。377～382は縄文時代後期に属し、377･378は福田ＫⅡ式、381は中津式にそれぞれ相当すると思われる。

弥生土器（第135図）

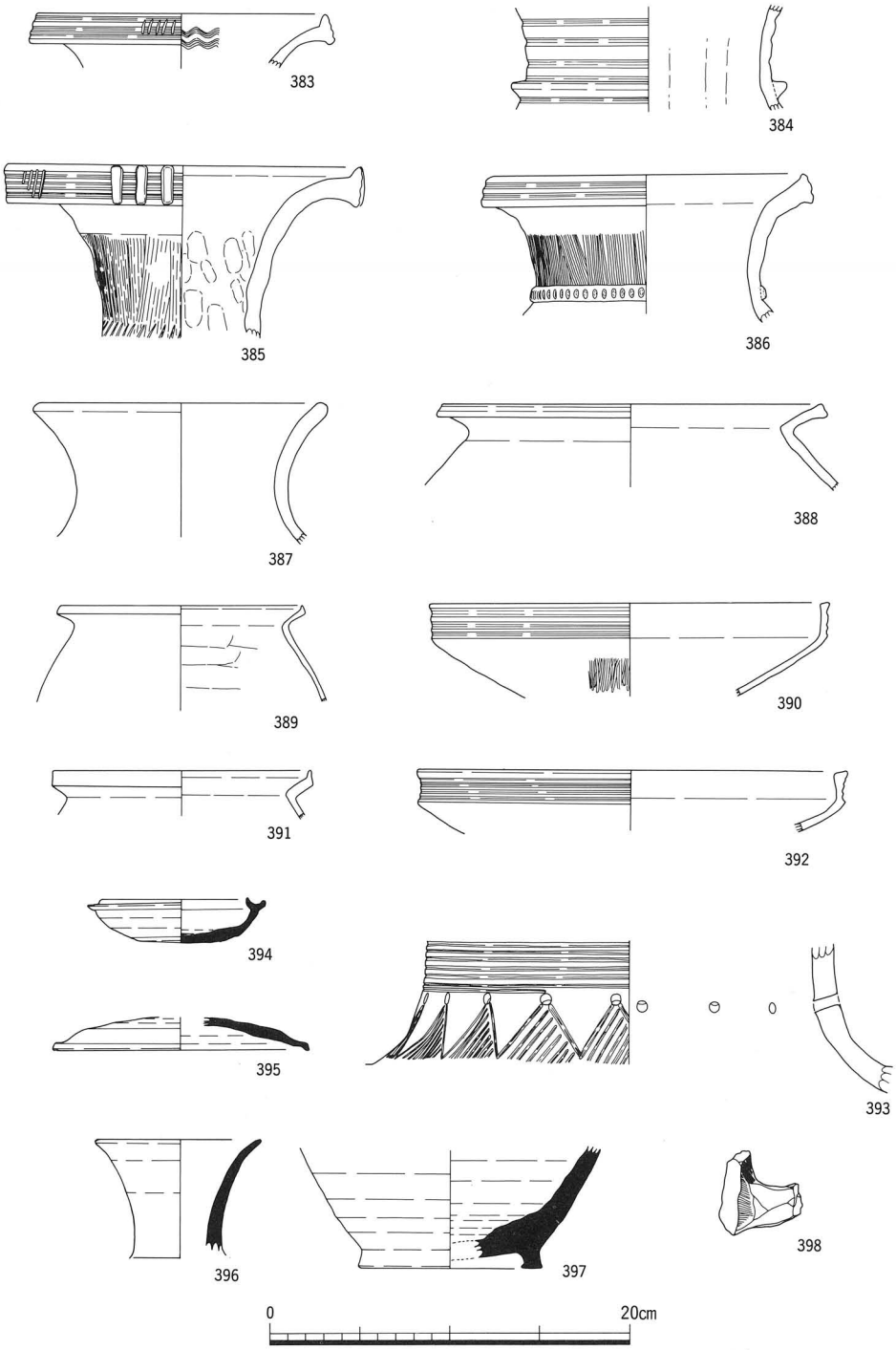
383～393は壺形土器である。383は口縁端部に３条の凹線と５個１組の刻目を施し、内面に櫛描波状文を施す。384は壺の頸部である。外面に幅広の凹線を３条施し、下部に断面三角形の突帯を貼り付けその上下に凹線を施す。385は口縁端部に凹線を３条施した後に３個１組の棒状浮文、４個１組の刻目を施す。また頸部と体部の境に左下がりの箆圧痕文を施す。386は口縁端部に凹線２条、頸部と体部の境に断面方形状の突帯を貼り付け上面に刺突文を施す。387は全体に磨滅が激しく調整は不明であるが、頸部から体部にかけて緩やかに外反し、端部を丸くおさめている。388は口縁端部に不明瞭な凹線１条をもつ甕であり、389･391は口縁端部をつまみ上げる甕である。390・392は高杯形土器である。ともに直立する口縁部をもち外面に凹線を３条施す。392の口縁部はやや内傾気味である。393は器台形土器の脚部である。外面に７本の沈線を施しその下部に沈線で三角形を描出、その内側を左下がりの沈線で充填するもので、三角形の頂点に円孔を持つ。

須恵器（第135図）

394～398は須恵器である。394はやや小形の杯身である。形態的な特徴から田辺編年[6]の



第134図　包含層出土遺物　(1)



第135図　包含層出土遺物　(2)

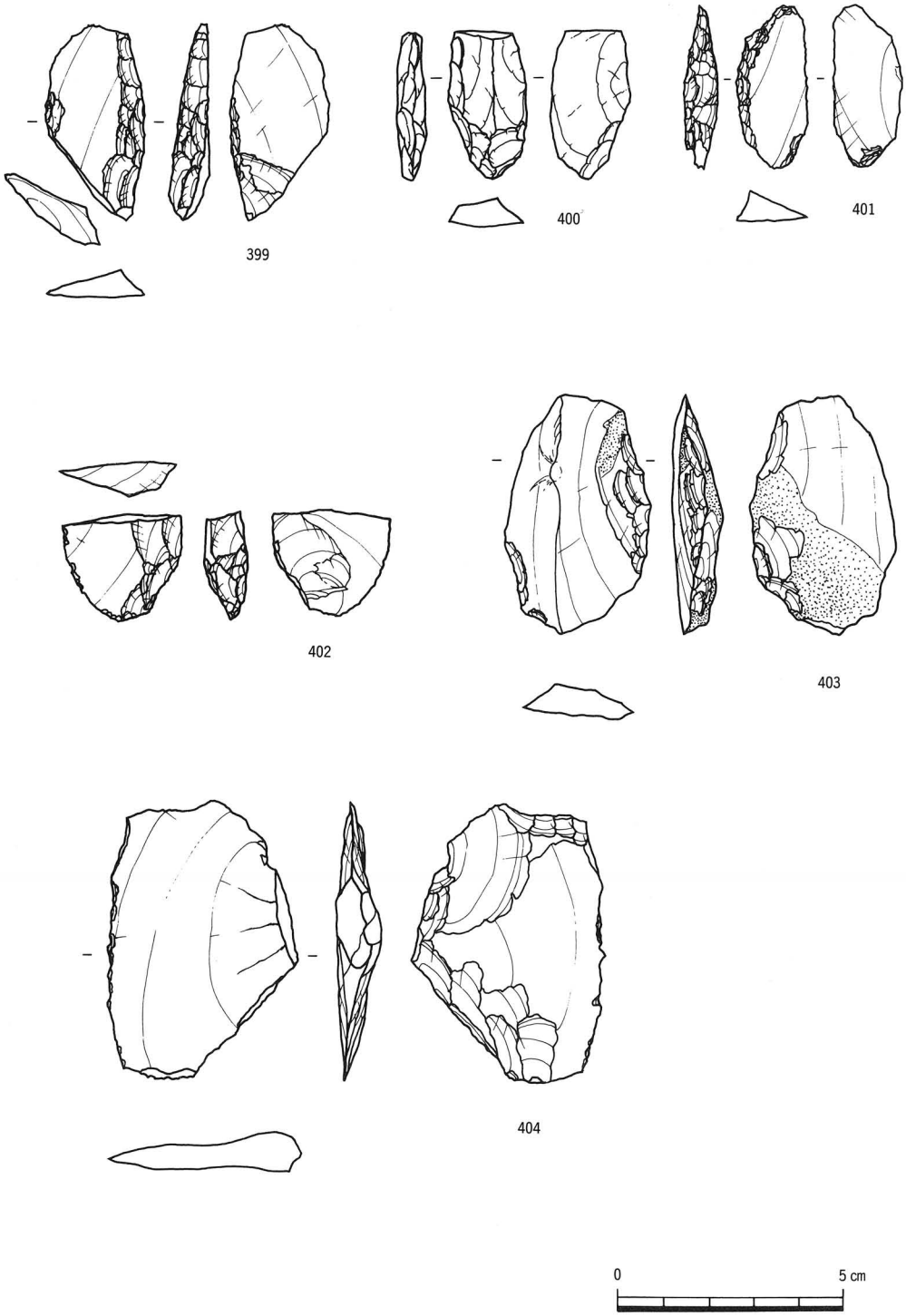
ＴＫ209段階におさまるものと思われる。395は杯蓋、396は長頸壺の口縁部、397は壺の底部で貼り付けの高台を持つ。398は甑の把手である。395～398は形態的な特徴から９Ｃ末～10Ｃ初頭頃に位置付けられる。

石器（第136～143図）

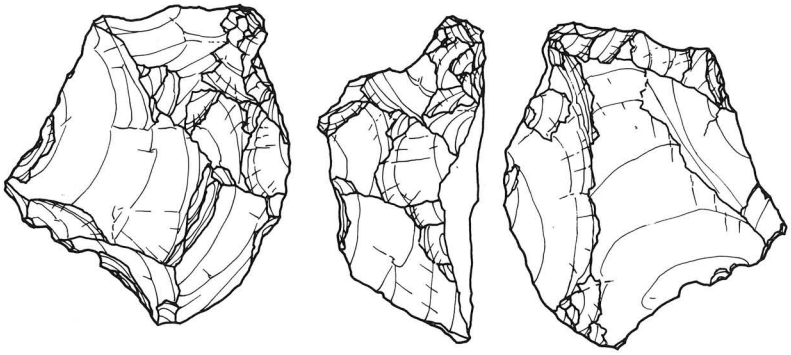
399～401はサヌカイト製のナイフ形石器である。399は下半部、先端部を欠損しているが、横長剥片を素材とするもので、打面部分を中心に裏面から急斜度で粗目の剥離を施し表面から平坦な剥離により調整を施している。400は上半部を欠損しているが横長剥片を素材とするもので打面部分を中心に裏面から一側縁及び基部に急斜度の剥離を施し表面から平坦な剥離により調整を施している。401は横長剥片を素材とし、調整は主として裏面よりの急斜度な剥離によるものである。402は赤色チャート製のナイフ形石器である。上半部を欠損しているが調整は一側縁のみと考えられ、打面部分を半分除去するように施されている。403はサヌカイトの翼状剥片である。石核の底面だった部分には盤状剥片剥離の際の打点のパンチコーンが残されている。404はサヌカイトの横長剥片である。表面には裏面と同一方向からの剥離面が多く残されている。405はサヌカイトの石核である。主に横長剥片剥離を行っている石核で、打面調整は顕著である。406はサヌカイトの翼状剥片石核である。盤状の剥片を素材とし、最終の剥離面は作業の中心よりやや右側に片寄ったところを打点としている。

407はチャート製の有舌尖頭器である。先端部と返しの一方を欠損しているが両側縁がやや内彎し両側をえぐるような加工で逆三角形の基部を作り出している。408～441は石鏃である。415と426がチャート製である以外はすべてサヌカイト製である。408～419までは凹基式であり、抉りの深いもの（408～415）と浅いもの（416～419）に分けられる。420～423・425～427は平基式である。431～436は凸基式である。基部の短いもの(431・432)、長いもの(433～436)に分けられる。437～441は有茎式である。433～441は復元長でいずれも３cmを越える大形のものと思われる。

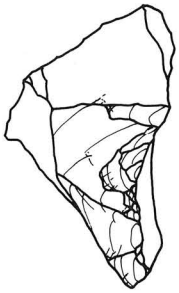
442と443はサヌカイト製の石匙である。442は縦長の剥片の一端に抉りを加え、側縁及び先端に両面調整を加えて刃部を作り出す縦型の石匙である。443は刃部の大半を欠損しているが横型石匙の可能性が高い。444～448はサヌカイト製のスクレイパーである。444は打点をとどめる縦長の剥片を素材とし一側縁に主に片面の剥離により刃部を作り出す。445は横長剥片を素材とし主に片面の剥離により、主要剥離面側に刃部を作り出す。446は縁辺に片面剥離を加え刃部を作り出す。447は横長の剥片を素材とし一側縁に両面から剥離を加え刃部を作り出す他、打点部分にも調整痕が認められる。448は横長の剥片の縁辺に剥離を加え刃部を作り出す。449～459は打製石庖丁である。453・455・457がサヌカイト製の他はすべて結晶片岩製である。458が完形である以外はすべて欠損品である。いずれも横長の剥片を素材とし一側縁に剥離を

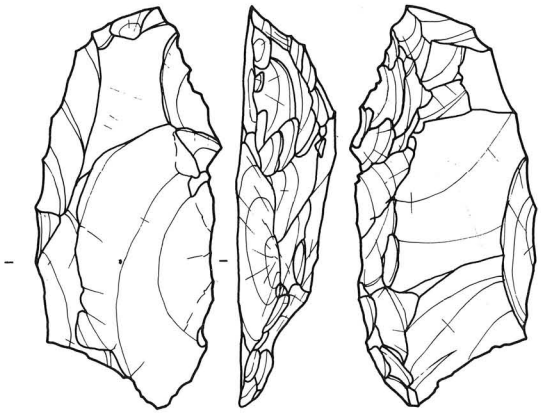


第136図　包含層出土遺物　(3)

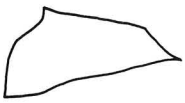


405

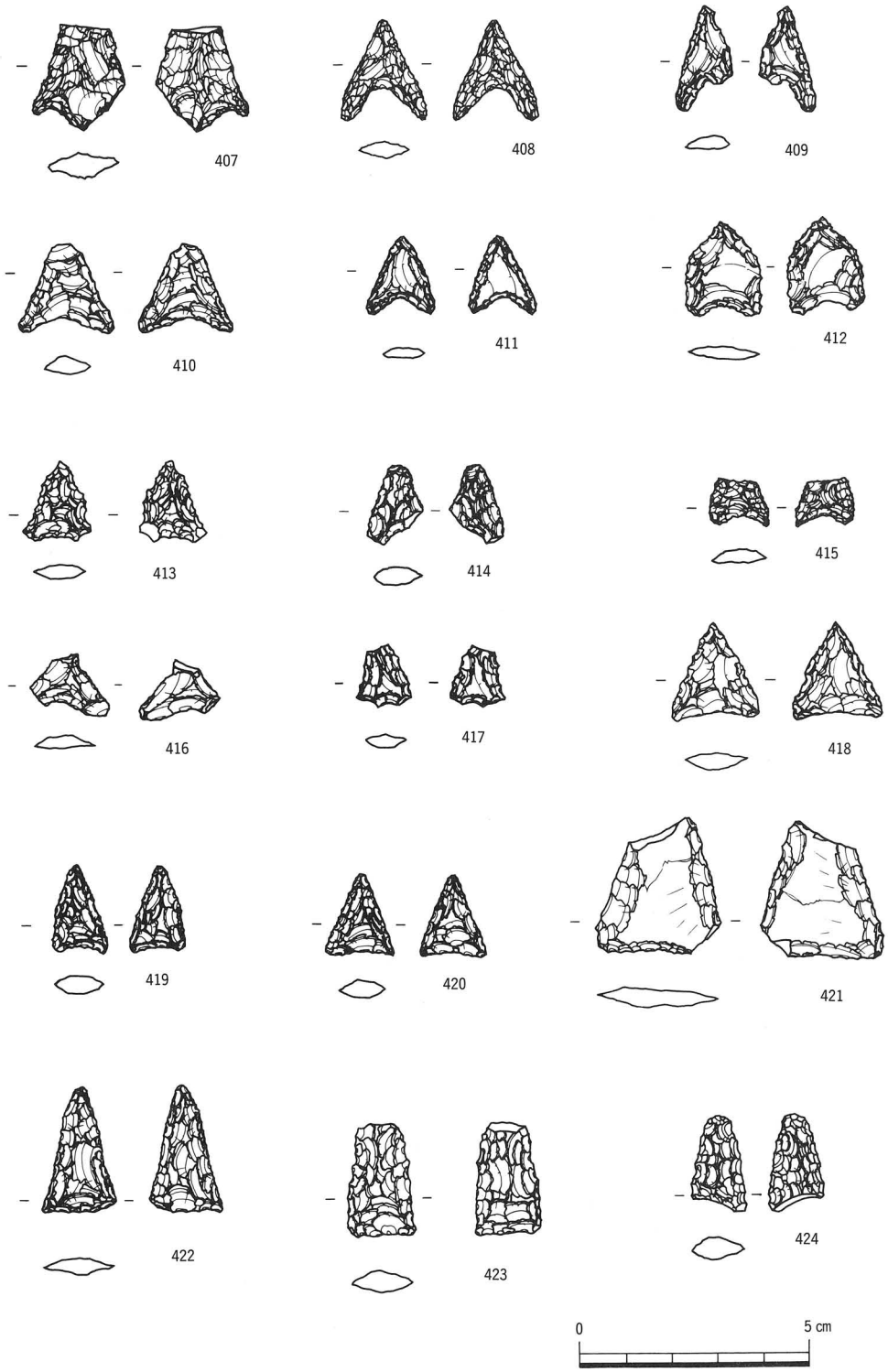




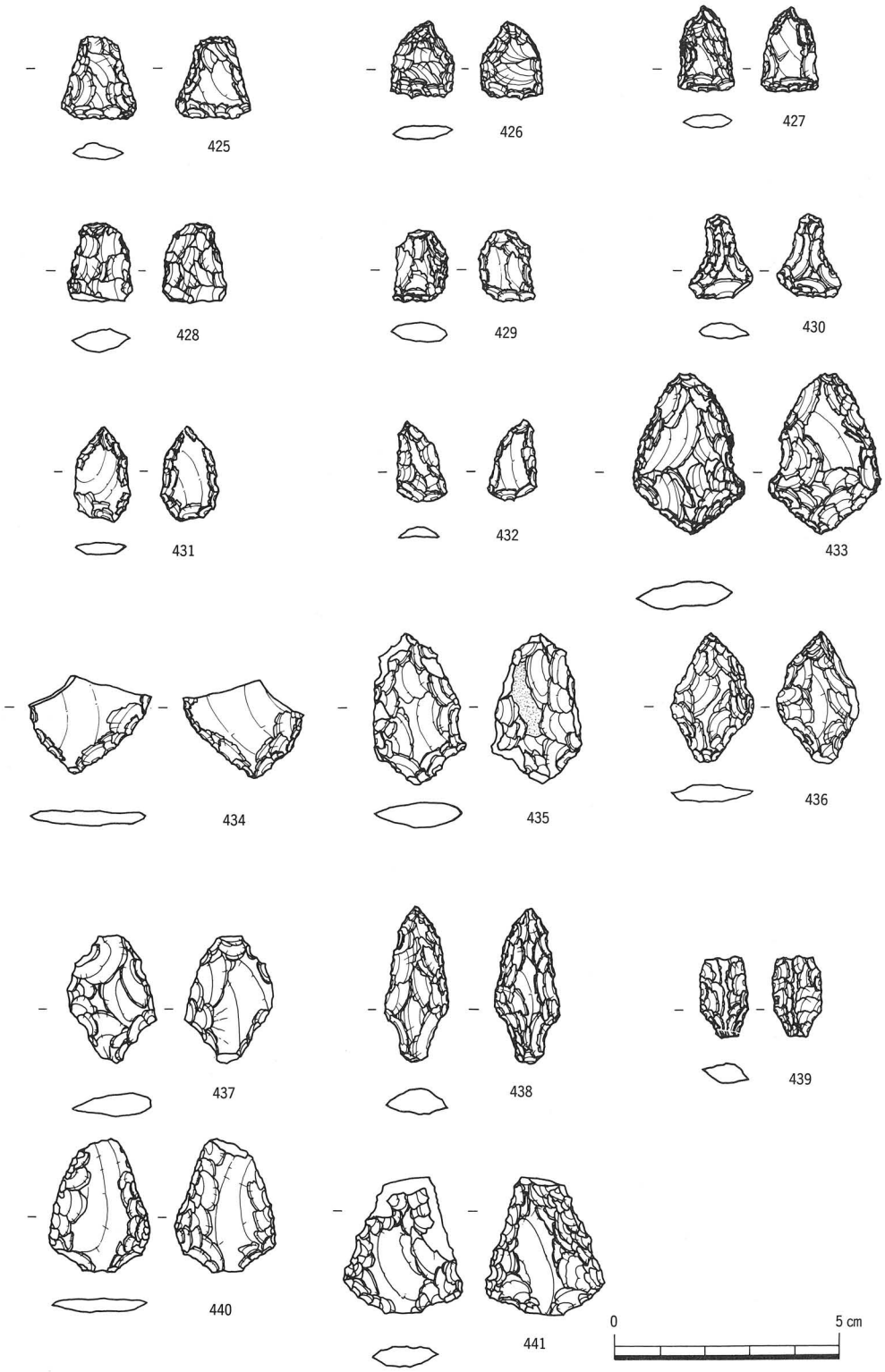
406



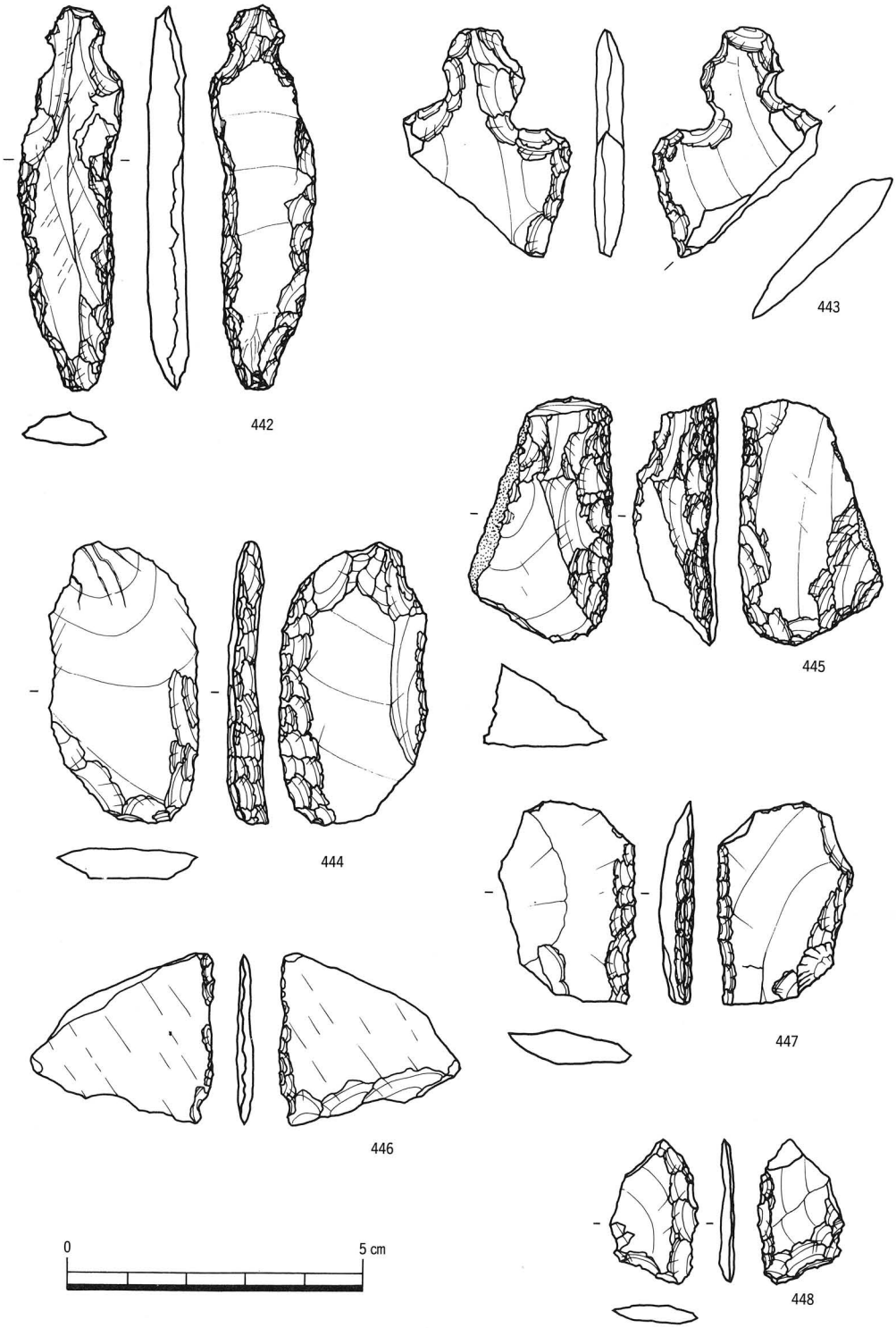
第137図　包含層出土遺物　(4)



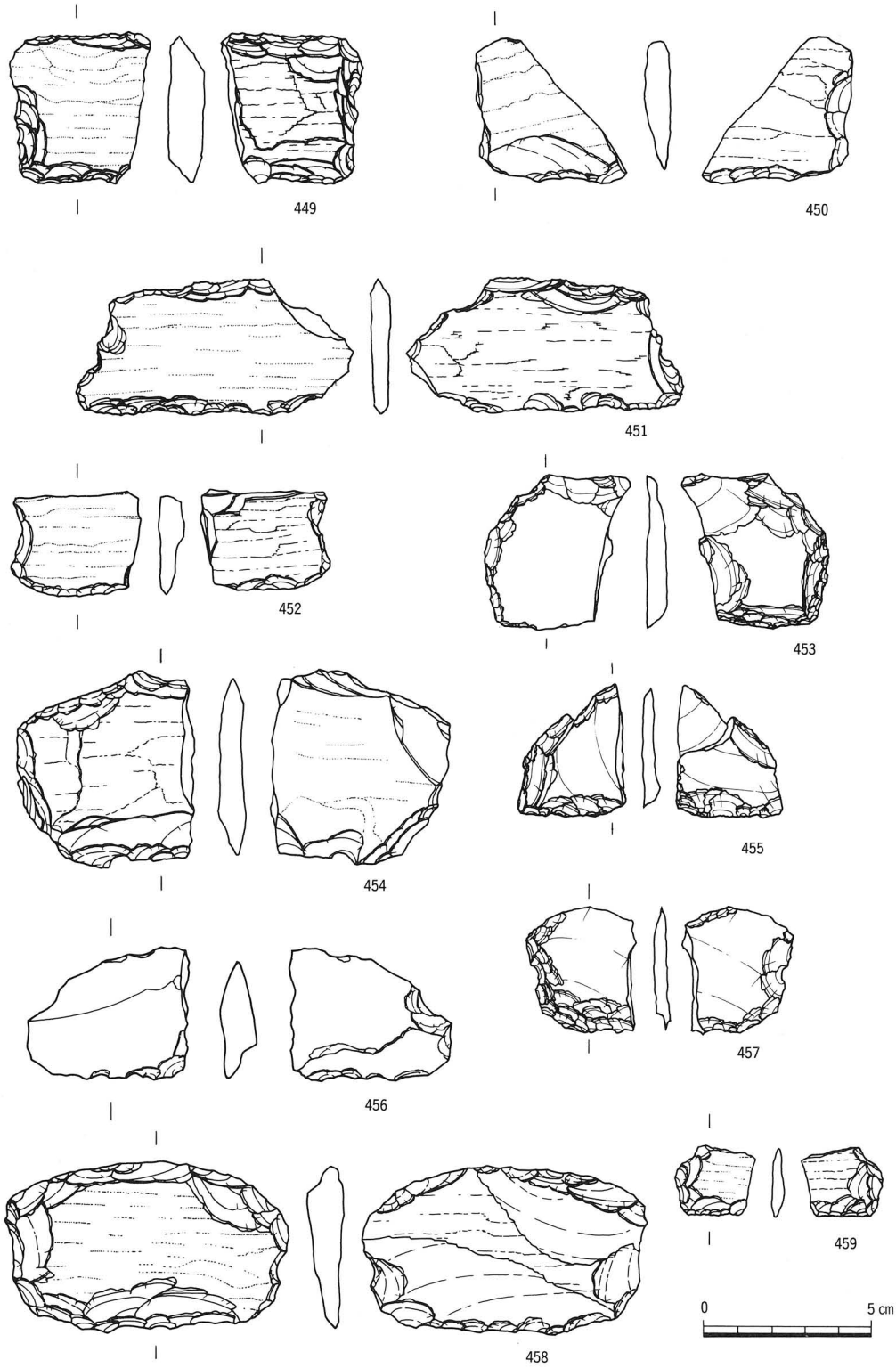
第138図　包含層出土遺物　(5)



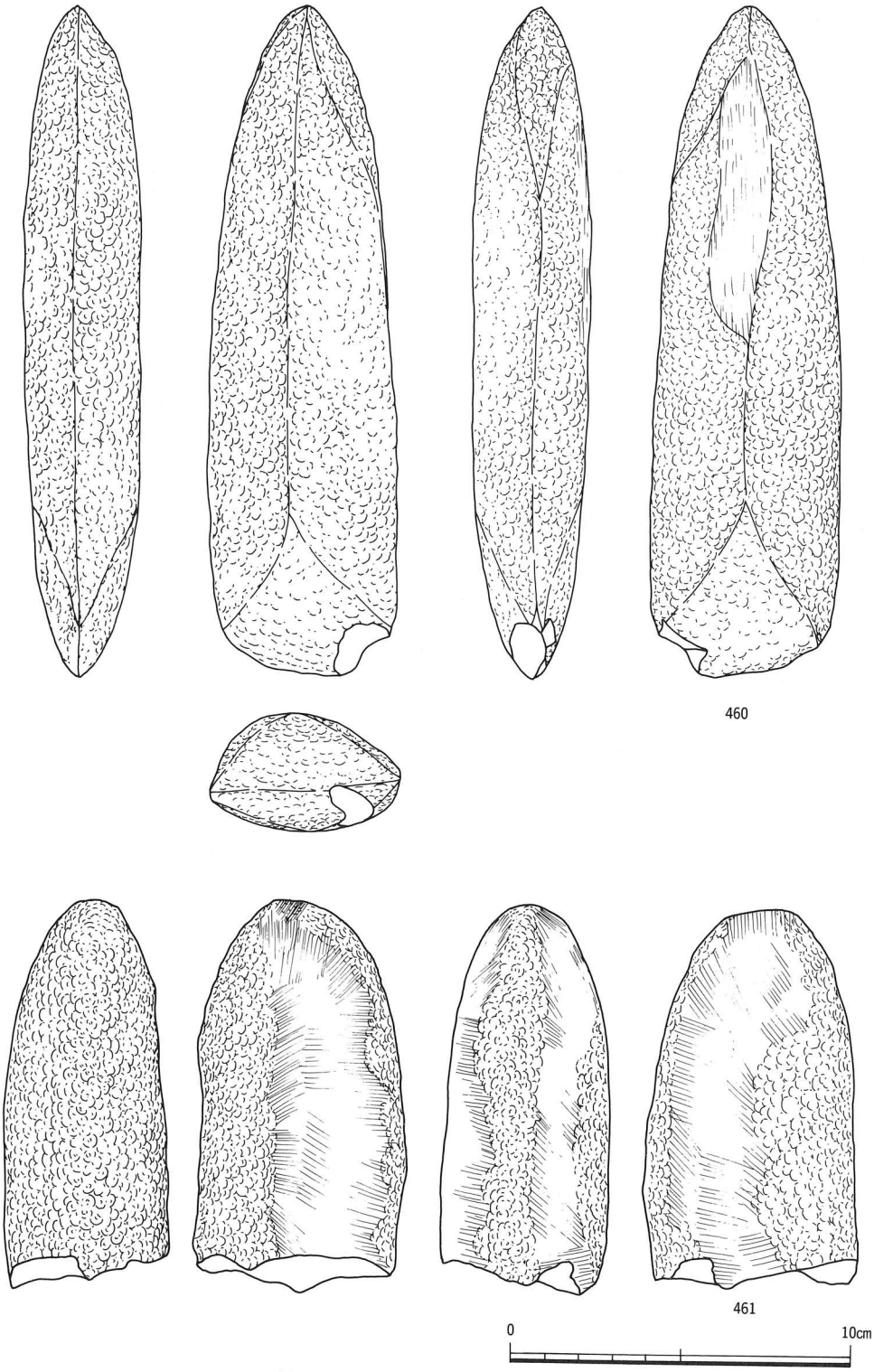
第139図　包含層出土遺物　(6)



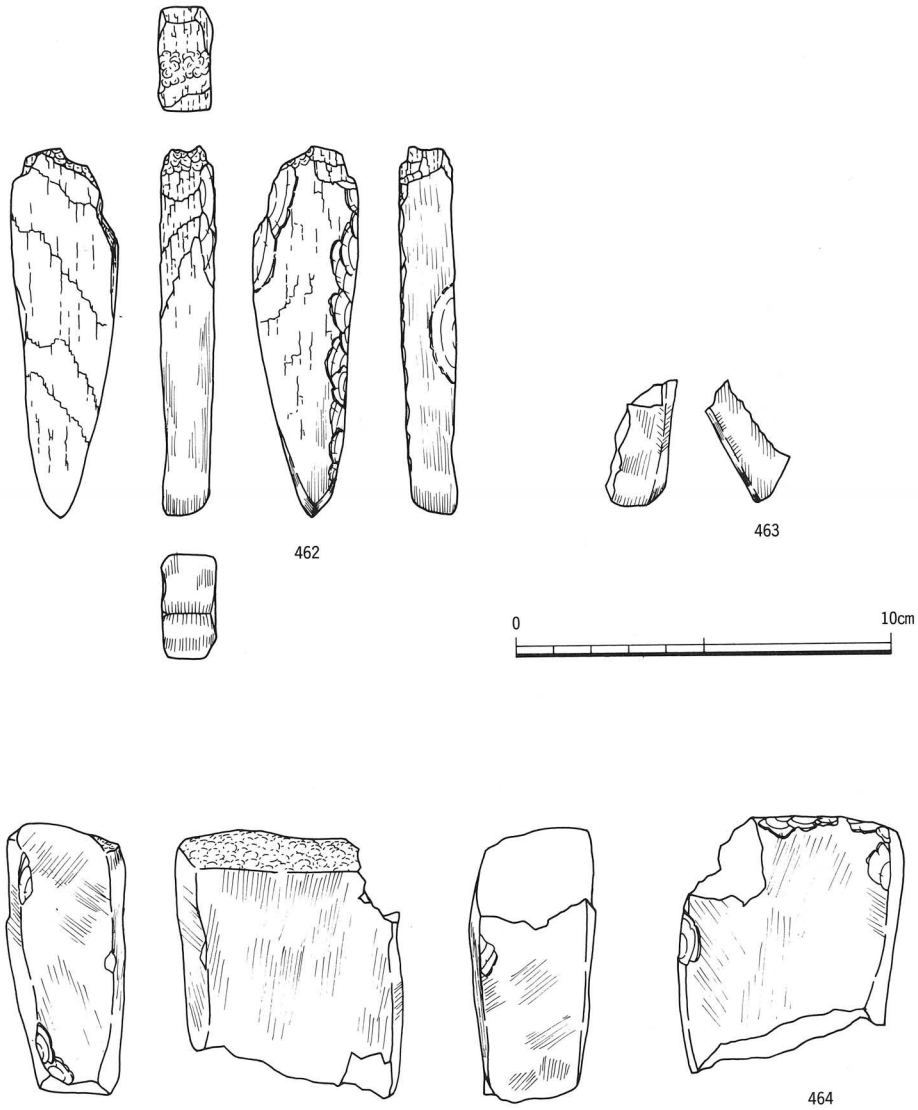
第140図　包含層出土遺物　(7)



第141図　包含層出土遺物　(8)



第142図　包含層出土遺物　(9)



第143図　包含層出土遺物 ⑽

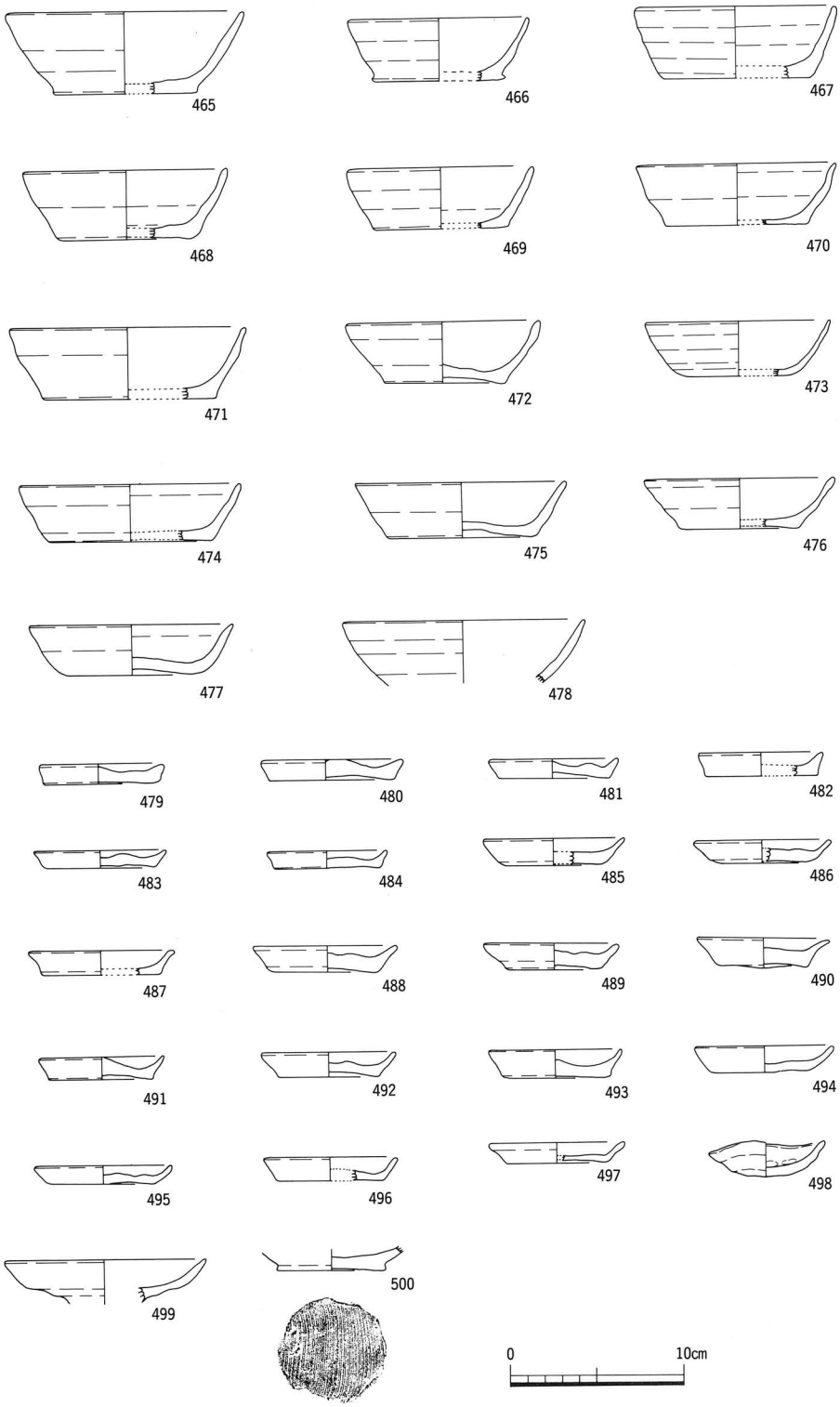
加え刃部としている。これらは端部に抉りをもつもの（449～452・457・458）と抉りを持たないもの（453～456・459）に分けられる。459は非常に小さいものであるがその形状から石庖丁と判断した。460は緑色片岩製の乳棒状磨製石斧の未成品である。全面に敲打痕をとどめ、基端部寄りの一部にのみ長軸方向の擦痕が認められる。461は緑色片岩製の磨製石斧の未成品の基部である。側縁部及び表面の一部に敲打痕をとどめる。表面には長軸方向と垂直に擦痕が認められる。462は緑色片岩製の柱状片刃石斧である。右側面と基部の一部に剝離をとどめ、

両側面に自然面を残す。前主面と後主面には長軸方向の擦痕を認める。体部に抉りは持たない。463は緑色片岩製の柱状片刃石斧の刃部である。464は砂岩製の砥石である。長軸の一端以外は全面使用されている。この砥石は出土地点からすると中世の遺物である可能性が高い。

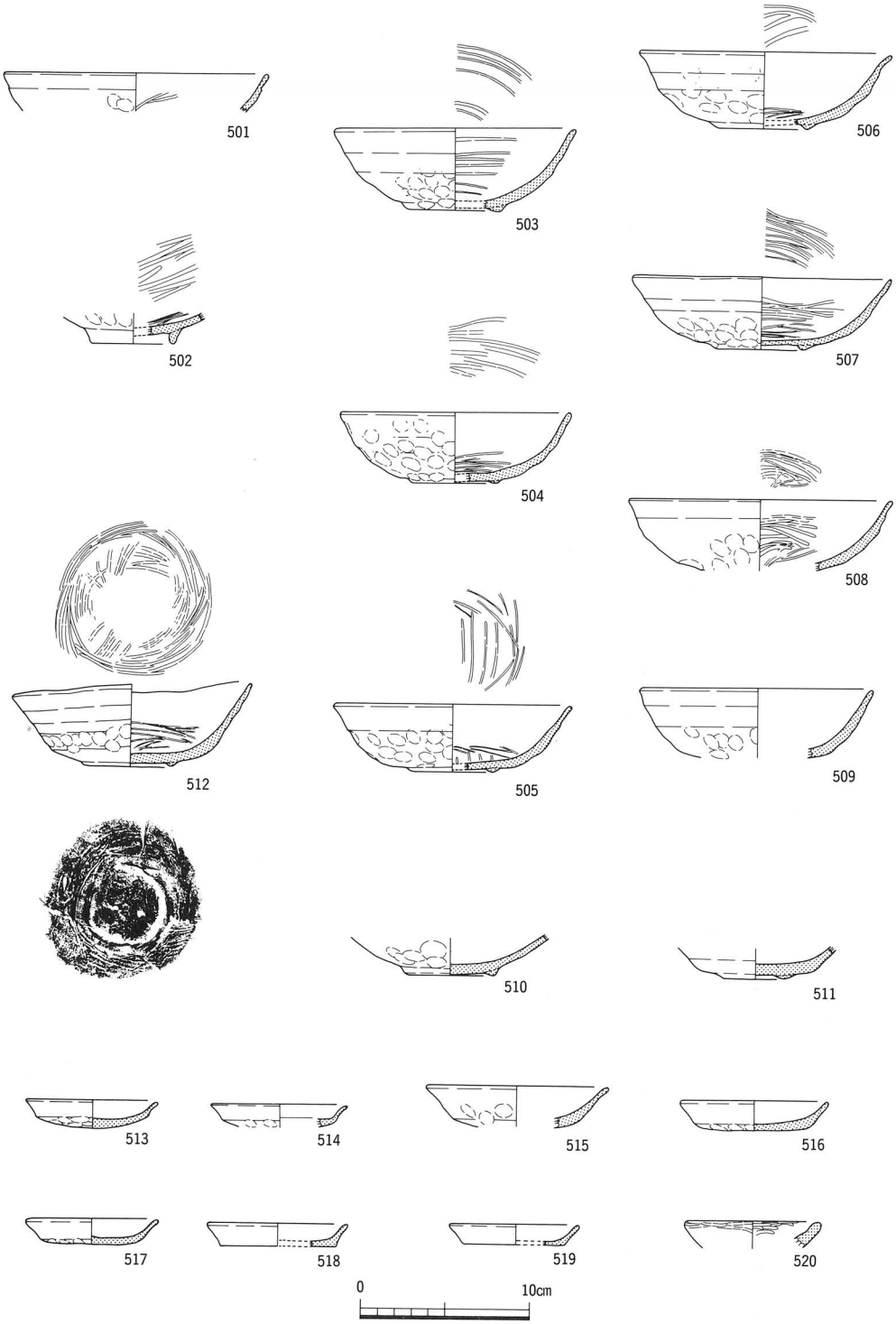
中世の出土遺物（第144～147図）

465～477は土師質土器の杯である。底部から口縁が急角度で立ち上がるものが多いが、その中でも、直線的に立ち上がるもの（465～467・469・471・474）、内反するもの（468・470・472・473・476）、外反するもの（475・477）などがあり、口縁部の形態は様々である。また全体の形状からすると、底径に比して器高の高いもの（465～473）、低いもの（474～477）の大要２類に分けられる。底部切り放しはすべて回転糸切りによるものであり、体部の内外面はともに回転台利用のヨコナデにより調整されている。478は体部が丸みを帯びて立ち上がるもので椀とも考えられる。479～498は土師質土器の皿である。口径6.2～8.2cm、器高1.0～1.6cmの間におさまる、いわゆる小皿である。口縁部の形態は、短く断面が三角形を呈するもの（479～484）、外反気味のもの（485～490・496・497）、内反気味のもの（491～495）等がありバリエーションに富む。底部切り放しはすべて回転糸切りにより、体部は内外面ともヨコナデにより調整されている。498は内外面にナデ、ユビオサエをとどめ、手づくねによる成形と考えられる。499は土師質の高台付き皿である。500は底部切り放しが静止糸切りによる皿の底部である。

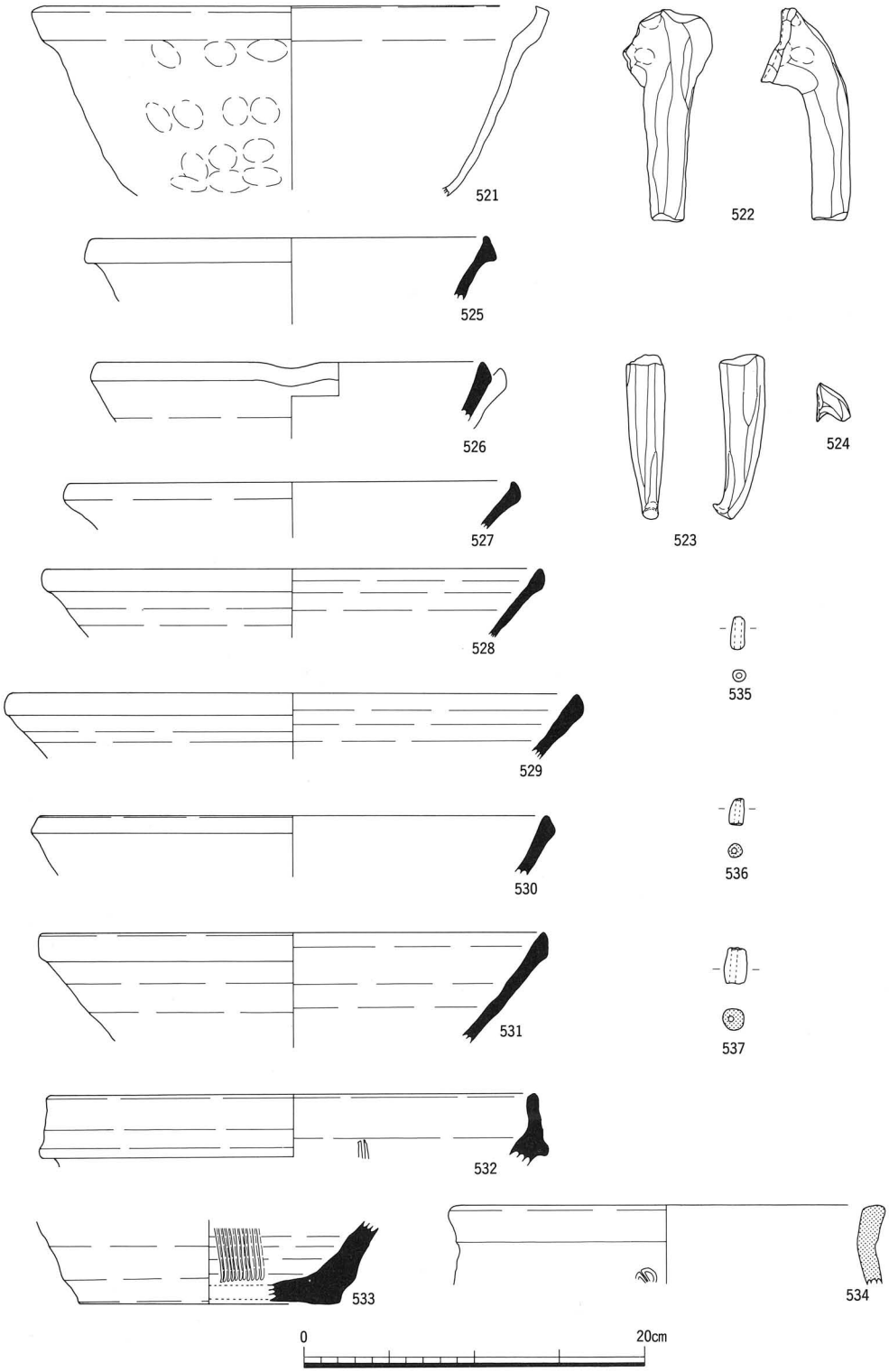
501～511は瓦器椀である。501・502は炭素の吸着が良好であり、暗灰色～黒灰色を呈する和泉型の瓦器椀である。503～510は焼成が軟質で炭素が吸着不良かあるいは未吸着の一群である。いずれも体部外面にユビオサエをとどめ、口縁部内外面をヨコナデ、体部内面にはヘラミガキを施すもので、底部に断面が半円形の低い高台を貼り付ける。また器壁は厚めで、底部付近が外方へ張り出し気味であるという特徴を持つ。511も同じく瓦器椀であるが底部付近までヨコナデの稜線が認められ、炭素は未吸着である。512は底部外面に回転糸切り痕をとどめる回転台成形によると考えられる瓦器椀である。プロポーションは、回転台成形による杯形を良くとどめており体部外面には底部付近までヨコナデによる稜線を残し、腰のあたりにユビオサエが集中する。底部には回転糸切り痕の上に無造作に粘土紐の低い高台を貼り付ける。体部内面にはヘラミガキが施される。焼成は軟質であり、炭素の吸着が不良である。513～520は瓦器の小皿である。513～517は底部にユビオサエの痕跡をとどめ口縁部が外反するもので、内面の調整はいずれもナデによるものである。丸底状の513～515、平底に近い516・517に分けられる。515は復元値であるが口径10.7cmを測る大形品である。518・519は底部回転糸切りの瓦器小皿である。内外面はヨコナデ調整であり、調整技法、プロポーションは、土師質土器の小皿と変わるところがない。520は厚手の小皿で口縁部内外面に横位のヘラミガ



第144図　包含層出土遺物　(11)



第145図　包含層出土遺物 ⑿



第146図　包含層出土遺物　(13)

キを密に施すものである。

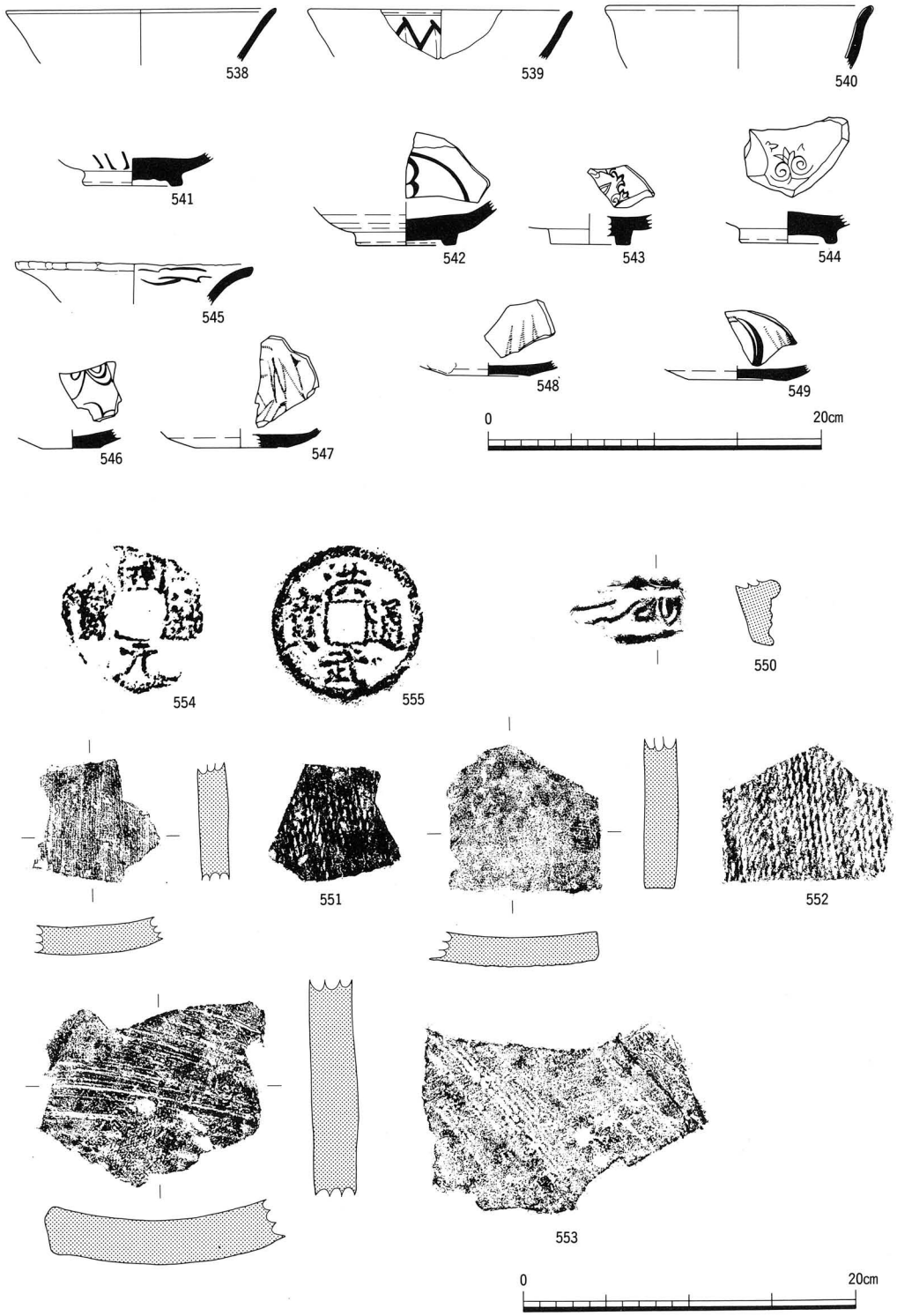
521は土師質土器の鍋である。口縁部は直立気味に外反し、体部外面はユビオサエをとどめる。522～524は土師質土器の鍋あるいは釜の脚部である。524はミニチュアの脚である。525～531は東播系のこね鉢である。いずれも内外面にヨコナデによる稜線が認められ、口縁部外面は重ね焼きにより黒色を呈する。破片はいずれも小片であり法量は復元値にならざるを得ない。片口部分の形状のわかるものは526の１点のみであり、他の破片も片口を持つのであろうが形状は不明である。口径は23.2～38cmを測り、大小の２種が認められる。体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるものがほとんどで、口縁端部を上下に拡張するもの（525）、上方につまみ上げるもの（527）以外はすべて肥厚し断面が丸みを帯びた三角形を呈するものである。525は森田編年[7]のⅢ期１段階、526～531はⅡ期２段階に相当する。532・533は備前焼きの擂鉢である。532は口縁部外面を上下に拡張し端面に凹線を施すもので間壁編年[8]のⅤ期（16世紀）にあたる。533は内外面をロクロナデし内面に11条１単位の櫛描条線を施す。534は瓦質の火鉢と思われる。体部上半に⃠状のスタンプを持つ。535～537は管状土錘である。535は土師質、536・537は瓦質である。

538～549は輸入磁器である。538は白磁碗で口縁部の釉をかきとる白磁Ⅸ類である。539は体部外面に鎬蓮弁をもつ龍泉窯系青磁碗Ⅰ－５類である。540は口縁部で外反し端部を丸くおさめる龍泉窯系青磁碗Ｄ類[9]である。541は体部外面に片彫りの蓮弁を持つ龍泉窯系青磁碗Ⅰ－５類の底部である。542は内面見込みに１条の圏線、その内側に片彫りの草花文を施すもので龍泉窯系青磁碗Ⅰ－４類の底部である。543は見込みに花文様のスタンプを施す龍泉窯系青碗Ⅰ－５類の底部である。544は見込みに渦巻き文風のスタンプを施す龍泉窯系青磁碗Ⅰ－５類の底部である。545は口縁部稜花、内面に草花文を施す龍泉窯系青磁高台付皿である。546は内面見込みに片彫りの花文を施す龍泉窯系青磁皿Ⅰ－１類である。547～549は内面見込みに片彫りと櫛描きにより文様を描出する同安窯系青磁皿Ⅰ類である。

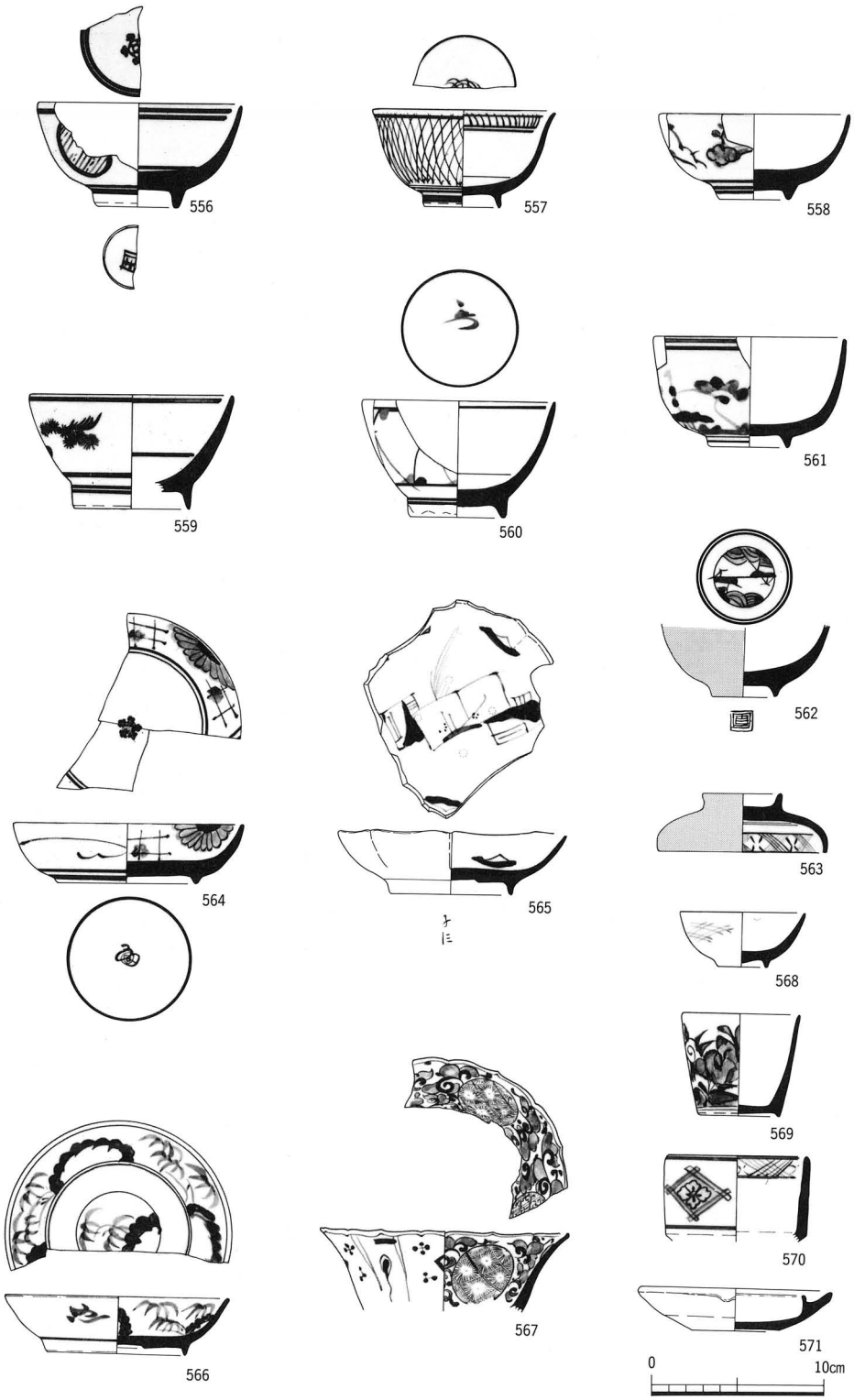
550～553は瓦である。550は軒平瓦で端面に唐草文を持つ。551～553は平瓦の破片である。それぞれ凸面に縄蓆文タタキ、凹面に布目を持つ。554・555は銅銭で554は開元通寶、555は洪武通寶である。開元通寶は縁帯を削る加工が施されている。

近世の出土遺物（第148図）

第11調査区の東側自然流路において近世陶磁器が集中して出土した。ここでは図化可能なものをあげ説明を加える。556～561は肥前系の染付碗である。556は外面に丸文、見込みに五弁花を施す。557は外面に網目文を描く。558は外面に梅樹文、内面見込みは蛇の目釉はぎを施す。559は広東形碗である。外面に松樹文を描く。560は体部に草花文を描く。561は肥前系の陶胎染付碗である。外面に黒みがかった呉須で草花文を描く。562・563は肥前系青磁であ



第147図　包含層出土遺物⑭



第148図　包含層出土遺物(15)

る。562は碗で見込みに青海波に帆船を描く。563は蓋である。口縁部内面に四方襷文を描く。564～566は肥前系染付の皿である。564は見込みに五弁花、内面に菊文を描く。裏銘は渦福である。565は稜花の皿で内面に山水図を描く。566は内面に雪輪に笹を描く。567は芙蓉手の鉢である。口縁は稜花で内面に唐草と丸窓を描く。丸窓内は菱繋ぎと卍崩しが描かれる。568は肥前系染付の小碗である。569は肥前系染付の猪口である。外面に草花文が描かれる。570は肥前系染付の筒形碗である。外面に井桁花菱文、口縁部内面に四方襷文が描かれる。571は陶器の灯明具である。内面に灰オリーブ色の釉を施している。これら近世陶磁器は概ね18世紀後半～19世紀にかけてのものと思われる。

注

（1）　横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』四　1978

（2）　尾上　実「南河内の瓦器椀」『藤沢一夫先生古希記念古文化論叢』1983
森島康夫「畿内山瓦器椀の併行関係と暦年代」『大和の中世土器II』1992

（3）　倉吉市教育委員会「倉吉の鋳物師」1986　なお、本報告中で使用した鋳造用語は基本的に本書に拠った。

（4）　北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室「室町遺跡」1990

（5）　神奈川県埋蔵文化財センター「北原（№9）遺跡内長福寺址」『宮ヶ瀬遺跡群III』1993

（6）　田辺昭三「須恵器大成」角川書店　1981

（7）　森田稔「東播磨」『東日本における古代・中世窯業の諸問題』大戸窯検討のための「会津シンポジウム」資料　1992

（8）　間壁忠彦「備前」『世界陶磁全集3　日本中世』小学館　1977

（9）　上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究№2』1982

3　弥生時代の遺物と遺構

(1)　前田遺跡出土の弥生土器について

今回の調査で出土した弥生土器は器種のわかるものでは壺形土器、甕形土器、鉢形土器、高杯形土器、ミニチュア土器などがある。全体を概観すると甕形土器が量的に多く、次いで壺形土器、高杯形土器の順となる。壺形土器の口縁部や頸部、甕形土器、高杯形土器の口縁部に施文された文様を概観すると凹線文を施すもの、擬凹線文[1]を施すもの、無文のものがみられる。弥生土器の編年観によると凹線文の盛行期は弥生時代中期後半（畿内第Ⅳ様式併行期）とされており、本遺跡出土土器も中期後半以降の様相を示すものと考えられるが、擬凹線を施すもの、無文のもの等より後出する要素もみられることから本遺跡出土土器の大半は弥生時代中期末葉～後期初頭の時期におさまるものと考えられる。

個々の土器については全体の形状のわかる個体はわずかであり、細部の形態変化を抽出するのは困難である。そこで、ここでは出土状態の比較的良好な集石土坑SK1004より出土した遺物を中心に前田遺跡における弥生時代中期末葉～後期初頭にかけての土器相を観察しておきたい。

SK1004は第6調査区で検出された集石遺構である。その構築過程の復元は前述したため再述は避けるが、出土遺物は一括性を持つと考えられる。

98の壺形土器は口縁端部に凹線文3条、体部と頸部の境に左下がりの篦圧痕文を巡らせ体部外面上半タタキ後タテハケ、下半ヘラミガキ、内面上半ユビオサエ、下半ヘラケズリを施す。こうした土器は香川県詫間町紫雲出山遺跡[2]の壺A_2、吉原町矢ノ塚遺跡[3]の壺B_3－（2）、北原遺跡[4]の壺Ab1に対応し、紫雲出山遺跡では紫雲出山Ⅲ式（中期4）、矢ノ塚遺跡では矢ノ塚Ⅳ（中期3・4）に位置づけられる。99も98とほぼ同様の形態を示すが、口縁端部の凹線文は若干退化気味である。101は口縁部外面に幅広の凹線と篦圧痕文を施すもので、紫雲出山遺跡壺C_2、矢ノ塚遺跡壺F_4、光勝院寺内遺跡[4]壺B_3、北原遺跡壺Bcに対応する。102は細い筒状の頸部に凹線文B種を施し、内面上半にヘラケズリが認められる。北原遺跡の壺Ab1、紫雲出山遺跡壺A_3に対応する。103は頸部が短く直立するもので端部を内外に拡張している。紫雲出山遺跡壺D_2、矢ノ塚遺跡壺H_4に対応する。101～103は紫雲出山遺跡では紫雲出山Ⅲ式、矢ノ塚遺跡では矢ノ塚Ⅳ（中期3・4）、備前では正岡編年[5]のⅣ－2に位置づけられている。これら壺形土器はいずれも口縁部・頸部に凹線文A種あるいはB種[6]を施すもので、中期後半～末葉にかけて広く認められる器形である。内面のヘラケズリは98が下半まで、102が頸部直下までほどこされており、壺形土器には内面のヘラケズリが上半まで及ぶ個体が認められる。

104～107の甕形土器はいずれも体部外面にタテハケ、内面に口縁直下までのヘラケズリを

施すもので、口縁端部に凹線を持つもの、擬凹線を持つもの、無文のものがある。104は北原遺跡では甕C_1の一部、光勝院寺内遺跡では甕２の一部に対応する。香川県高松市大空遺跡[7]でも同様の形態が出土している。105・106は北原遺跡の甕C_2の一部に対応する。107は北原遺跡の甕A_1の一部に対応し、集石土壙３で甕棺に転用されていたものに近似する。甕形土器は凹線文をとどめるものが１点あるが総じて無文化の傾向を示す。口縁端部の形態も凹線文をもつ個体でも端部の拡張自体はわずかなものであり、方形に近くなっている。体部内面のヘラケズリはいずれも口縁部直下まで及んでおり、本遺跡で中期末葉と考えたSB1005出土の甕形土器に比べ明らかに新しい様相を見せる。

116・117は異なる形態をもつ高杯形土器である。116は杯部が浅く、口縁部が直立し端部を外側に拡張するなどの特徴が認められ、北原遺跡の高杯Aaと対応する。備前では正岡編年のⅤ－１様式に位置づけられ後期以降に出現する形態とされている。また香川県において後期初頭に位置づけられる[8]大空遺跡出土資料の中にも見られる。117は口縁部がC字形に内屈し端部を丸くおさめるといった特徴が認められ、紫雲出山遺跡の高杯B_1、矢ノ塚遺跡の高杯B_1に対応する。紫雲出山遺跡では紫雲出山Ⅲ式（中期４）、矢ノ塚遺跡では矢ノ塚Ⅳ（中期３・４）に位置づけられる。讃岐では中期末の器形とされているが、観音寺市一の谷遺跡群[9]大型土坑では後期の土器と共伴しており、後期まで存続するものと考えられる。

以上のようにSK1004においては中期末葉の土器相とより後出の後期的な土器相が共存する。このような共存状態は北原遺跡土壙３においても見られる。北原遺跡ではこうした状況をふまえた上でその時期を後期に下る可能性を指摘しながら、弥生時代中期最終末とした。菅原康夫氏は北原遺跡土壙２・３出土資料について吉野川下流域の編年[10]で後期初頭（後期Ⅰ）の年代観を与えており、後期初頭はⅣ様式の凹線文がそのまま残る段階と捉えている。このように中期末葉～後期初頭にいたる土器の変化はきわめて漸移的なものであるが、本遺構ではⅣ様式の要素が色濃く残る壺形土器に加え、内面上半までのヘラケズリ、口縁部無文化の傾向を示す甕形土器、後期の器形とされる口縁部が直立、端部を外方に拡張する高杯の組み合わせを後期初頭の組成を示す一群と捉えておきたい。

(2) 前田遺跡出土の石器について

本遺跡出土の石器の内容は図示したもので、ナイフ形石器４点、翼状剥片１点、横長剥片１点、石核２点、有舌尖頭器１点、石匙２点、石鏃51点、石庖丁21点、スクレイパー５点、石斧８点、円盤状石製品１点、磨石３点、砥石３点、台石１点である。構成数からみると、石鏃が圧倒的多数を占め、次いで石庖丁、石斧、スクレイパー、磨石と続く。

石材から見ると旧石器及び石鏃、石匙、スクレイパーはサヌカイト製、石庖丁は結晶片岩製、磨製石斧は緑色片岩製であり、磨石、砥石、台石には砂岩が用いられている。なお402の

ナイフ形石器、407の有舌尖頭器、154・415・426の石鏃はチャート製であり、小形の剝片石器のほとんどがサヌカイト製で占められる吉野川北岸地域においては特徴的な石材利用である。

第２表は本遺跡出土の石器を器種別、石材別に計数したものである。

時期		旧石器				縄文				弥生							
器種 / 石材		ナイフ形石器	翼状剝片	横長剝片	石核	有尖頭舌器	石匙	石斧	石鏃	石包丁	イスパクトレ	石斧	円盤状石製品	磨石	砥石	台石	石材計
遺構内	サヌカイト	0	0	0	0	0	0	0	15	0	0	0	0	0	0	0	15
	チャート	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
	片岩	0	0	0	0	0	0	0	0	10	0	4	1	2	0	0	17
	砂岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	2	5
	小計	0	0	0	0	0	0	0	16	10	0	4	1	3	2	2	38
包含層	サヌカイト	3	1	1	2	0	2	0	33	3	5	0	0	0	0	0	50
	チャート	1	0	0	0	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	4
	片岩	0	0	0	0	0	0	1	0	8	0	3	0	0	0	0	12
	砂岩	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計	4	1	1	2	1	2	1	35	11	5	3	0	0	0	0	66
器種計		4	1	1	2	1	2	1	51	21	5	7	1	3	2	2	104

第２表　前田遺跡、石材別石器組成表

⑶　弥生時代の遺構について

前田遺跡を含む土成町一帯の扇状地上に展開される遺跡群は旧石器時代の遺物、縄文時代の遺物、遺構が確認されているが、明確な形で集落が形成されるのは弥生時代中期以降である。今回の調査では弥生時代中期末葉～後期初頭を中心とした集落跡が確認された。遺構の内訳は竪穴住居跡５軒、掘立柱建物跡８棟(内１棟は時期不確定)、集石土坑２基、土坑17基、溝１条である。これらは弥生時代後期初頭をもって消滅し、以後平安時代後半にいたるまでの遺構は検出されていない。ここでは特に調査地の西半で検出された、ほぼ同時期と考えられる竪穴住居跡と掘立柱建物跡を中心に集落構成についてまとめる。

竪穴住居について

今回の調査で弥生時代中期末葉に属する竪穴住居跡は５軒確認できた。SB1001～1004は遺跡の西側に集中して検出された。住居同士の切り合いもなく、出土遺物からみる限りこれら４軒の時期差の抽出は困難であり、ほぼ同時期に並存したと考えられる。

これら竪穴住居跡の規模、形態をまとめると

	規模	平面形	
SB1001	(13.5)m²	隅丸方形	復元値
SB1002	33.7m²	円　形	
SB1003	(39.0)m²	円　形	復元値
SB1004	34.4m²	円　形	

となる。SB1002～1004は規模、形態ともほぼ同様であり、徳島県内での中期の住居形態[11]と同様の傾向を示す。また大要30m²の床面積も中期の住居規模[12]の範囲を大きく出るものではない。SB1001は復元値で約15.5m²の床面積が得られた。他の住居跡より小規模であり板野郡上板町天神山遺跡[13]で確認された後期前半の隅丸方形の住居跡に近い形状を示す。

炉は床面の中央に設けられている。形態はファイヤーピットともいうべき、明確な掘り込みを持ち、内部に焼土や炭化物が充満するものである。規模が明かなSB1002で152×97×30cm、SB1004で144×68×22cmを測り、いずれも楕円形の平面プランを持つ。

主柱穴はSB1001が4本柱、SB1002が6本柱、SB1004が8本柱、SB1003は8～10本柱というように主柱穴の構成ではバリエーションがある。

出土遺物で特徴的なものにSB1004より出土した多数の土器片利用の紡錘車があげられる。図示したものは21点であるが、破損品や未製品を含め32点が出土している。全て土器片の周縁を丸く打ち欠いたもので、土製紡錘車B種[14]にあたる。直径が3～5cm、厚さ0.2～0.6cm、重さは3.7～16.5gを測る。1軒の住居内より多数の紡錘車が出土した例として県内では鳴門市光勝院寺内遺跡1号住居址があげられる。両者の内容はほぼ同様であるが、SB1004の例では直径の小さなもの（3cm前後）と大きなもの（4cm以上）の2種に大別でき、その使途の違いが考えられる。SB1004内からはこの他に大形の有茎石鏃、石庖丁、台石などの石器も多く出土している。

竪穴住居跡（SB1005）について

今回第14調査区で検出されたSB1005は平面形が長方形を呈する弥生時代中期末葉の長方形住居である。中期以降原則的に円形の平面プランを持つとされてきた徳島県内の弥生時代の竪穴住居の中では特異なタイプであり、現時点では阿波郡阿波町日吉谷遺跡[15]において弥生時代中期中葉の2例が調査されているのみである。ここでは今回確認された長方形住居の特徴をまとめ、今後の資料としたい。

A・床面積は南側の一部に攪乱を受けているが、18m²前後と推定される。

B・炉は床面北半に位置する平面長楕円形のファイヤーピットである。

C・主柱穴は棟持柱と推定される2本を含む側壁際の12基の柱穴で構成される。

D・周壁溝を持ち、床面中央に間仕切と考えられる溝を持つ。

特に床面上の炉の偏在と二分する小溝の存在により、住居内が何らかの使い分けをされていた事が推察できる。出土遺物は比較的良好な状態であり、覆土中の床面に近いところで完形の高杯や柱状片刃石斧が出土している。

掘立柱建物跡について

掘立柱建物跡は第6調査区で確認された竪穴住居群の周囲で8棟を検出した。内訳は第1調査区に1棟、第2調査区に3棟、第3調査区に2棟、第7調査区に2棟である。柱穴内の出土遺物はSA1004とSA1006にやや古相の土器が見られる他は、概ね中期末葉におさまるものと考える。いずれも棟方向を東西に向け、等高線に対し平行に向く。全て側柱のみで構成され、規模は1間×2間（SA1003・1004・1005・1008）1間×3間（SA1001・1006・1007）2間×4間（SA1002）となる。これら掘立柱建物跡は一方に居住施設としての竪穴住居が存在する事を考え併せると倉庫的な機能を持つものであったと考えられる。

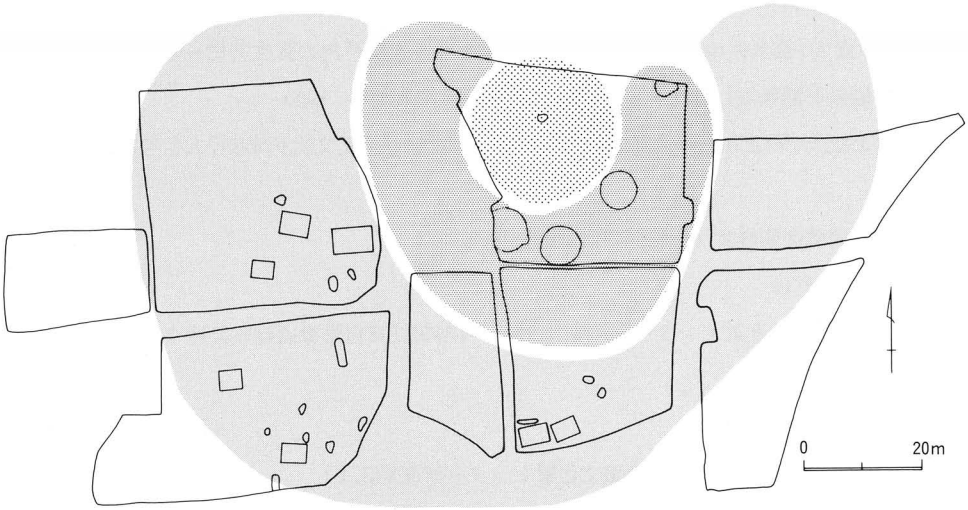
集落の構成と範囲について

本遺跡の弥生時代の集落は調査地の西半、第1調査区から第7調査区に検出された。調査地は北側の阿讃山脈から南にかけて緩やかに下る扇状地上にあり、最も高い第6調査区の北側で標高75.9m、最も低い第3調査区の南側で標高72.9mと比高差で3mを測る。竪穴住居は第6調査区の北側のSB1001から南側のSB1004に至るまで等高線に対し弧状に配置される。第6調査区の西側は自然流路で寸断されており遺構の有無は確認できなかったが竪穴住居や掘立柱建物の配置からすると一定の遺構の広がりはあったものと考えられる。竪穴住居が弧状に囲む部分は面積にして1000m²足らずであるが、この部分は遺構の密度が極端に低く、確実に弥生時代に属する遺構は後期初頭と考えられるSK1004の集石土坑1基のみである。このことからこの一帯を集落内の広場的な機能を果たしていた場所と考えることも可能である。またSK1004はその形状や遺物の出土状況から集落内の祭祀に伴う遺構であると考えられ、これが集落の終末時期と考えられる後期初頭に広場内に構築されていることは遺構の性格を考える上で興味深い点である。掘立柱建物は竪穴住居群をとりまく形で南側と西側に確認されており、竪穴住居の南にSA1001とSA1006、自然流路をはさんで南西側にSA1007とSA1008、西側にSA1002とSA1003とSA1004が配置される。第5調査区は弥生時代以降の自然流路が通っており遺構の確認はできなかったが本来的にはこの部分にも掘立柱建物が構築されていたものと考えられる。土坑は竪穴住居周辺よりも掘立柱建物の周辺でより多く確認されている。

以上竪穴住居、掘立柱建物跡、土坑の三者を中心に集落内における占地状況を概観してきたが、中心に遺構のない空間（広場）を持ち、それをとりまく形で弧状あるいは円形に配さ

れた住居群、さらにそれをとりまく形で掘立柱建物群と土坑群が巡るといった集落景観が復元できる。これら一単位と考えられる集落の規模であるが、東西方向に関しては溝や濠、柵列など集落の縁辺を区画する遺構は確認されず、南北方向に関しては未調査部分のため明確にしがたい。そこで遺構の配置や密度からその規模を考えると、竪穴住居跡を中心として半径60m余り、面積にして8,000～10,000m²程の範囲に及ぶと推定できる。

（第149図）



第149図　前田遺跡弥生集落模式図

注

（1）　擬凹線文の呼称については「壺形土器、甕形土器、器台形土器の口縁部などに凹凸のある施文具で直線的に引いた場合などの紋様が擬凹線紋と呼ばれている。」という使用が一般的であるが、徳島県内では鳴門市光勝院寺内遺跡の分類以来「ヨコナデによる起伏で凹線状を呈する」文様と捉えられている。本書も後者に従った。

正岡睦夫「凹線文・擬凹線文」『弥生文化の研究31』雄山閣　1986

徳島県教育委員会『光勝院寺内遺跡』1984

（2）　小林行雄・佐原真『紫雲出』詫間町文化財保護委員会　1964

（3）　香川県教育委員会「矢ノ塚遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告3』1987

（4）　徳島県教育委員会「土成町北原遺跡」『内陸工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1988

（5）　正岡睦夫「備前地域」『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』木耳社　1992
（6）　前掲注（2）
（7）　香川県史　第十三巻　資料編　考古　四国新聞社　1987
（8）　大久保徹也「香川県の後期弥生土器」『土器からみた瀬戸内の弥生文化－瀬戸内の弥生後期土器の編年と地域性』古代学協会四国支部第四回大会資料　1990
（9）　香川県教育委員会「一の谷遺跡群」『四国横断自動車道道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書７』1990
(10)　菅原康夫「徳島県の弥生後期土器」『土器からみた瀬戸内の弥生文化－瀬戸内の弥生後期土器の編年と地域性』古代学協会四国支部第四回大会資料　1990
菅原康夫「阿波弥生時代終末期の特質」『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズⅤ　1992
(11)　徳島県教育委員会『光勝院寺内遺跡』1984
(12)　前掲注（11）
(13)　徳島県埋蔵文化財センター「天神山遺跡」『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1993
(14)　前掲注（2）
(15)　「日吉谷遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報Vol.１』

4　中世の遺物と遺構

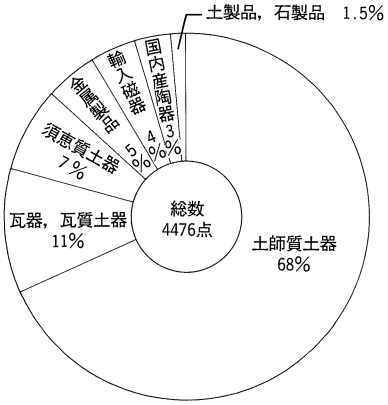
(1)　中世の遺物について

前田遺跡出土の中世遺物の構成を考える場合その素材となし得る良好な一括資料に恵まれない。そのためここでは出土した中世遺物全点数を計数し、それを基に分析を加えたい。

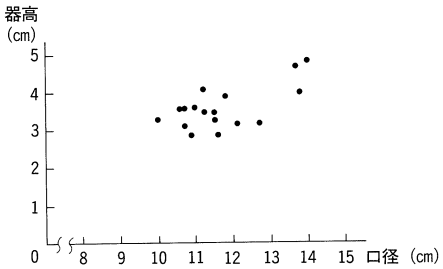
本遺跡出土の中世遺物の計数を元にその比率を種類別に円グラフに示したのが第150図である。これによると当遺跡で出土の割合が最も高いのは土師質土器で７割近くを占める。次いで瓦器・瓦質土器、須恵質土器、金属製品、輸入磁器、国内産陶器、土製品・石製品の順となる。これから指摘できることは、前田遺跡において日常使用された土器の中では土師質土器が圧倒的多数を占め、それに次いで瓦器、瓦質土器・須恵質土器が使用されたという点である。また輸入磁器は少数にとどまり、日常の生活においては貴重品とされたことが窺われる。こうした傾向は13世紀後半～14世紀にかけて吉野川下流に営まれた集落である中島田遺跡[1]においても認められる。ただ中島田遺跡では日常雑器に占める搬入品の割合が高いのに比べ、当遺跡では逆に在地生産品が主流を占めるという相違点が指摘できる。

次に出土した遺物のうち主なものについて概観する。

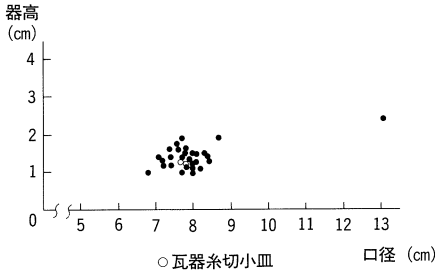
当遺跡出土の土師質土器はそのほとんどが杯皿といった供膳具で占められる。前田遺跡では土師質の椀形態は１点も出土しておらず、供膳具の椀形態に関しては後述する瓦器椀により占められる。土師質土器杯は内外面



第150図　前田遺跡出土中世遺物の分類



第151図　土師質土器杯の法量分布



第152図　土師質土器皿の法量分布

にヨコナデによる調整を施し、底部を回転糸切りにより切り放す。胎土は砂粒を少量含むものが大部分であり、焼成はやや軟質で橙色あるいは淡黄色を呈するものが多い。形態的には口縁が急角度に立ち上がり、直線的なもの、内反するもの、外反するものなど口縁部の形態にバリエーションが認められる。法量は破片での出土が多かったため復元値に頼らざるを得ず正確な値とはいいがたいが、一応の目安になるものは与えられると考える。土師質杯のうち口径と器高の明かなものについて第151図に示した。これによると465と471の2点を除くと口径10.0～12.7cm、器高2.9～4.1cmの間に分布し、平均値で口径11.6cm、器高3.3cm、底径7.6cmを測る。

土師質土器皿はそのほとんどが小皿である。内外面に杯と同様ヨコナデによる調整を施し、底部を回転糸切りで切り放す。胎土は微砂粒を少量含み、焼成はやや軟質で橙色あるいは淡黄色を呈する。器壁は厚いものと薄いものに分かれ、厚いものは概して口縁部が短く断面が三角形を呈する。薄いものはやや深めで、口縁部が外反するもの、内反するものに分けられる。法量については第152図に示した。これによると大形の皿である201を除き、口径6.7～8.7cm、器高1.0～1.9cmの間に分布し、平均値で口径7.7cm、器高1.4cm、底径5.9cmを測る。

底部回転糸切り技法は徳島県内の中世遺跡より出土する土師質土器の杯、皿に普遍的にみられる技法である。このような土器は吉野川下流域の徳島市阿波国府跡第6次[2]・第9次[3]、名東遺跡[4]、中島田遺跡、板野郡板野町古城遺跡[5]、黒谷川宮ノ前遺跡[6]、吉野川中流域においては前田遺跡をはじめ板野郡上板町神宮寺遺跡[7]、阿波郡阿波町日吉谷遺跡などで出土している。この底部回転糸切り技法の徳島県内での出現時期であるが、吉野川下流域右岸の阿波国府跡第6次調査SK44では底部回転ヘラ切りの小皿と回転糸切りの小皿が和泉型瓦器椀と共伴して出土しており、12世紀後半頃に比定される。名西郡石井町ひびき岩16号墳[8]においては横穴式石室再利用時の出土遺物中、杯の底部はヘラ切りであり年代的には共伴する白磁碗から12世紀半ばと考えられる。吉野川下流域左岸においてはセンター調査の古城遺跡C地点SK1057でヘラ切りの杯と糸切りの杯が和泉型瓦器椀、小皿と共伴しており、12世紀後半のものと考えられる。これらヘラ切り技法と糸切り技法の共伴例からすると吉野川下流域においては底部糸切り技法の導入は12世紀後半～末にかけて行われたものと考えられる。

前田遺跡の位置する吉野川中流域左岸では該期の遺跡が未調査であるため、底部切り放しの技術的な転換時期については不明な部分が多い。ただ前田遺跡の13世紀代に位置づけられる土師質土器杯、皿の底部の切り放しは全て回転糸切り技法によっており、この点からすると前田遺跡の土師質土器供膳具の製作技法は吉野川下流域における土師質土器製作技法と共通しているといえる。

土師質土器の煮沸具には鍋・釜及び脚がある。図示した土師質鍋176・521はいずれも口縁

部が「く」字状に外反するもので、口縁部上面を凹面に作る。体部外面にはユビオサエ、内面にはナデを施す。形態上は中島田遺跡で報告された鍋BⅡ類に近く年代的には13世紀末～14世紀が考えられる。

瓦器は椀、皿、瓦質土器は釜、脚、火鉢などが出土している。このうち多数を占めるものは瓦器椀及び皿である。これら瓦器の供膳具は和泉型瓦器の搬入品と在地生産されたと考えられる一群が交錯しており当遺跡における供膳具組成上の特徴を表している。詳細については次節で述べる。

須恵質土器は図示した全てが東播系のこね鉢である。他に東播系の甕の体部破片らしきものも見られたが細片のため判断できなかった。時期的には森田編年のⅡ期２段階とⅢ期２段階のものがあり、実年代で12世紀末～14世紀後半におさまるものであろう。

国内産陶器は備前窯の擂鉢が若干出土している。間壁編年のⅤ期にあたる。徳島県内の14～16世紀にかけての遺跡からは備前窯の擂鉢、甕等が大量に出土することから考えて、前田遺跡における備前窯製品をはじめとする国内産陶器の擂鉢の出土割合の低さは遺跡の盛行時がこの前段階で終わっていることを示すものと考えられる。

輸入磁器の碗形態は龍泉窯系のものが大半を占め、確実に同安窯系のものと見られるものはなかった。龍泉窯系の青磁碗では横田・森田分類のⅠ－５類が多いが、図示しなかったもの中にはⅠ－４類も見られ、全体に12世紀後半～13世紀半ばにかけての年代が考えられる。このほか上田分類D類や横田・森田分類の白磁Ⅸ類など14～15世紀にかけてのものも見られる。皿では龍泉窯系のものと考えられる546が１点出土している以外は同安窯系皿Ⅰ類が主体を占める。同安窯系皿Ⅰ類は横田・森田分類によると12世紀中半ば以降に位置づけられる。また545の龍泉窯系高台付き皿は15世紀代とされている。このように前田遺跡出土の輸入磁器は12世紀半ば～13世紀半ばを一つのピークとし、それに14～15世紀代のものが少量加わるという傾向を見せる。

(2) 中世の遺構について

掘立柱建物跡

掘立柱建物跡で確認できたものは全部で８棟であった。全て調査地の東側、第11調査区の比較的狭い範囲に集中して検出されたものである。その規模は全て梁間１間、桁行２間と小規模なものであり、柱間寸法には1.3～1.6mとやや間隔の狭いものと1.9～2.5mと間隔の広いものがあり、柱穴の配置は不規則なものが多い。柱穴の規模は直径0.3～0.5mのものが最も多く、深さは削平の度合いにもよるが0.3～0.5mのものが多い。底部に根石を持つものはなく、当遺跡では根石を据えた建物は一般的ではなかったようである。８棟の建物はその棟方向より大きく３群に分けられる。

Ⅰ群：真北に対して１～２°西あるいは東に振るもの（SA1009・SA1010・SA1011・SA1016）
Ⅱ群：真北に対し70°前後西に振るもの（SA1012・SA1013）
Ⅲ群：真北に対し５°前後西に振るもの（SA1014・SA1015）

となり、SA1012とSA1013が大きく西に振れる他はほぼ真北方向に沿うものである。これら三群の建物は柱穴の切り合いによりSA1014とSA1015はSA1009より新しく、SA1015はSA1013より新しいことがわかる。こうした切り合いや建物の重複からすると、この建物群は少なくとも３回にわたる建て替えが行われたと考えられる。こうした建て替えによる時期差が柱穴内の出土遺物に反映されているかどうかは判断できなかったが、この建物群の中で最も古いと考えられるⅠ群のうちのSA1009より出土した小皿は13世紀代のものとおさえられる。

土坑・土壙墓

中世の土坑と確認できたものは18基にのぼる。これらの土坑は規模、形態とも様々であり、SK1005が石組墓の残欠と推測できる以外は貯蔵穴、ごみ捨て穴などの用途が想定できるが出土遺物よりこれを明確にできるものはない。15世紀代の土壙墓ST1001は平面形長方形で副葬品と考えられる土師質土器杯が１点出土している。同時期の県内の類例としては市場町日吉～金清遺跡[9]で検出されている３基の土壙墓があげられる。方形あるいは長方形の平面形を呈し遺体は屈葬されており、副葬品も土師質土器の供膳具が数点認められるだけなど本例と共通する点が多い。

鍛冶遺構

鍛冶遺構は第２調査区のおよそ15m四方の中に６基が検出された。これら鍛冶遺構は長径１～２ｍ前後の楕円形の土坑と直径0.3m前後の柱穴状の土坑に分類できる。前者にはSH1001～1004、後者にはSH1001のＰ１・Ｐ２、SH1006、SH1007が相当する。遺構内より鍛冶滓が出土しており、前田遺跡において小鍛冶が行われたことが明らかになった。操業時期は13世紀代と考えられるが、徳島県内では該期の鍛冶遺構は上板町神宮寺遺跡で確認されているのみである。神宮寺遺跡の鍛冶遺構も楕円形の土坑に小ピット２基が伴うものであり本遺跡のSH1001と形態上共通性が認められる。前田遺跡における鍛冶遺構のあり方の特徴は比較的狭い面積に数基の鍛冶遺構が集中して検出される点であり、作業場的な空間利用がなされていたものと考えられる。

炭窯

炭窯は７基検出されている。規模により長径２～４ｍ前後のものと５ｍ以上のものの大要２種に分類できる。また主軸の方向では北西方向に振るもの、北東方向に振るもの、西に振

るものの3群に分類できるが、その方向はおよそ等高線に沿ったものといえる。平面形の形状は隅丸の長方形のもの（SO1001・SO1002）、楕円形のもの（SO1003・SO1007）、窯体の一方に突出部を持つもの（SO1004・SO1005・SO1006）がある。またSO1005は突出部寄りの底面に2個1対の小ピットを持つ。これら炭窯は菅原康夫氏の論考[10]により、稼働形態として「伏焼木炭窯」が考えられている。徳島県内ではこうした形態の炭窯は近年調査事例が増加しており、足代遺跡[11]、金蔵～上井遺跡[12]、日吉～金清遺跡等で報告されている。時期的には平安時代後半～鎌倉時代にかかるものであり、阿波における木炭焼成の形態としては一般的なものであったと考えられる。操業時期は13世紀代が考えられることから、これら炭窯で得られた木炭が同時期の鍛冶遺構で行われた小鍛冶の燃料として供された可能性が高い。

注

（1）　徳島県教育委員会「中島田遺跡」『県道徳島鴨島線改良事業にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書』1989

（2）　徳島市教育委員会『阿波国府第6次調査概報』1988

（3）　徳島市教育委員会『阿波国府第9次調査概報』1991

（4）　徳島県教育委員会「名東遺跡（天神地区）」『県営名東町団地建て替えに伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1990

（5）　徳島県埋蔵文化財センター「古城遺跡（C地点）」『徳島県埋蔵文化財センター年報Vol. 4』1993

（6）　徳島県埋蔵文化財センター「黒谷川宮ノ前遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報Vol. 2』1991

（7）　徳島県埋蔵文化財センター「神宮寺遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報Vol. 3』1992

（8）　石井町教育委員会『ひびき岩16号墳発掘調査報告書』1986

（9）　徳島県埋蔵文化財センター「日吉～金清遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報Vol. 1』1990

（10）　菅原康夫「遺物を持たない遺構－伏焼木炭窯に関する予察－」『徳島県埋蔵文化財センター年報Vol. 2』1991

（11）　徳島県教育委員会「足代遺跡－小原地区発掘調査」『徳島県埋蔵文化財調査概報昭和54年度』1982

（12）　徳島県埋蔵文化財センター「金蔵～上井遺跡」『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1』1993

5　考察

(1)　前田遺跡の在地生産瓦器について

前述したように前田遺跡より出土した瓦器椀、小皿には和泉型瓦器の搬入品以外に在地生産されたと考えられる一群が存在することが明らかになった。ここではそれら在地生産瓦器の形態的特徴や年代についてまとめ、吉野川中流域に展開された瓦器生産の様相を概観し、供膳具組成上の地域色の一端を明らかにしたい。

今回の調査で出土した瓦器椀は３種に分類できる。一つは畿内産の和泉型瓦器椀の搬入品と考えられるもの。一つは和泉型瓦器椀の成形手法を模倣し生産されたと考えられるもの。一つは在来の土師質土器製作技法を応用して椀形態を作り、瓦質焼成した考えられるものである。

在地生産瓦器の形態

和泉型瓦器椀と考えられるものは188・197・206・501・502である。いずれも口縁部から体部にかけての破片、あるいは底部の破片である。全体の形状がわかるのは206の１点のみである。半球形の体部に断面三角形の高台を貼り付けたもので内面には粗いヘラミガキを施す。口縁部は強いヨコナデにより段を持ち尾上分類のⅢ－１ないし２期に属する。これら和泉型瓦器椀は後述する在地生産瓦器椀に比べると明らかに硬質で器壁も薄い。

和泉型瓦器椀の模倣形態と考えられるものは178・179・186・196・198・503～511である。全体の形状のわかるものは186・196・507である。この３点の法量の平均は口径14.8cm、高台径4.9cm、器高4.2cmを測る。このタイプの瓦器椀は体部外面にユビオサエ、口縁部にヨコナデ、内面にはヘラミガキを施し技法上は和泉型瓦器椀に通じるものである。このタイプの特徴としては、①器壁が厚く、最大で６㎜に達するものもある。②口縁部のヨコナデが同時期の和泉型のものに比べ明瞭さを欠く。③器形は底部から体部にかけて強く腰が張り出す形で杯形に近い。④高台の貼り付け方が粗雑で、太い粘土紐を無造作に貼り付ける。断面は低い半円形となる。⑤内面のヘラミガキは粗く、見込みは平行線上のものが多い。⑥胎土は比較的精良であるが、焼成が軟質で脆い。⑦炭素の吸着が不良あるいはなされておらず、黒褐色～褐灰色を呈する。以上のようにこのタイプの椀は和泉型瓦器椀の成形手法を受けてはいるがそこには在地生産品としての懸隔が認められる。また個々の外観はバラエティーにとみ、畿内産の瓦器椀や讃岐地方の瓦質土器[(1)]にみられるような斉一性や規格性は認められない。

在来の土師質土器製作技法に基づくものとしては、511・512がある。512は底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、端部をやや尖り気味におさめるもので体部は杯形を呈し外面にはヨコナデによる稜線が底部付近まで観察できる。器壁は底部付近が特に厚く、最大で８

mm近くなる。ユビオサエは底部の立ち上がり付近に集中し「底部押し出し」技法[2]によるものと考えられる。外底面には回転糸切りの痕跡を明瞭に残し、その上に粘土紐の高台が無造作に貼り付けられる。内面には短い単位で同心円状のヘラミガキが施される。胎土は精良であり、焼成はやや軟質である。炭素の吸着は全体に良好とはいえないが口縁部に特に暗灰色の帯が巡ることから、重ね焼きされた可能性が指摘できる。

以上前田遺跡において見られる3タイプの瓦器椀について述べたが、和泉型瓦器椀を除く在地生産瓦器椀は2つに分けられる。ここでは、便宜上前者の和泉型模倣のタイプを在地生産Ⅰ類、後者の土師質土器製作技法の応用によるタイプを在地生産Ⅱ類と仮称しておく。

次に瓦器の小皿について述べる。瓦器小皿は和泉型（202・513・514）、和泉型模倣のもの（515～517）。土師質土器製作技法によるもの（518・519）のように小皿においても3つのタイプが存在し、それぞれ椀と同じく和泉型、在地生産Ⅰ類、在地生産Ⅱ類に対応する。小皿の場合和泉型と在地生産Ⅰ類を識別するのは困難であるが、椀と同様器壁が厚く、焼成が軟質、炭素の吸着が不良、底面がやや平底状を呈するといった目安があげられる。在地生産Ⅱ類は外底面に回転糸切り痕をとどめ、器形、法量は土師質土器の小皿と変わるところがない（第152図参照）。

在地生産瓦器の分布

在地生産Ⅰ類の瓦器椀は当前田遺跡の他、阿波郡市場町日吉～金清遺跡、乾山～観音遺跡[3]より出土している。在地生産Ⅱ類の瓦器椀は報告例に乏しく、板野郡上板町菖蒲谷西山A遺跡[4]の客土中より出土した1例が知られるにすぎない。在地生産Ⅱ類の瓦器小皿は椀に比べて県内の出土例が多く、前田遺跡をはじめ、阿波郡市場町古田遺跡（Ⅱ）[5]、上喜来蛭子～中佐古遺跡[6]、日吉～金清遺跡、乾山～観音遺跡、板野郡板野町古城遺跡から出土している。

在地生産瓦器の年代

これら前田遺跡において確認された在地生産瓦器の年代であるが、そのほとんどは包含層出土であり良好な一括資料に恵まれない。唯一SP1385において在地生産瓦器椀Ⅰ類が土師質土器杯、小皿、和泉型瓦器椀Ⅲ－2期のものと供伴して出土していることから考えて、在地生産Ⅰ類の年代を13世紀代としても大過ないであろう。在地生産Ⅱ類に関しては現段階では年代決定の手がかりとなる出土状況はみられない。しかし椀類の年代が後述するように瓦器生産の初現段階にあたり、それが前田遺跡の主体となる年代であると考えるならば同じく13世紀代のものと考える事も可能である[7]。

それでは、瓦器の在地生産を誘発する要因となるものはなんであったか。在地生産Ⅰ類出

現の要因になるのは和泉型瓦器椀の搬入である。

第３表を見ると阿波国内に畿内産の瓦器特に和泉型瓦器椀の搬入が開始されるのは尾上分類でII－２ないし３期である。ただこの段階において搬入はまだ小規模で単発的なものであり、地域も吉野川下流域に限られている。阿波国内への和泉型瓦器椀の搬入が本格化するのは久保脇美朗氏も指摘するように[8] III期に入ってからのことである。勝浦康守氏はこのような状況をふまえた上で吉野川下流域の13世紀代の供膳具の椀形態はほとんどが和泉型瓦器椀の搬入品で占められることを指摘している[9]。この指摘は該期の吉野川下流域における供膳具組成上の地域性を端的に表現している。

所在地	遺跡名	和泉型瓦器椀（尾上分類）	備考
鳴門市	大毛島37区	II－３？III－１～３・IV－１	
板野郡板野町	宮ノ前遺跡（県教委）	II－３？III－１～２	
板野町	宮ノ前遺跡(センター)	II－２・III－２～３	
板野町	古城遺跡（センター）	II－３・III－１～３	楠葉型有
板野町	蓮華池Ｉ遺跡	IV－１？	
上板町	山田古墳群Ａ	III－３	
土成町	前田遺跡	III－１・２	
阿波郡市場町	日吉～金清遺跡	III－２	
阿波町	日吉谷遺跡	III－２	
阿波町	桜ノ岡Ｉ遺跡	III－１？２	
徳島市	庄遺跡（徳大医学部）	II－３・III－１～３	
	名東遺跡（県教委）	II－３・III－１～３・IV－１・２	
	阿波国府跡（６次）	III－１	
	阿波国府跡（９次）	II－３・III－１	
	中島田遺跡（県教委）	III－３・IV－１～３	
	南島田遺跡	III－３・IV－１～３	
	丈六寺遺跡	II－２？３・III－１	楠葉型有
小松島市	新居見城跡？	III－２・３・IV－１	
阿南市	長池遺跡	III－２・３	
海部郡海南町	大井遺跡	IV－１・２	
由岐町	大池		楠葉型有

※久保脇美朗「阿波における瓦器の出土状況」（文献７）表を一部改変。

第３表　阿波国内における畿内産瓦器椀の搬入状況

吉野川中流域では和泉型瓦器椀が出土するのはIII期以降であり、その分布は現時点では前田遺跡より更に上流域の阿波郡市場町、阿波町まで認められる。このように西日本に大量に流通し始めた和泉型瓦器椀が吉野川中流域に到達した13世紀に在地生産Ｉ類の生産が開始されている。

吉野川中流域では以上のように和泉型瓦器の搬入が瓦器在地生産の要因となるのであるが、和泉型瓦器そのものの出土は下流域に比べ低調である。このことは単にこの地域の発掘件数が少ないというよりも和泉型瓦器の搬入数が絶対的に低いことによるものと考えられる。第４表は前田遺跡で13世紀代の遺物、遺構を比較的良好な状態で出土した第11調査区の包含層及び遺構内より出土した瓦器の破片点数を器壁が薄くて焼成が硬質なもの（和泉型）と器壁が厚くて軟質なもの（在地産）に分類し計数したものである。

この表を見ると瓦器椀中の在地生産品は椀で70％余り小皿で80％余りを占めることがわかる。もちろん計数した中には細片でどちらとも判別のつかないものもあり、正確な数字とはいい難いがおおよその傾向はつかめると考える。なお在地産とした中にはＩ類、II類ともに含まれており、小皿底部の破片で糸切り痕を持つII類は５点確認されている。このような現象が吉野川中流域において普遍的なものかどうかは現段階では明らかにしがたいが日吉～金

清遺跡の出土状況もほぼ同様の傾向を示すようである。[10]。あるいはこのような搬入状況が瓦器の在地生産を促す直接の引き金になったのかもしれない。

	椀	小皿
和　泉　型	55	5
在　地　産	270	24
計	325	29

第４表　第11調査区出土瓦器集計表

Ⅰ類の瓦器椀は在来の土師質土器工人が和泉型瓦器椀の製作手法をまね、あるいは技術そのものを移転し製作にあたったものと考えられる。その際技術的にネックになったのは焼成技術であり、軟質な焼成、炭素吸着不良という点を見る限りにおいて前田遺跡の工人はこの問題をうまくクリアできなかったものと思われる。Ⅱ類の瓦器椀は在来の土師質土器工人が杯の製作技法を応用して製作したものであり、出土の頻度から言ってもⅡ類の瓦器特に椀形態は在地生産のごく初期の段階に単発的に生産されたものである可能性が強い。したがって、吉野川中流域においては和泉型模倣のⅠ類瓦器がその主流を占めることになったものと考えられる。在地生産Ⅰ類が近江俊秀氏の言うような「和泉系」瓦器椀[11]の範中に含まれるかどうかについては、更に類例資料を蓄積し、分布論、編年論が確立した段階で改めて検討されるべき課題としておきたい。

以上、前田遺跡出土の在地生産瓦器を中心にして13世紀代の吉野川中流域にみられる供膳具組成上の地域色の一端を概観してきたが、最後に若干吉野川流域を中心とした椀形態の地域色について予察的に述べたい。

吉野川下流域における13世紀の椀形態が和泉型瓦器椀の搬入品で占められる事は前に述べた。ただいくつかの遺跡で和泉型瓦器の範中には含まれない、在地生産されたと考えられる一群の瓦器が報告されている。南島田遺跡[12]は13世紀後半～15世紀にわたる集落遺跡であるが、出土した瓦器椀のうち、瓦器椀B・瓦器椀Cに分類されるものは在地生産されたと考えられている。瓦器椀Bの内全体の器形のわかるものは、器壁が厚く口縁端部を尖り気味に仕上げる。また高台は幅広の粘土紐を貼り付け、断面は低い三角形を呈する。調整は口縁部内外面ヨコナデ、体部内面ナデ外面ユビオサエ後ナデであり、一部にロクロを使用したと思われるナデ痕を持つものもある。炭素の吸着は一般に不良である。瓦器椀Cは瓦器椀Bに比べ口縁端部を丸くおさめ、炭素の吸着が良好である。南島田遺跡の報告者は瓦器椀B・Cについて14世紀末～15世紀初頭に和泉型瓦器が衰退し、阿波への供給量が減少した段階でその代替品として生産されたものと考えている。南島田遺跡の瓦器椀B・Cに類似するものは他に名東遺跡[13]SD07より出土している。吉野川中流域の内でも阿波郡から美馬郡にかけては吉野川下流域や前田遺跡を中心とする地域とは異なった椀形態の存在が指摘できる。阿波郡阿波町桜ノ岡遺跡（Ⅰ）[14]では回転台成形、内面にハケ調整を施した瓦器（瓦質土器）椀が出土している。同様の椀は市場町上喜来蛭子～中佐古遺跡や美馬町内[15]より出土している。こうした特徴を持つ椀は従来県内では知られておらず[16]、香川県西村産の瓦質土器椀に近似している。

これまで調査例の少なかった当該地域では今後の調査の進展の如何ではこうした椀形態の存在が明らかになる可能性がある。更に上流域の三好郡昼間遺跡[17]においても和泉型とは考えられない瓦器椀の出土が報告されている。

このように吉野川流域では下流から上流にいたる間、供膳具の椀形態にいくつかの地域色が存在する可能性がある。こうした存在形態が和歌山県内において指摘されている「郡単位」で生産・使用される瓦器椀[18]と同様の形態をとるのか、あるいは限られた遺跡内で限られた時期に単発的に生産されたものであるかについては、今後中世吉野川の水運といった問題も視野に入れた上で発掘調査において明らかにしてゆかねばならない課題である。

注

（1）　香川県教育委員会『西村遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ1980～1982』

なお、片桐孝浩氏は「古代から中世にかけての土器様相」香川県教育委員会「川津元結木遺跡」『中小河川大束川改修工事（津ノ郷橋～弘光橋間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1992において従来瓦質土器椀と呼称されてきたこの種の土器を須恵器軟質焼成土器と捉え「須恵器椀」の呼称を用いている。

（2）　基本的には杯形の土器を椀形に成形する際の技法と捉える。森田勉「太宰府出土の土師器に関する覚え書き（2）」『九州歴史資料館研究論集3』1976

（3）　徳島県埋蔵文化財センター「乾山～観音遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報Vol. 3』1992

（4）　徳島県埋蔵文化財センター「菖蒲谷西山A遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報Vol. 3』1992　なお、報告中ではハケ目の痕跡とされているが、実見したところによると糸切り痕である。

（5）　徳島県埋蔵文化財センター「古田遺跡（Ⅱ）」『徳島県埋蔵文化財センター年報Vol. 2』1990

（6）　徳島県埋蔵文化財センター「上喜来蛭子～中佐古遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報Vol. 2』1991

（7）　Ⅱ類の小皿に関しては久保脇美朗「阿波における瓦器の出土状況」第4回四国中近世土器研究会資料　1992　の中で15世紀後半～16世紀の年代が想定されているが、前田遺跡の出土例により13世紀代まで遡る可能性が指摘できる。

（8）　前掲注（7）

（9）　勝浦康守「徳島県における古代末から中世の土器様相について」『中近世土器の基礎研究Ⅷ』1992

(10)　調査担当者の久保脇美朗氏よりご教示を得た。

(11)　近江俊秀「畿内産瓦器椀に関する若干の考察－大和地方出土資料を中心として－」『中近世

土器の基礎研究Ⅷ』1992

(12)　徳島県教育委員会「南島田遺跡」『県道徳島鴨島線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1989

(13)　名東遺跡発掘調査委員会『名東遺跡発掘調査概要』1990

(14)　徳島県埋蔵文化財センター「桜ノ岡遺跡（1）」『徳島県埋蔵文化財センター年報Vol. 1・Vol. 2』1990・1991

調査担当者の湯浅利彦氏よりご教示を得た。

(15)　筆者の実見した限りでは美馬町郷土資料館に展示されている美馬町内出土の椀がある。

(16)　ひびき岩16号墳石室再利用時の出土遺物に内面ハケ調整を施す須恵質の杯があるが瓦質土器椀との関係は不明である。

(17)　徳島県教育委員会「昼間遺跡発掘調査概報」『徳島県文化財調査概報』1978

(18)　渋谷高秀「紀伊の中世土器」『中近世土器の基礎研究』1985

渋谷高秀「和歌山県の中世土器の様相」『大和の中世土器Ⅱ』1992

参考文献

橋本久和　『中世土器研究序論』真陽社　1992

森　　隆　「中世土器の生産にみる地域型の提唱と工人集団の系譜について－西日本の土器椀生産を中心とした－」『中近世土器の基礎研究』1992

⑵　梵鐘鋳造関連遺構について

ここでは今回の調査で確認された近世の梵鐘鋳造に関連する遺構について、主に他の梵鐘鋳造遺構との比較検討の上で明らかになったことについて述べる。

徳島県内の鋳造遺構について

徳島県内において鋳造遺構が発掘調査された例では、徳島市名東町の大浦遺跡[1]、阿波郡市場町の上喜来蛭子～中佐古遺跡[2]に次いで本例で３例目となる。大浦遺跡では、２基の炉跡、２基の土坑が検出されており、土坑内からは炉壁片、羽口、坩堝、銅滓、鉄滓とともに独鈷杵、三鈷杵、錫杖頭、梵鐘（半鐘）等の鋳型が出土している。これらは出土した土器や鋳型から推定される密教法具の形状により平安時代後期（11世紀代）に比定されている。いずれも密教法具や梵音具など一般の需要に応ずるものでなく寺院に関係する鋳型の出土であり、その供給先や鋳造製品の流通の問題、鋳物師の出自等検討すべき課題が提出されている。上喜来蛭子～中佐古遺跡では16世紀前半の集落の一角より鋳造作業に関連する土坑が出土されている。土坑内より多数の炉壁片、羽口、坩堝、鋳型、土製支脚等が出土している。鋳型には鰐口と推定される破片が見られ、調査者は近隣に所在する真言宗実相寺に仏具を供給した鋳物師集団の工房跡と推定している。

梵鐘鋳造遺跡について

神崎勝氏の集成[3]によると現在のところ国内での梵鐘鋳造遺跡の調査例は41遺跡を数える。このうち古代に属する例が13例、中世に属する例が21例、近世以降については、長野県飯田市飯田城跡[4]（16世紀後半～17世紀）、神奈川県愛甲郡長福寺址[5]（18世紀前半）、滋賀県穴太郡辻遺跡[6]（18～19世紀）、兵庫県多可郡清水タカアゼ遺跡B[7]（近世末～近代初）、新潟県糸魚川市原山遺跡[8]（江戸）、福島県伊達郡川股城跡[9]（18世紀末～19世紀前半）が知られる。これら近世以降の調査事例は古代から中世にかけてのものに比べて少ないが、いずれも近年の調査にかかるものであり、３～４万口とも言われる江戸時代の梵鐘鋳造数からすれば、今後該期の調査事例の増加にともない遺構の確認数も増えるものであろう。

梵鐘鋳造坑について

神崎勝氏は梵鐘鋳造坑の平面プランについて、古代以来方形ないし隅丸方形が基本であり、13世紀以後に円形や楕円形のものが出現するとしている。[10]中世末～近世の例では隅丸方形のもの（和歌山県天満１号墳[11]・兵庫県清水タカアゼ遺跡B等）、方形のもの（岐阜県金屋遺跡[12]・和歌山県紀伊国分寺跡[13]）、隅丸長方形のもの（神奈川県長福寺址）と主流は方形もしくは長方形のようである。また鋳造坑底の施設としては底面にピットと掛木の痕跡を持

つ例として滋賀県長尾遺跡２号、４号[14]（９C）・京大教養部SK245[15]（９C末～10C初）・滋賀県坂本八条遺跡[16]（12C）・福岡県鉾ノ浦遺跡[17]（13C後～14C前）等があり、梵鐘鋳造坑の底面施設として一般的である。こうした施設の他に定盤のみを据え付けた例として兵庫県多可寺址（８C末）・大分県智恩寺跡[18]（13C中～後）・長野県寺平遺跡１号、３号[19]（南北朝～室町初）がある。坑底施設を持たない例として金屋遺跡（16C前）・天満１号墳（中世末）・紀伊国分寺跡（室町～安土桃山）などがあり、中世末に底面施設を持たない例が出現している。

こうした例とSH1005を比較すると、坑底にピットや掛け木の痕跡などの施設が確認されなかったことがその特徴としてあげられよう。特にピットは鋳造坑内への鋳型の据え付けや鋳込み終了後に製品を取り出す際の構架物を設置した痕跡と考えられており[20]、梵鐘鋳造坑では一般に見られる施設である。こうした施設を持たないという点でSH1005を鋳型片や溶解炉片の廃棄土坑と考えることもできる。しかし寺平の例や金屋の例を見る限り、一方には坑底施設を持たない鋳造坑が存在することも了解できよう。またSH1005の底面は坑内より出土した定盤（212）を据え付けるのに十分な面積を持つこと、土坑肩の南北見られる傾斜が鋳造坑内より製品を取り出す際の何らかの装置（たとえば梃子の支点など）であったと考えられることなどを勘案すると、SH1005において梵鐘の鋳込み作業が行われたと考えることは可能である。

前田遺跡出土の梵鐘鋳型について

梵鐘の鋳造工程は「倉吉の鋳物師」や吉田晶子氏の論考[21]に詳しいが、基本的に①外枠の製作②鋳型の製作③鋳型の据え付け④地金の溶解⑤鋳込み⑥型ばらし⑦仕上げという工程が考えられる。ここではSH1005出土の梵鐘アラ型と鋳型を中心に①、②の工程について考えたい。

外枠とは梵鐘鋳型の土台になる円筒形の土製品[22]である。この外枠は倉吉では「アラ型」、滋賀県下では「クレ型」[23]、佐野では「タネガタ」[24]と呼ばれる。今回の調査ではこの外枠（アラ型）のうち最上段の笠型部分と中位の２段分と最下段の定盤が確認できた。まず笠型部分を観察してわかることをまとめると

1　天井部はほとんど調整されていない。
2　外面上半全周に縦線状の粘土のはみ出しがみられる。
3　断面を観察するとブロック状の接合痕が見られる。
4　接合面の上面には指ナデ状の痕跡が認められる。
5　断面の内部はあまり被熱せず黒色を呈するのに対し、外側に近い部分はよく焼けて橙色を呈する。

6　内側には部分的に真土が付着する。

となる。以上の点をふまえてアラ型の製作工程を復元すると、まず天地を逆にして作り始める。外面の縦線状の粘土のはみ出しは円筒状の構造物の圧痕によって生じるものと思われ、ここでは桶枠状のものを用意し、そのなかに籾、藁を混ぜ込んだ粘土を充塡していったものと推察した。そして基礎となる部分を成形した後、全周を指ナデで調整し、更にブロック状の粘土を積み重ねてゆく。ブロックは1段積むごとにナデて調整したようである。こうして上部（鋳型完成時の下部）に向かいアラ型を成形する。成形後は倉吉の例等を見ると半乾きの時に2～4段に分割し乾燥させるとあり、本例でもおそらくこうした方法がとられたものと思われる。

乾燥したアラ型は再度積み上げられ、内部に真土を塗布し型挽作業で鋳型面を形成する。アラ型の内面に付着する真土はアラ型に型挽きされた鋳型面の残部であり、本遺構出土の梵鐘鋳型は全てこのアラ型から遊離したものと考えた。この鋳型の断面を観察すると外面から鋳型面に向かい粗真土・中真土・仕上げ真土といった三層の真土が認められ、少なくとも三回の型挽作業が行われたことがわかる。こうして挽型作業が終わった後、倉吉では「型焼き」と呼ばれる鋳型の焼成作業が行われる。この型焼きの際にアラ型断面にみられる発色の違いが現れると考える。その後は龍頭、乳などの埋け込み作業を行った後で再度型焼きし、最終的に鋳型面にクロミを塗布し鋳型を完成させる。本遺構出土の梵鐘鋳型については、出土遺物の観察と倉吉等の民俗事例を基にして以上のような製作工程を考えた。

梵鐘について

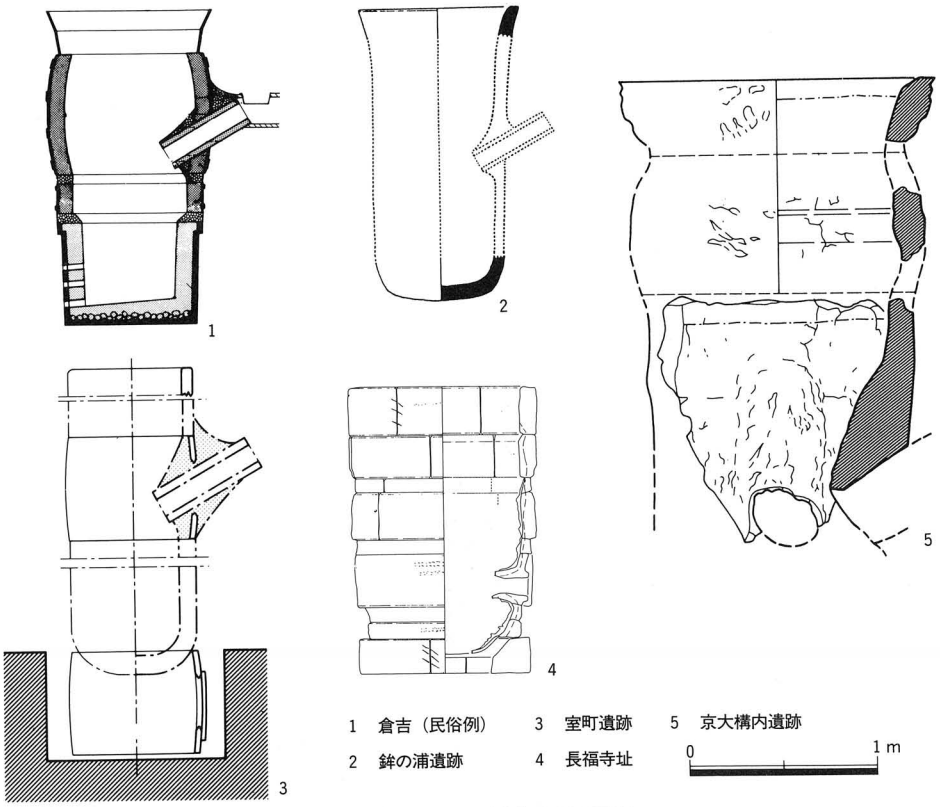
本遺構中より出土した梵鐘鋳型はアラ型を除いた鋳型面を持つもので578点、12.1kgにのぼる。これら鋳型は断片的なものであり接合できたものも乏しく、本遺構で鋳造された梵鐘の全容を復元するのは困難を極める。幸い駒の爪付近のまとまった破片が確認されているのでそれを元に径を復元すると約70cmの値が得られた。このことから梵鐘の外径を70cm（二尺三寸）余と推定したい。

溶解炉について

本遺構内より出土した溶解炉の破片は復元の結果「上こしき」、「こしき」、「湯溜」の3部分よりなるこしき炉であることが判明した。こうした分割可能な溶解炉は民俗例でも知られており、その構造上の特徴は中山光夫氏の論考[25]により詳細に分析されている。現在までに発掘調査で確認された溶解炉でその形状が推定された例に京都府京都大学構内遺跡、福岡県鉾ノ浦遺跡、室町遺跡[26]、神奈川県の長福寺址がある。また「倉吉の鋳物師」では近世の溶解炉の民俗事例が提示されている。ここではこれらを参考にして本遺構内より出土した溶解

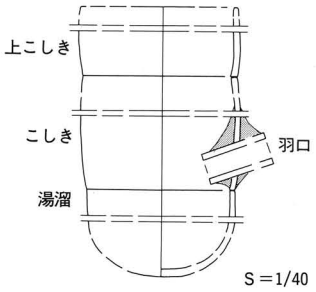
炉の形状を考えてみたい。

まず「上こしき」は「こしき」に見られるような厚い滓の付着がなく、炉壁自体もやや脆いといった印象を受ける一連の破片を考えた。高さは残存部からして20cm以上あったものと考えられる。京大例、鉾ノ浦例、倉吉の民俗例などを見るとラッパ状に外開きになっているが、本例は直立気味でありどちらかと言えば室町例や長福寺例のように円筒状に上方に伸びるものと考えられる。こしきは径17cm余りの羽口を装着する。装着角度は74°で長福寺を除く諸例と同じく炉体に対して下向きに着くものである。また装着位置は倉吉の例や室町、長福寺例などからしてこしきの下寄りに着くものと考え、倉吉例を勘案しこしきの高さは60cm余りになると考えた。なお長福寺においては上こしきとこしきを繋ぐ装塡帯、倉吉の例ではこしきと湯溜を繋ぐ下こしきが報告されているが本例でそれらが装着されたか否かについては不明である。湯溜は非常に堅くたたき締められた、明らかに他の部分とは異なる硬質の溶解炉片を考えたがこれは湯溜の部分が上こしきやこしきに比べ耐火、耐圧、耐重量性を求められると考えたためである。炉底にあたる部分の形状は不明であるが、残存部の形状が下部に向かい緩やかにアールを持つ点や鉾ノ浦例、長福寺例など復元された事例から考えて本例



第153図　溶解炉復元例

の炉底部も碗状ないし丸底を呈するものと思われる。こうして復元した溶解炉は直径約80cm、高さ約130cmとなり京大例を除く他の諸例とほぼ同規模となる。（第154図）



第154図　ＳＨ1005出土溶解炉復元案

遺構の年代と供給先について

鋳造作業はその性格から「居職」あるいは「座吹き」と呼ばれ、定地点で継続的に生産を行う工房的なものと「出職」あるいは「出吹き」と呼ばれ、需要に応じて鋳物師が出張して鋳造作業を行うものに類別できる。梵鐘鋳造に際しては、京大教養部、鉾ノ浦遺跡、真福寺遺跡[27]等の特定鋳物師集団の拠点的な遺跡の例を除くと「出吹き」といった形をとるのが通例のようである。本遺構もこのような出吹きに伴うものと考えられる。

それでは本例の場合、梵鐘の注文主は誰であったのであろうか。最も可能性が高いのは本遺構から直線距離にして200m余り西に存在する熊谷寺であろう。熊谷寺は創建年代は不明であるが寺院内には鎌倉時代の板碑が残る。現在の鐘楼の北側に立つ長意和尚の業績碑文[28]に寛文元年（1661年）和尚32歳の時に鐘楼堂を建立し、梵鐘を鋳造したとの記録が残る。また、元禄年間に書かれた「四国遍礼霊場記」巻三[29]の熊谷寺図には四本柱の鐘楼が描かれており、当時すでに梵鐘が存在したものと見てよい。ちなみに現在残る山門は和尚碑文によると元禄元年（1688年）に完成しており、現在の寺域はこれにより定まったものである。それ以前には現在の中門までが寺域とされていたようである[30]。残念ながら熊谷寺にはこの長意和尚碑文の他は当時の様子を伝えるものは残っておらず、寛文の梵鐘自体も太平洋戦争時に供出されておりその形状を確かめるすべはない。そこで本遺構の出土遺物からその可能性を探ってみたい。

梵鐘の鋳造年代であるが前述したように遺構内から年代決定の手がかりとなる陶磁器の出土がなかったため、出土した寛永通宝、煙管の雁首の編年を援用することになる。寛永通宝は遺構内より４点出土しているが、いずれも背文を持たない古寛永である。文銭の初鋳年は寛文８年（1868年）であることから、可能性として1868年以前が考えられる。次に煙管の雁首の形態であるが、ラウ寄りに肩をもたず火皿寄りに補強帯を持ち、脂返しが湾曲する、いわゆる「河骨形」という形態をとるなどの点から考えて、古泉編年[31]の第３段階（17世紀後半）の特徴を示すと考えられる。このように古銭と煙管の年代観からすると本遺構の操業時期は17世紀後半であったとするのが妥当であろう。この17世紀後半という年代は前記の熊谷寺の梵鐘鋳造の年代とほぼ一致することとなり、本遺構が熊谷寺の梵鐘を鋳造したものである可能性が高くなる。

鋳物師について

本遺構において梵鐘鋳造に関与した工人の出自についてであるが、まず「由緒鋳物師人名録」[32]には阿波国内に名東郡西船場町阪東忠右衛門、名西郡高瀬村武知只六、阪東丈兵の三人の名前があげられている。また淡路には津名下物部村黒田吉右衛門、三原金谷村松岡五兵衛の名前がある。「諸国鋳物師文化以前名前写」[33]には淡路の黒田吉右衛門の他に阿波国坂(ママ)野郡斎田村金田重吉の名前がある。しかし阿波国内でのこれら鋳物師の活動については現時点では不明な部分が多い。そこで在銘鋳物、特に県内の近世の梵鐘に残された銘文より鋳物師を探ってみたい。大正15年に著された「板野郡誌」[34]には旧板野郡内の各寺院の縁起、由緒と共に梵鐘銘が記載されており、江戸時代に鋳造された梵鐘の多くが供出され現存しない現在では貴重な資料となる。以下に旧板野郡内の江戸時代の梵鐘の鐘銘の内、鋳物師の確認できるものを記載する。

斎田村

善徳寺　梵鐘　元禄十三年　冶工　摂津大坂住　岸本七右衛門尉

喚鐘　元禄甲戌年　鍛冶　岸本七右衛門

瀬戸村

吉祥寺　梵鐘　宝暦十年　冶工　大坂西高津住　大谷相模椽藤原正次

住吉村

見性寺　梵鐘　元禄七年　摂津大坂住　長谷川久左衛門尉作

坂東村

成就院　洪鐘　安永七年　冶工　大坂高津新町新道住

今村喜兵衛藤原清次鋳之

藍園村

徳善寺　三尊鐘　文政八年　藤原正重

光善寺　梵鐘　文化戊辰　門徒近藤某之浪華命工

御所村

神宮寺　梵鐘　享和二年　冶工　岡田正信

旧板野郡内の江戸時代の梵鐘銘には摂津大坂の鋳物師の名前が散見される。大谷、岸本、今村などは江戸時代の大坂における著名な鋳物師の家柄でありその作品も各地に見られる。こうした例から考えて、本遺構の梵鐘もあるいは大坂方面からの鋳物師の出吹きになる作品とも考えられるが、鋳物師の問題については阿波国内の鋳物師の動向と併せて今後究明されねばならない課題である。

注

（1）　一山典・瀧山雄一「大浦遺跡（徳島県）」『佛教藝術』174　1987

（2）　徳島県埋蔵文化財センター「上喜来蛭子～中佐古遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol. 2』1991

（3）　神崎勝「梵鐘の鋳造遺跡とその変遷」『考古学研究』第40巻1号　1993

（4）　前掲注（3）

（5）　神奈川県埋蔵文化財センター「北原（№9）遺跡内長福寺址」『宮ヶ瀬遺跡群Ⅲ』1993

（6）　前掲注（3）

（7）　前掲注（3）

（8）　新潟県教育委員会『新潟県埋蔵文化財調査報告書第50集』1988

（9）　川俣町教育委員会『河股城跡現地説明会資料』1991　なお調査担当者の高橋圭次氏よりは有益な御教示を多数得た。

(10)　前掲注（3）

(11)　吉備町教育委員会『天満1号墳発掘調査概要』1992

(12)　坂下町教育委員会『金屋・星の宮遺跡』1975

(13)　前掲注（3）

(14)　林博道「長尾遺跡の梵鐘鋳造遺跡」『古代研究』27　1982

(15)　五十川伸矢・飛野博文「京都大学教養部構内AP22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和57年度』京都大学埋蔵文化財研究センター　1984

(16)　大津市教育委員会『滋賀里穴太地区遺跡群発掘調査報告書Ⅲ』1985

(17)　山本信夫・狭川真一「鉾ノ浦遺跡－筑前太宰府鋳物師の研究－」『佛教藝術』174　1987

(18)　大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館『大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告集第九集　智恩寺』1992

(19)　飯島町教育委員会『寺平遺跡』1980

(20)　五十川伸矢「鴨東白河の鋳物工房」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和60年度』京都大学埋蔵文化財研究センター　1988

(21)　吉田晶子「近代産業以前の梵鐘鋳造技術について－技術伝承の調査のまとめ－」『関西大学考古学研究室開設四十周年記念考古学論叢』1993

(22)　鋳鉄製のものもある

(23)　滋賀県教育委員会『近江の鋳物師1・2』1987・1988

(24)　佐野市教育委員会『佐野の鋳物師』1987

(25)　中山光夫「鋳鉄溶解炉の系譜をめぐって」『地域相研究』17　1987

(26)　北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室『室町遺跡』1990

(27)　大阪文化財センター『真福寺遺跡－調査の概要－』1986

(28)　徳島県有形文化財に指定される熊谷寺山門の附として有形文化財に指定されている。正徳五年（1713）に当時の熊谷寺住職竜意が先代長意和尚の業績を刻んだものである。

（前略）三十三才而若舊地之狭隘曳寺於今境内再営建之鋳鳧鐘欲驚悟衆生之沉眠矣前山崎図書政吉公感其激志新建一宇簀箒洪鐘且使寄付二石之高地（後略）

(29)　寂本原著　村上護訳『四国偏礼霊場記』巻三　教育社新書　1987

(30)　熊谷寺住職高島康貴氏よりご教示を得た。

(31)　古泉弘「江戸の考古学」『考古学ライブラリー48』ニューサイエンス社　1987

(32)　村内政雄「由緒鋳物師人名録」『東京国立博物館紀要第７号』1972

(33)　坪井良平「諸国鋳物師文化以前名前写」『梵鐘と考古学』ビジネス教育出版社　1989

(34)　徳島県板野教育会『板野郡誌』1925

参考文献

鋳造遺跡研究会　『第１回鋳造遺跡研究会資料』1991

『第２回鋳造遺跡研究会資料』1992

6　まとめ

前田遺跡は平成２・３年の２年間にわたり約10,000㎡を発掘調査し、旧石器時代から近世に至る遺物と共に弥生時代中期末葉～後期初頭にかけての集落跡、中世の集落跡、近世の梵鐘鋳造に関わる遺構等を確認することができた。

本遺跡の初現は出土したナイフ形石器、石核などを見る限り、少なくとも旧石器時代にまで遡り得るであろう。ただ、これらはいずれも弥生時代～中世の遺物の混在する包含層よりの出土であり、安定した出土状態とはいえない。これら旧石器は遺跡の北東部段丘上に展開する椎ヶ丸遺跡との関わりが指摘できる。また縄文時代草創期、中期、後期の遺物が若干出土しているが、断片的なものであり縄文時代と考えられる土坑を２基確認したのみである。

前田遺跡に集落の形成が始まるのは弥生時代中期以降である。弥生時代中期末葉～後期初頭の遺構は遺跡の西側に集中し、中央に広場的な空間を持ち、その周囲に竪穴住居、掘立柱建物を配するといった集落構造が確認できた。この集落は土成町一帯の扇状地上に展開する同時期の遺跡群（北原遺跡、北原～大法寺遺跡、土成前田遺跡）の中では最大規模であり、掘立柱建物の多さからみて当地域の遺跡群の中心的な集落であったと考えられる。これら遺跡群は弥生時代の後期初頭をもって廃絶する。その後前田遺跡では平安時代後期に若干の遺構が見られる他は、鎌倉時代に至るまで集落の形成は認められない。

鎌倉時代前半（13世紀代）には遺跡の東側が居住域に定められる。この居住域からは小規模な掘立柱建物８棟を含む多数の柱穴群が検出されている。遺跡の西側では鍛冶遺構、中央部では炭窯が集中して検出されており、該期の村落においてこうした作業が地点毎の分業といった体制をとっていた可能性が指摘できる。出土した土器類は在地色が強く、当時吉野川下流域に大量に搬入された和泉型瓦器椀を模倣する在地生産瓦器の存在を確認した。

近世の梵鐘鋳造遺構は17世紀後半の操業と考えられ、近隣の熊谷寺が1661年に行った梵鐘鋳造に関わる遺構であったと捉えた。鋳造に関わった鋳物師自体には今回の報告では迫り得なかったが、今後県内の在銘鋳物や出土した龍頭にみられる鋳物師の作風の検討等を通じてその出自を明らかにしていきたい。

以上、今回の調査では吉野川中流域という限られた地域に展開された事象でありながらも、各時代にわたり他地域との比較、検討を可能とするいくつかの点が指摘できた。本報告が今後、これらの問題を考えていく上での一助となればさいわいである。

Ⅳ　自然科学的分析

1　徳島県板野郡土成町前田遺跡出土の鉄滓等の金属学的調査

中　山　光　夫

1　はじめに

㈶徳島県埋蔵文化財センターは1990年４月28日～1991年２月15日の期間において、県内の板野郡土成町字前田55－１他の前田遺跡を発掘調査し、掘立柱建物跡や炭窯・土坑・鍛冶炉などの遺構と、鉄滓や瓦器・土師質土器などの遺物を検出した(註1)。1992年９月同埋蔵文化財センターより、同遺跡の鉄滓等の金属学的調査の依頼を受けたので報告する。

2　鉄滓等の調査方法

試料対象となった鉄滓等については20点で、この内より鉄滓３点・小鉄塊１点・鋳鉄片１点の計５点の調査を行った。調査方法については下記の調査及び測定を行った。

(1)　試料の目視観察

(2)　携帯式金属検知器による検知・磁石による着磁具合。

(3)　計測及び計量

(4)　化学組成

(5)　顕微鏡観察・硬さ測定

3　調査結果

(1)　SH1001・小鉄塊

①　目視観察・計測

表面全体は錆色を呈し小礫を噛み、金属検知の反応と着磁が認められる。太さは38×33×23㎜、重さは35ｇを計る。なお、重さについては小礫取り除き後の計測である。

②　化学組成

化学組成は炭素（C）含有量は1.24％。ガラス質成分である二酸化珪素（SiO_2）0.13％・酸化アルミニウム（Al_2O_3）0.04％・酸化カルシウム（CaO）0.01％・酸化マグネシウム（MgO）0.05％でガラス質成分は計0.23％。随伴元素の二酸化チタン（TiO_2）0.01％、バナジウム（V）0.000％と、チタン・バナジウム共に皆無に近い。五酸化燐（P_2O_5）0.01％、硫黄（S）0.030％も少ない。銅（Cu）0.012％はやや高めである。

③　顕微鏡組織・硬さ測定

組織[註2]は黒色のパーライトの基地に白色状の網目状に連続するセメンタイトが認められる硬さはマイクロビッカース（HMV）で244を測る。

小鉄塊は不純物のきわめて少ない良質な過共析鋼で、組織と硬さ測定から空冷されたもので焼入・焼戻しなどの熱処理は施されていないと推定される。

(2) SH1002・鉄滓

① 目視観察・計測

突起部分は茶褐色で他は淡黄褐色で焼土がほぼ全体的に付着する。太さは53×57×25㎜、重さは30ｇを計る。

② 化学組成

化学組成は全鉄分（Total Fe）51.08%、金属鉄（Me Fe）0.55%、酸化第一鉄（FeO）46.41%、酸化第二鉄（Fe_2O_3）20.67%で、ガラス質造滓成分となる〔二酸化珪素（SiO_2）24.29%・酸化アルミニウム（Al_2O_3）3.25%・酸化カルシウム（CaO）1.10%・酸化マグネシウム（MgO）0.31%・酸化カリウム（K_2O）0.85%〕で、ガラス質成分は計29.8%と多い。随伴元素の二酸化チタン（TiO_2）0.16%、バナジウム（V）0.018%で、チタン・バナジウム分は共に多めで、銅（u）0.004%は少なく、五酸化燐（P_2O_5）0.14%は多めである。

③ 顕微鏡組織・硬さ測定

鉱物組成は淡灰色長方形状のフェアライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が主体で、フェアライトの隙間に暗灰色のガラス質スラグが埋め、それに白色小粒のウスタイト（Wüsitite：FeO）が昌出する。硬さはマイクロビッカース（HMV）で550を測る。

鉄滓はチタン・バナジウム・燐分を多く含む滓で、組織は鍛冶滓の様相が認められる。

(3) SH1003・鉄滓

① 目視観察・計測

上面は暗赤色を呈するが突起部分は茶褐色で、下面は淡黄褐色の焼土が付着する。太さは38×28×26㎜、重さは30ｇを計る。

② 化学組成

化学組成は全鉄分（Total Fe）44.81%、金属鉄（Me Fe）0.65%、酸化第一鉄（FeO）45.98%、酸化第二鉄（Fe_2O_3）12.04%。二酸化珪素（SiO_2）30.41%、酸化アルミニウム（Al_2O_3）3.77%、酸化カルシウム（CaO）1.67%・酸化マグネシウム（MgO）0.40%・酸化カリウム（K_2O）1.37%で、ガラス質成分はトータル37.62%と多い。随伴元素の二酸化チタン（TiO_2）0.23%、バナジウム（V）0.010%、五酸化燐（P_2O_5）0.20%と、チタン・

バナジウム・燐分については多めで、銅（u）0.002%は少ない。

③　顕微鏡組織・硬さ測定

鉱物組成は多量の白色小粒のウスタイト（Wüsitite：FeO）と、その粒間の淡灰色長方形状のフェアライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）と、暗灰色のガラス質スラグから構成される。硬さはマイクロビッカース（HMV）で412を測る。

鉄滓はチタン・バナジウム・燐分を多く含む滓で、組織は鍛冶滓の様相が認められる。

(4)　SH1005・鋳鉄片

①　目視観察・計測

板状の形状をなし表面全体は赤錆色を呈する。太さは37×21×9㎜、重さは17ｇを計る。金属検知の反応と着磁が強く認められる。

②　化学組成

化学組成は全鉄分（Total Fe）56.09%、金属鉄（Me Fe）22.41%、酸化第一鉄（FeO）13.34%、酸化第二鉄（Fe_2O_3）33.33%、炭素（C）含有量は3.01%。二酸化珪素（SiO_2）15.74%と多い。酸化カルシウム（CaO）0.23%はやや多めで、随伴元素の二酸化チタン（TiO_2）0.07%、バナジウム（V）0.003%といずれも少なく、銅（Cu）0.078%、硫黄（S）0.157%はいずれもやや多めである。

③　顕微鏡組織・硬さ測定

組織[3]は白色部分はセメンタイト、黒色部分はパーライト、蜂の巣状部分はセメンタイトとオーステナイトの共晶（レデブライト）である。硬さはマイクロビッカース（HMV）で633を測る。

本鋳鉄片は銅・硫黄分がやや多めの白銑（White　Pig　Iron）と判断される。

(5)　SO1006・鉄滓

①　目視観察・計測

椀型滓でほぼ半分近くより割れており、上面は錆色を呈し比較的滑らかで下面は砂・小礫をかむ。破面はガスによる径１㎜前後から12㎜ほどの気孔が認められる。太さは90×65×27㎜、重さは195ｇを計る。

②　化学組成

化学組成は全鉄分（Total Fe）59.19%、金属鉄（Me Fe）1.20%、酸化第一鉄（FeO）62.22%、酸化第二鉄（Fe_2O_3）13.76%。ガラス質成分となる二酸化珪素（SiO_2）14.54%、酸化アルミニウム（Al_2O_3）2.80%・酸化カルシウム（CaO）1.52%・酸化マグネシウム（MgO）0.43%・酸化カリウム（K_2O）1.04%で、ガラス質成分は計20.33%である。随伴元素の二

酸化チタン（TiO_2）0.76%、バナジウム（V）0.095%・酸化マンガン（MnO）0.22%といずれも高めであるが銅（Cu）0.006%は低めである。

③　顕微鏡組織・硬さ測定

鉱物組成は多量の白色小粒のウスタイト（Wüsitite：FeO）と、その粒間の淡灰色長方形状のフェアライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）と、暗灰色のガラス質スラグから構成される。

硬さはマイクロビッカース（HMV）で490を測る。

鉄滓はチタン・バナジウム・マンガン分を多く含有し、組織は鍛冶滓の様相の組織が認められる。

(4)　まとめ

以上、前田遺跡より出土した、鉄滓・鉄塊・鋳鉄片の金属学的調査結果のまとめを以下に述べておきたい。

(1)　SH1002・SH1003・SO1006の鉄滓3点については、顕微鏡観察から組織は、3点とも全て白色小粒のウスタイトと淡灰色長方形状のフェアライトの組織が認められ、鍛冶滓の様相を示しており、小鍛冶が行われたと推定される。

(2)　SH1001の小鉄塊については、前述のように不純物の少ない良質な最硬鋼である。組織及び硬さ測定から焼入れなどの熱処理が行われていないと推定されることから、断定的なことは云えないが、おそらく武器や工具・包丁などの、刃先部分の割り込み素材であった可能性が強いものと推定される。

(3)　SH1005の鋳鉄片（白銑）の検出については、以下のようなことが考えられる。

①　当時の人々が使用していた鍋・釜が破損を受け、それらの破片がそのまま遺構に残存した。

②　白銑であることから可鍛鋳鉄[註4]としての素材とした。

③　白銑であることから鍬などの製作時に、刃先部分の「わかし付け」[註5]の材料として用いられた。

以上の三点が推定されるが、遺物が白銑であることにとくに注目したく、②または③と考えたい。さらに推測の域を脱しえないが、鋳鉄片（白銑）はおそらく鍬などの製作時の「わかし付け」の材料とした可能性を考えたい。

(4)　次に分析結果から鉄素材の始発製鉄原料についてふれておきたい。

①　SH1002・SH1003の2点の鉄滓については、チタン・バナジウム分が多いことから砂鉄系原料と考えたいが、ただ燐分が0.14～0.25%と高めで磁鉄鉱の可能性も考えられる。

②　SO1006の鉄滓についてはチタン・バナジウム・マンガンのいずれも高く磁鉄鉱の可

能性が考えられる。

③　SH1001の小鉄塊は、チタン・バナジウム分が共に少なく銅分が多く鉱石系原料かと推定される。

④　SH1005の鋳鉄片は、チタン・バナジウム分が共に少なく、銅分がかなり多いことから鉱石系原料かと推定される。なお、鋳鉄の銅分については鋳造時に屑鉄を投入[註6]されることもあるので、屑鉄の成分がそのまま鋳鉄中に混在し、銅分が高めに検出された可能性も考えられないでもない。

以上、前田遺跡の鉄滓などの金属学的調査から、小鍛冶が行われたことはほぼ明らかである。鍛冶が行われた時期については、『徳島県埋蔵文化財センター年報』[註7]によれば13世紀後半とされている。前田遺跡の小鍛冶で、1、どのような鉄器を製作あるいは加工を行ったか、2、加工に要する鉄素材の入手先（供給地）はどこなのか、などについては今後の研究課題となる。とくに、後者については近年列島内の中世の製鉄遺跡の調査例が近年増加傾向にあること。さらに、近隣諸国の韓国や中国の鉄関係遺物の分析例も着実に増えており、将来的にはそれらの分析値との比較検討で、鉄素材の入手先がかなり明らかになるであろう。

（註）

(1)　高岡裕「前田遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報』Vol. 2、㈶徳島県埋蔵文化財センター、1991年7月。同センター辻佳伸氏教示。

(2)　組織調査では試料を3%ナイタル約5秒間浸潤した。

(3)　組織調査では試料を3%ナイタル約5秒間浸潤した。

(4)　可鍛鋳鉄は白銑鋳物を高温にて熱処理して脱炭させて製造されたもので、普通鋳鉄に比し2倍の引張強さと多少の延性を有する。

(5)　「わかし付け」鍬の刃先などに1〜2cmほどに打ち砕いた白鋳鉄を、台金(軟鋼)の上に乗せ台金に白鋳鉄を溶かし付けしたもの。

「わかし付け」については以下の関係文献と教示を得た。

①　村松貞次郎『鍛冶の旅』262頁「種子島の鍛冶」芸州堂、1985年11月。

②　下野敏見『種子島の民俗』「Ⅳ製鉄技術、その他」法政大学出版局、1990年9月。

③　鹿児島県川辺郡知覧町「ミュージアム知覧」学芸員・砂田光紀氏の御好意で、「種子島の鍛冶」で種子鍬の製作撮影ビデオ拝見。

④　北九州市八幡西区楠橋・野上陽三氏教示。

(6)　『倉吉の鋳物師』倉吉市教育委員会、1986年5月。

(7)　註(1)掲載書。

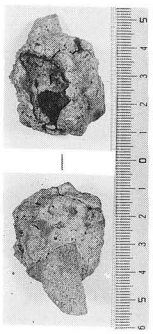
徳島県板野郡土成町前田遺跡の小鉄塊・鉄滓・鋳鉄片の化学組織　　単位（%）

番号	1	2	3	4	5
符号	SH1001	SH1002	SH1003	SH1005	SO1006
遺物名	小鉄塊	鉄滓	鉄滓	鋳鉄片	鉄滓
全鉄分 T. Fe	——	51.08	44.81	56.09	59.19
金属鉄 Me. Fe	——	0.55	0.65	22.41	1.20
酸化第一鉄 Feo	——	46.41	45.98	13.34	62.22
酸化第二鉄 Fe_2O_3	モリブデン 0.008	20.67	12.04	33.33	13.76
二酸化珪素 SiO_2	0.13	24.29	30.41	15.74	14.54
酸化アルミニウム Al_2O_3	0.04	3.25	3.77	1.87	2.80
酸化カルシウム CaO	0.01	1.10	1.67	0.23	1.52
酸化マグネシウム MgO	0.05	0.31	0.40	0.10	0.43
酸化マンガン MnO	0.01	0.07	0.07	0.04	0.22
二酸化チタン TiO_2	0.01	0.16	0.23	0.07	0.76
バナジウム V	0.000	0.018	0.010	0.003	0.095
銅 Cu	0.012	0.004	0.002	0.078	0.006
五酸化燐 P_2O_5	0.01	0.14	0.20	0.34	0.25
酸化クロム Cr_2O_3	0.008	0.02	0.02	0.03	0.03
酸化ナトリウム Na_2O	ニッケル 0.008	0.350	0.439	0.209	0.248
酸化カリウム K_2O	——	0.85	1.37	0.44	1.04
炭素 C	1.24	0.15	0.15	3.01	0.13
硫黄 S	0.030	0.044	0.013	0.157	0.025
硬さ HMV	244	550	412	633	490

※硬さ測定加圧200 g

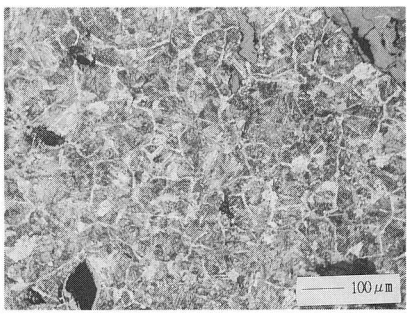
前田ＳＨ1001小鉄塊（図１）

上面

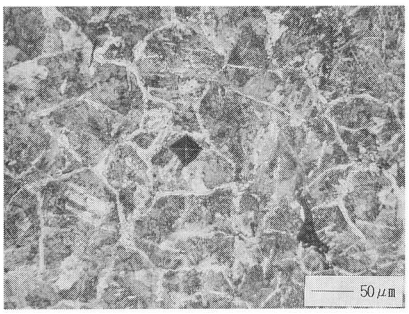


下面

外観



×100

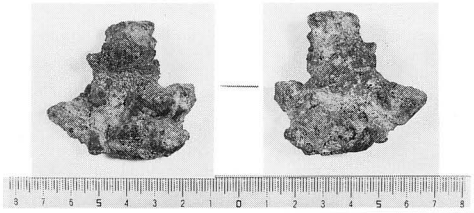


×200

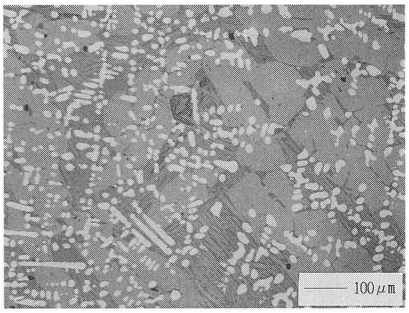
顕微鏡組織

前田ＳＨ1002鉄滓（図２）

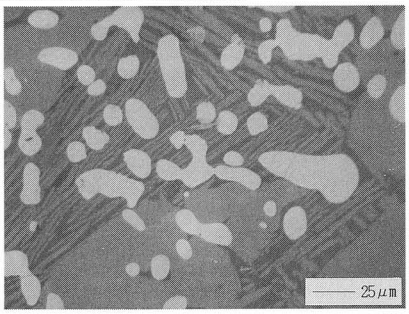
外観　上面



下面



×100

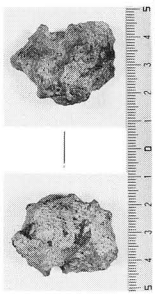


×400

顕微鏡組織

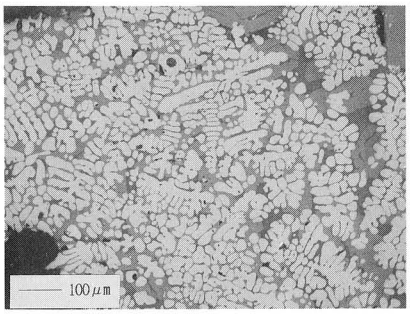
前田ＳＨ1003鉄滓（図３）

上面

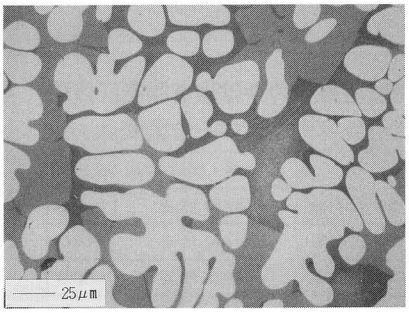


下面

外観



×100

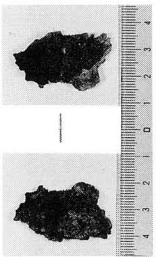


×400

顕微鏡組織

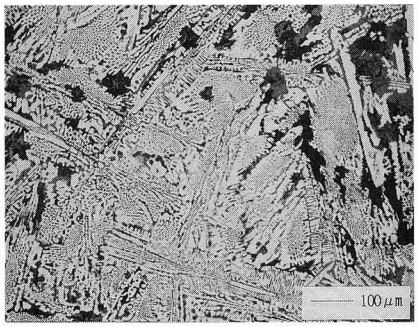
前田ＳＨ1005鋳鉄片（図４）

上面

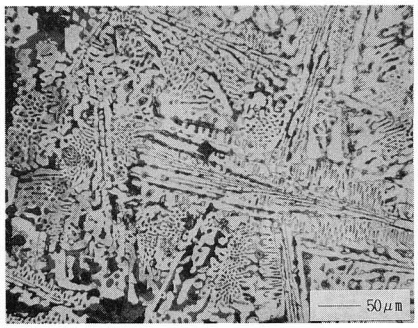


下面

外観



×100

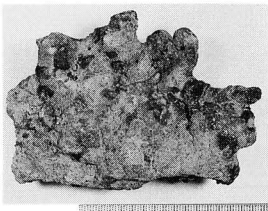


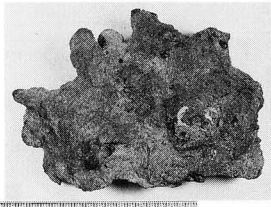
×200

顕微鏡組織

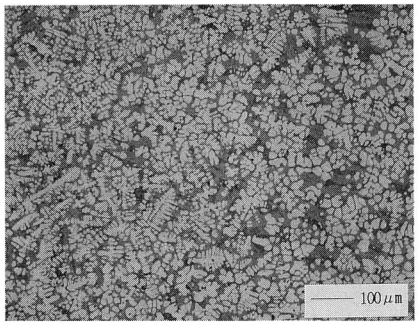
前田ＳＯ1006鉄滓（図５）

外観　上面

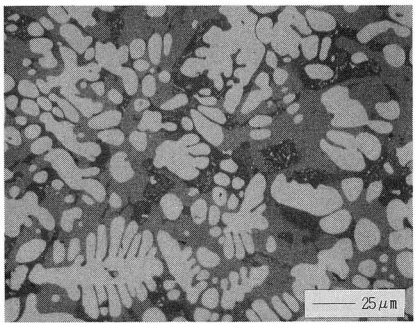




下面



×100



×400

顕微鏡組織

顕微鏡組織中の◆は硬さ測定圧痕跡
顕微鏡写真拡大中心位置交点

記　号	倍　率	上部左端×上部右端 mm	倍　率
SH1001	(×100)	60×55 付 近	(×200)
SH1002	(×100)	60×60 付 近	(×400)
SH1003	(×100)	92×50 付 近	(×400)
SH1005	(×100)	61×84 付 近	(×200)
SO1006	(×100)	72×68 付 近	(×400)

2　前田遺跡（徳島県板野郡）出土銅塊および銅滓の金属学的調査

久　野　雄一郎

1　はじめに

平成４年10月、㈶徳島県埋蔵文化センターより前田遺跡から出土した銅塊および銅滓、各１点の調査依頼を受けた。

この遺跡からは旧石器時代から江戸時代にわたる多数の遺構と遺物が出土し、平成２、３年度に調査が行われた。

この資料は梵鐘鋳型を含む鋳型破片とともに出土した。

近辺には熊谷寺（88ケ所８番札所）があり、1661年に梵鐘鋳造が行われたとの記録があるため、これに関係のある出土品ではないかと推定されている。

2　外観、重さ

銅塊、銅滓の重さは、それぞれ97.8ｇ、19.42ｇであり、外観は図１および図２に示した。

図１　銅塊外観

図２　銅滓外観

3　成分分析

銅塊および銅滓の成分定量分析は表１のとおりである。

表１　銅塊、銅滓　成分分析値（%）

試料		銅塊	銅滓	備考
重量		4.44 g	9.17 g	
定量項目	Cu	85.54 %	2.2 %	電解重量法
	Pb	3.94	0.18	I. C. P 法
	Fe	0.48	9.16	〃
	Sn	3.16	0.17	〃
	Zn	0.85	0.38	〃
	Al	0.02	8.09	〃
	As	1.60	0.20	〃
	Mn	<0.01	0.17	〃
	Ni	0.04	<0.01	〃
	P	<0.01	0.06	〃
	Si	0.04	57.57	〃
	Sb	0.17	0.02	〃
	Cr	<0.01	0.03	〃
	Ti	<0.01	0.32	〃
	Cd	0.01	<0.01	〃
	Co	0.010	<0.01	ＡＡ法
	Ag	0.051	<0.01	〃
	Au	<0.01	<0.01	〃
	Bi	0.17	0.05	I. C. P 法
	Mg	<0.01	1.92	〃
	S	0.07	0.05	ヨード滴定法
	C	0.07	0.24	赤外検知方式
	Ca	0.05	17.75	I. C. P 法
	O_2	3.0	(42.0 %)	熱伝導方式
合計		99.279%	98.56%	

註：I. C. P 法：プラズマ発光分析法　　AA 法　：原子吸光分析法

4　組織観察

銅塊および銅滓の断面組織をＸ線マイクロアナライザーを用いて観察した。

図３～11は銅塊、図12～21は銅滓の組成像およびＸ線像である。

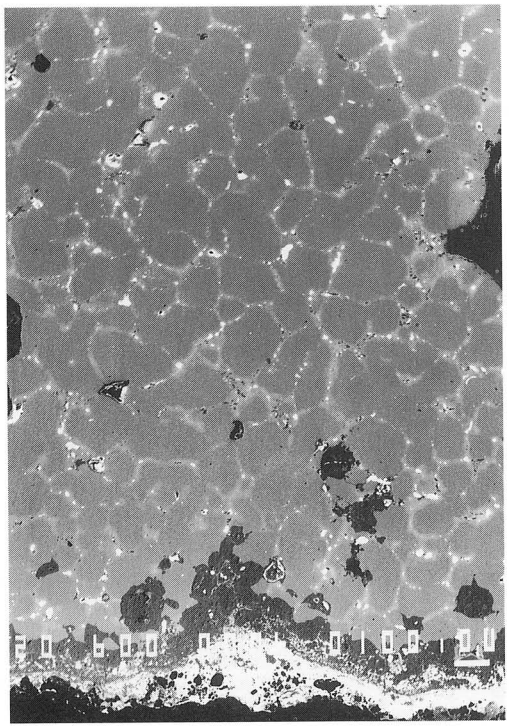


図3　銅塊、組成像（×60）

図4　図3の拡大（×400）

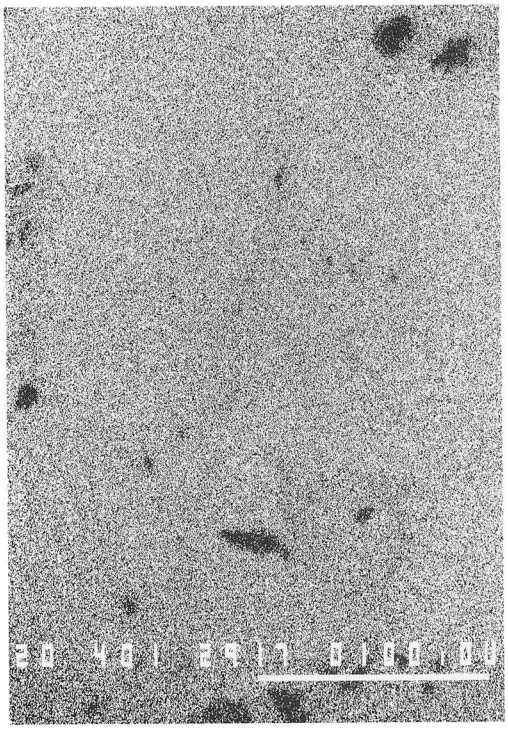


図5　Cu（×400）

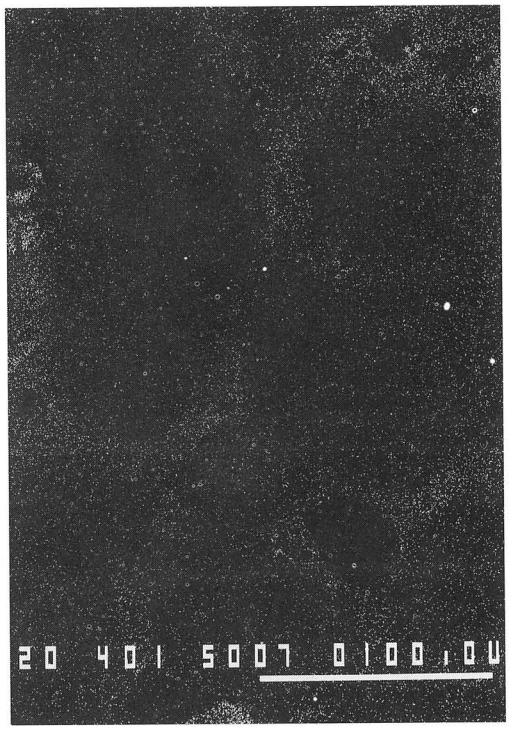


図6　Sn（×400）

図7　Pb（×400）

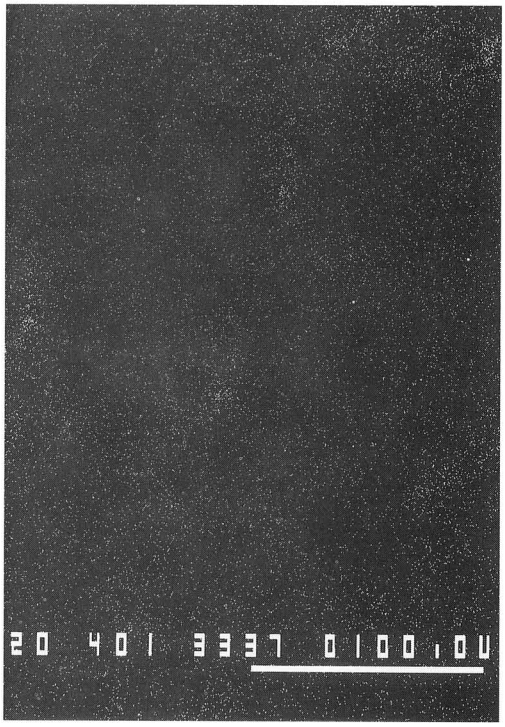


図8　As（×400）

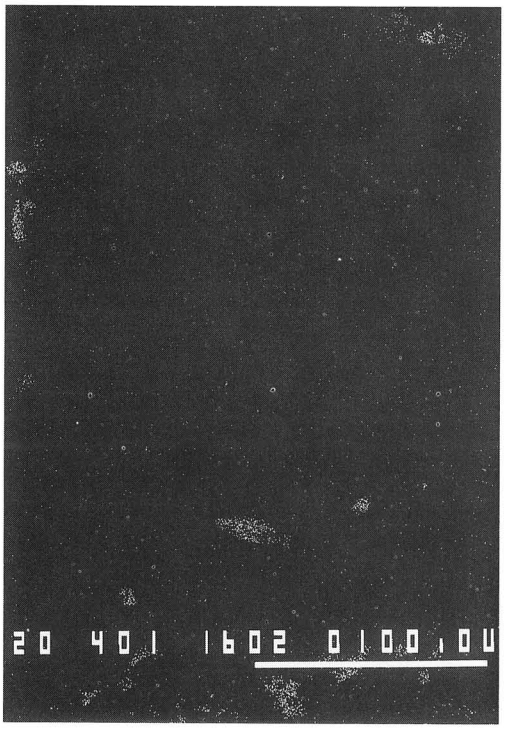


図9　S（×400）

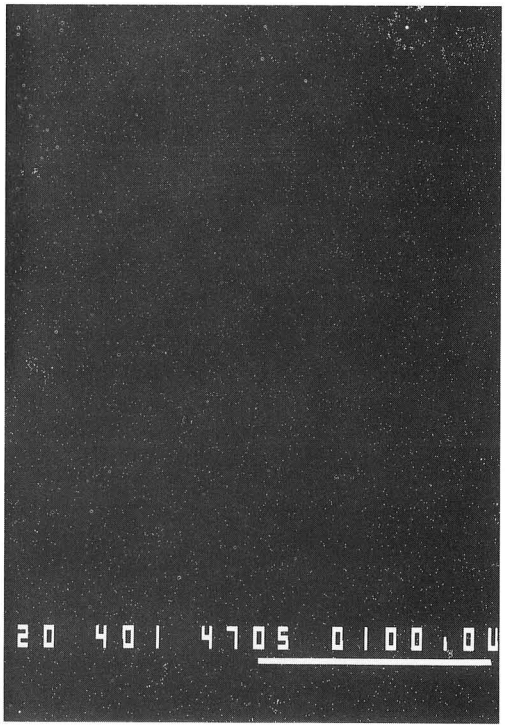


図10　Ag（×400）

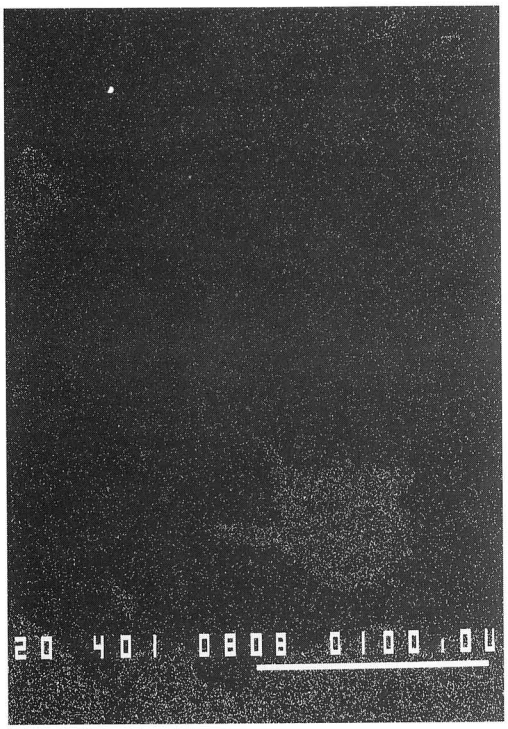


図11　O（×400）

図12　銅滓組成像（×400）

図13　Cu（×400）

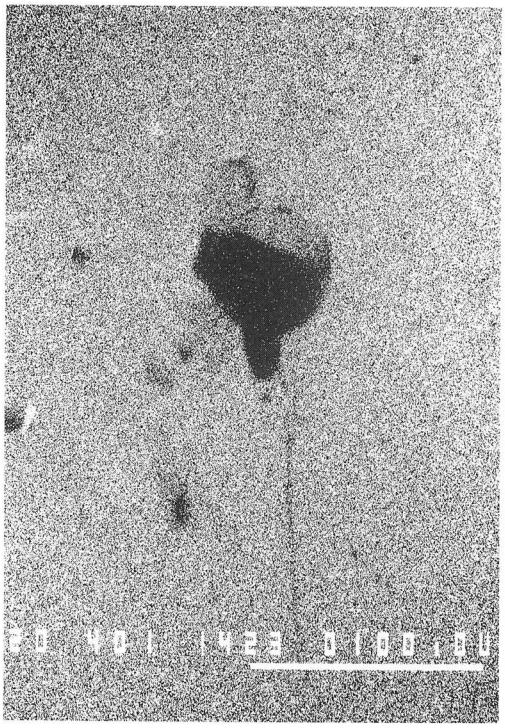


図14　Si（×400）

図15　Ca（×400）

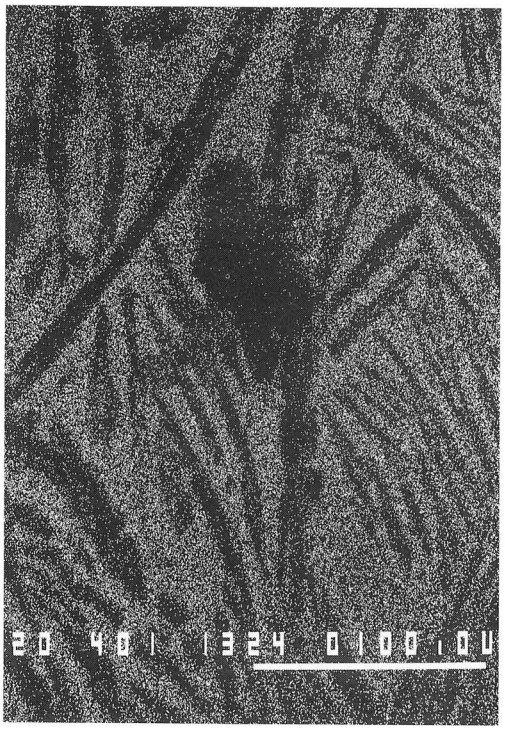


図16　Al（×400）

図17　K（×400）

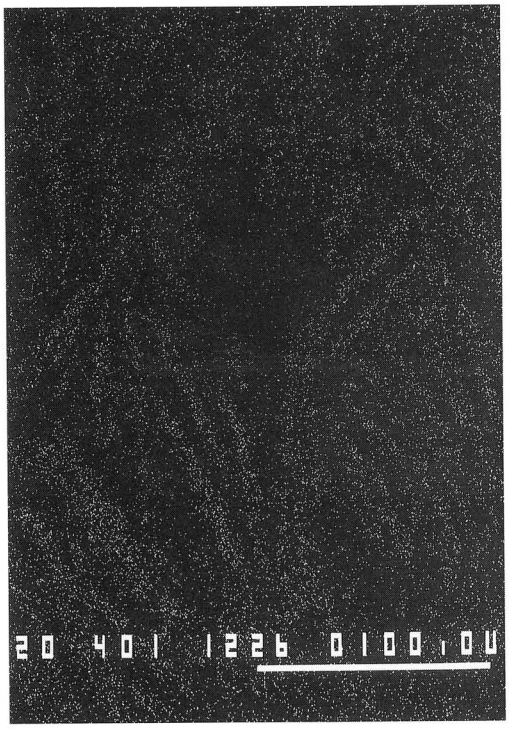


図18　Mg（×400）

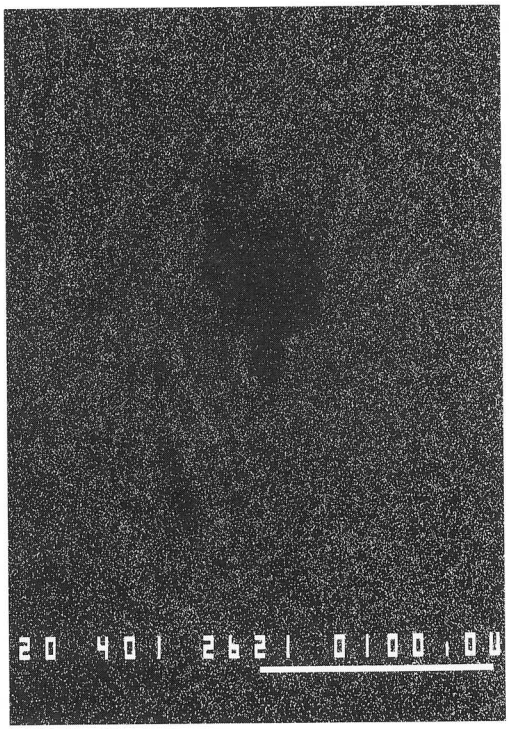


図19　Fe（×400）

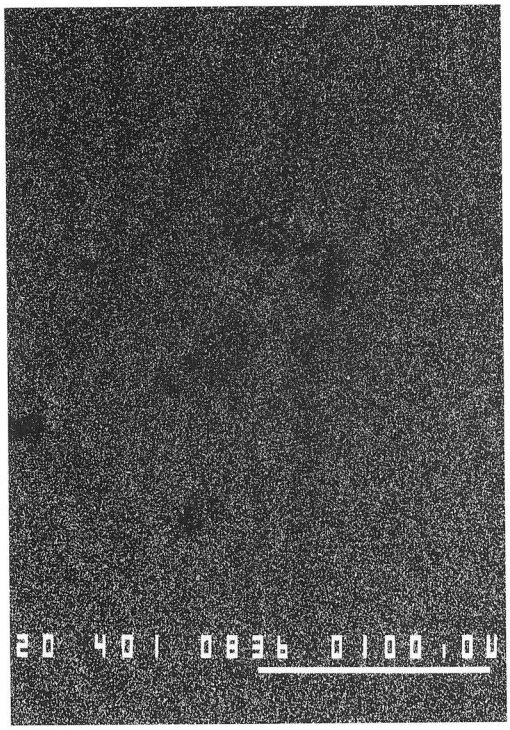


図20　O（×400）

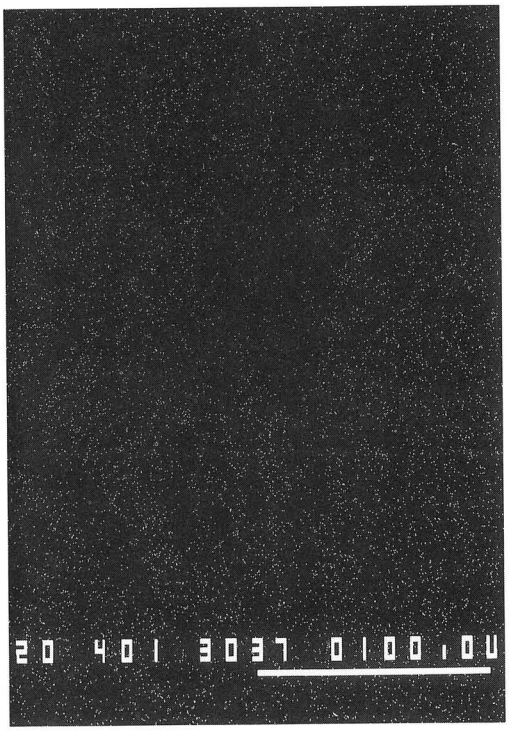


図21　Na（×400）

5　まとめ

以上の結果から、銅塊は銅、すず、鉛、およびヒ素合金であり、青銅である。

梵鐘は普通、すずを10％程度含み、鉛は少ないのでこの銅塊が梵鐘の一部とは考えにくいが、梵鐘鋳造の原料にはなり得る。

また、鉄や亜鉛が多い点、複雑な銅鉱石を製錬して得たものと思われる。

金属組織は、青銅の鋳造組織である。硬さは、平均64.6である。

鉛は硫化鉛として、結晶粒界に存在している。

鉄、ヒ素は全体にほぼ均一に分布しているため銅鉱石に含まれていたものと考えられる。

銅滓の組織は、カルシウムを含んだファヤライト（Fe_2SiO_4）と、ガラス質〔(Si、Ca、Al、K、Mg、Fe)・O〕とからなり、その中に銅粒子が存在している標準的な組織を示している。硬さは527である。

昭和61年に、大浦遺跡（徳島市名東町）出土の平安時代のものと思われる銅滓を調査した結果、相当量のヒ素を認めたが、本資料も同様の傾向が認められる。

第５表　検出遺構一覧表　竪穴住居

遺構名	地区	規　模（cm）			出　土　遺　物	時期	備　考	挿図番号
		長軸	短軸	深さ				
ＳＢ1001	6	360	235	34	弥生土器(壺・甕)、石鏃、柱状片刃石斧、磨石、紡錘車、炭化物、結晶片岩片	弥生		12
ＳＢ1002	6	660	535	20	弥生土器（壺・甕・高杯)、石鏃打製石庖丁、扁平両刃石斧、磨石紡錘車、サヌカイト片、結晶片岩片	弥生		15
ＳＢ1003	6	682	410	20	弥生土器（壺・甕)、石鏃、打製石庖丁、砥石、円盤状石製品	弥生		17
ＳＢ1004	6	695	668	22	弥生土器（壺・甕・高杯)、石鏃、打製石庖丁、磨石、円礫、台石、紡錘車、サヌカイト片、結晶片岩片	弥生		19
ＳＢ1005	14	600	320	28	縄文土器、弥生土器(壺・甕・高杯)、打製石庖丁、柱状片刃石斧	弥生		23

第６表　検出遺構一覧表　掘立柱建物

遺構名	地区	規　模				棟方向	出土遺物	時期	備　考	挿図番号
		間数	梁間(m)	桁行(m)	面積(㎡)					
ＳＡ1001	7	1×3	2.75	5.22	14.36	N-80°-E	弥生土器(甕)、チャート片	弥生		26
ＳＡ1002	2	2×4	3.40	6.76	22.98	N-84°-E	弥生土器(壺・甕)、石鏃、台石	弥生		28
ＳＡ1003	2	1×2	3.41	4.83	16.47	N-80°-W	弥生土器（高杯）	弥生		30
ＳＡ1004	2	1×2	2.88	3.15	9.07	N-79°-W	弥生土器（壺・甕)、炭化物	弥生		32
ＳＡ1005	1	1×2	2.80	2.51	7.03	N-76°-W		不明		34
ＳＡ1006	7	1×3	2.78	4.66	12.95	N-73°-E	弥生土器（壺・甕）	弥生		35
ＳＡ1007	3	1×3	2.97	3.55	10.54	N-89°-E	石鏃、打製石庖丁、サヌカイト片、炭化物	弥生		37
ＳＡ1008	3	1×2	3.09	4.22	13.04	N-86°-W		不明		39
ＳＡ1009	11	1×2	1.90	4.18	7.94	N-89°-E	土師質土器（皿・釜)、瓦器、炭化物	鎌倉		75
ＳＡ1010	11	1×2	1.56	4.27	6.66	N-2°-E	土師質土器（杯・皿)、瓦質土器（甕)、瓦、石英	鎌倉		77
ＳＡ1011	11	1×2	2.21	2.85	6.30	N-89°-E	土師質土器（皿）	鎌倉		78
ＳＡ1012	11	1×2	1.80	3.50	6.30	N-65°-W	土師質土器（鍋）	鎌倉		79
ＳＡ1013	11	1×2	1.91	2.95	5.63	N-70°-W	弥生土器、土師質土器（皿)、瓦器（椀)、サヌカイト片、結晶片岩片	鎌倉		80
ＳＡ1014	11	1×2	1.92	4.03	7.74	N-5°-W	土師質土器（杯)、瓦器、須恵質土器	鎌倉		81
ＳＡ1015	11	1×2	2.49	3.13	7.79	N-5°-W	土師質土器(皿)、須恵質土器、石英、炭化物	鎌倉		82
ＳＡ1016	11	1×2	2.32	3.45	8.00	N-2°-E	土師質土器	鎌倉		83

第７表　検出遺構一覧表　集石土坑

遺構名	地区	規　模（cm）			出　土　遺　物	時期	備　考	挿図番号
		長軸	短軸	深さ				
ＳＫ1004	6	197	151	40	弥生土器（壺・甕・高杯)、石鏃、炭化物、エゴノキの実	弥生		40
ＳＫ1060	12	178	122	17	弥生土器（甕・高杯・ミニチュア土器)、台石、砥石、炭化物、結晶片岩片、チャート片	弥生		43

第8表　検出遺構一覧表　土坑　(1)

遺構名	地区	規模(cm)			出土遺物	時期	備考	挿図番号
		長軸	短軸	深さ				
SK1001	8	100	36	5	土師質土器、瓦器	鎌倉		84
SK1002	8	307	87	20	弥生土器、土師質土器、瓦質土器、鉄滓	鎌倉		85
SK1003	6	166	75	14	土師器	平安		
SK1005	6	240	143	26	土師質土器、瓦器、青磁、台石、鉄滓	鎌倉		86
SK1006	6	157	77	13	土師質土器	鎌倉		
SK1007	6	67	61	14	土師質土器、瓦器	鎌倉		
SK1008	6	151	58	20		不明		
SK1009	6	74	69	24		不明		
SK1010	6	107	33	20	土師質土器	鎌倉		
SK1011	6	110	66	20		不明		
SK1012	6	99	61	16		不明		
SK1013	6	151	52	19		不明		
SK1014	7	119	87	18		不明		
SK1015	7	137	95	18	弥生土器（壺）	弥生		45
SK1016	7	203	46	4	弥生土器	弥生		46
SK1017	7	／	60	16	弥生土器	弥生		
SK1018	7	275	152	12	弥生土器（甕）、石鏃、柱状片刃石斧、サヌカイト片	弥生		47
SK1020	7	154	88	25		不明		
SK1021	7	116	56	12		不明		
SK1022	7	84	40	14		不明		
SK1023	2	280	220	44		不明		
SK1024	2	155	128	26	弥生土器（壺・甕）	弥生		49
SK1025	2	194	144	25	弥生土器（壺・鉢）、土師器（皿）、サヌカイト片	平安		66
SK1026	2	155	65	54	弥生土器、結晶片岩片	弥生		
SK1027	2	218	150	50	弥生土器（壺・鉢）	弥生		51
SK1028	2	236	106	22		不明		
SK1029	2	257	136	60	弥生土器、土師質土器、瓦質土器	鎌倉		87
SK1030	2	92	80	34	土師質土器、瓦質土器、サヌカイト片、鉄滓	鎌倉		87
SK1031	2	95	74	23	弥生土器（甕）	弥生		53
SK1034	2	60	82	14	土師器（杯・皿）、須恵器（蓋）	平安		68
SK1036	1	96	81	13	土師質土器（皿）	室町		88

第９表　検出遺構一覧表　土坑　(2)

遺構名	地区	規　模（cm）			出　土　遺　物	時期	備　考	挿図番号
		長軸	短軸	深さ				
ＳＫ1037	3	462	136	25	弥生土器（壺・甕）、打製石庖丁 サヌカイト片	弥生		54
ＳＫ1038	3	209	103	42		不明		
ＳＫ1039	3	180	68	40	弥生土器、サヌカイト片	弥生		56
ＳＫ1040	3	170	112	51	弥生土器	弥生		
ＳＫ1041	3	113	86	17		不明		
ＳＫ1042	3	146	50	17		不明		
ＳＫ1043	3	171	91	35	弥生土器	弥生		57
ＳＫ1044	3	147	101	58	弥生土器	弥生		58
ＳＫ1045	3	100	70	42	弥生土器（壺・甕）、打製石庖丁、 紡錘車	弥生		59
ＳＫ1046	3	150	58	22		不明		
ＳＫ1047	3	118	54	19		不明		
ＳＫ1048	3	126	73	28		不明		
ＳＫ1049	3	254	150	48	紡錘車、チャート片	弥生		61
ＳＫ1050	3	154	106	32	チャート片	不明		
ＳＫ1051	3	150	56	36		不明		
ＳＫ1052	3	200	122	49	土師器、須恵器（蓋）、チャート片	平安		71
ＳＫ1053	11	104	43	41	土師質土器、瓦質土器	鎌倉		90
ＳＫ1054	11	132	68	12	土師質土器	鎌倉		91
ＳＫ1055	11	66	39	13	土師質土器（皿・鍋）、炭化物	鎌倉		92
ＳＫ1056	11	78	63	12	土師質土器	鎌倉		94
ＳＫ1057	11	73	49	24	土師質土器（鍋）	鎌倉		95
ＳＫ1058	11	103	80	14	瓦器（椀）、青磁（碗）	鎌倉		96
ＳＫ1059	11	70	30	30	土師質土器、瓦質土器	鎌倉		98
ＳＫ1061	14	88	72	10	土師質土器（杯、皿）	鎌倉		99
ＳＫ1062	14	58	62	27	炭化物	不明		
ＳＫ1063	14	257	220	11	弥生土器（壺・甕・鉢）、石鏃、打 製石庖丁、柱状片刃石斧	弥生		63
ＳＫ1064	14	120	115	51	縄文土器	縄文		9
ＳＫ1065	14	70	68	36	縄文土器（深鉢）	縄文		10
ＳＫ1066	14	203	101	7		不明		
ＳＫ1067	16	75	63	57		弥生		

第10表　検出遺構一覧表　土壙墓

遺構名	地区	規　模（cm）			出　土　遺　物	時期	備　考	挿図番号
		長軸	短軸	深さ				
ＳＴ1001	16	93	58	26	土師質土器（杯）、人骨	室町		101

第11表　検出遺構一覧表　鍛冶、鋳造遺構

遺構名	地区	規　模（cm）			出　土　遺　物	時期	備　考	挿図番号
		長軸	短軸	深さ				
ＳＨ1001	2	193	124	12	弥生土器、土師質土器（椀・皿）、瓦器（椀）、須恵質土器、鉄滓	鎌倉		103
ＳＨ1002	2	90	66	14	瓦器（椀）、鉄滓	鎌倉		105
ＳＨ1003	2	112	68	28	土師質土器（皿・釜）、鉄滓	鎌倉		107
ＳＨ1004	2	142	80	17	弥生土器（甕）、鉄滓	鎌倉		109
ＳＨ1005	16	196	189	122	梵鐘鋳型、溶解炉、銅滓、金属製品	江戸		123
ＳＨ1006	2	55	31	16	鉄滓、炭化物	鎌倉		110
ＳＨ1007	2	40	30	17	鉄滓、炭化物	鎌倉		110

第12表　検出遺構一覧表　炭窯

遺構名	地区	規　模（cm）			出　土　遺　物	時期	備　考	挿図番号
		長軸	短軸	深さ				
ＳＯ1001	6	244	158	20	土師質土器、須恵質土器	鎌倉		111
ＳＯ1002	6	610	136	20	土師質土器	鎌倉		112
ＳＯ1003	6	210	67	12		不明		113
ＳＯ1004	6	417	146	16	弥生土器、土師質土器	鎌倉		114
ＳＯ1005	9	357	111	6	石鏃	不明		115
ＳＯ1006	14	628	162	36	弥生土器、土師質土器（皿）、瓦質土器、鉄滓、炭化物	鎌倉		117
ＳＯ1007	14	570	298	19	弥生土器、須恵質土器	鎌倉		119

第13表　検出遺構一覧表　溝

遺構名	地区	規　模（cm）			出　土　遺　物	時期	備　考	挿図番号
		長軸	短軸	深さ				
ＳＤ1001	8	／	80	12		不明		
ＳＤ1002	6	／	123	12		不明		
ＳＤ1003	6	1750	37～80	10	土師質土器（杯）、瓦器、須恵質土器、鉄滓	鎌倉		120
ＳＤ1004	7	1700	46～117	10	土師質土器	鎌倉		121
ＳＤ1005	7	／	58～81	12	弥生土器	弥生		
ＳＤ1006	2	／	35～130	50		近世		
ＳＤ1007	11	403	41～107	20		不明		

法量中の（　）は土器については復元値、石器類については現存値を表す。

第14表　ＳＫ1065出土遺物観察表

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
1	縄文土器 深鉢	13区 ＳＫ1065 覆土	口径(25.7)	口縁部が外方に向かいゆるやかに開く。端部を若干外反させ、方形におさめる。端部に棒状工具の側面圧痕。口縁部から７条１組の沈線を垂下させる。	内外面ナデ	石英・長石粒を多く含む。	(外)暗褐色 (内)暗褐色	縄文後期

第15表　ＳＢ1001出土遺物観察表

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
2	弥生土器 壺	６区 ＳＢ1001 炉内	口径(18.6)	頸部はやや外反気味に立ち上がり、口縁部で大きく外反。端部は上方に小さく、下方に大きく拡張。 端部は尖り気味におさめる。 端部は凹線２条。頸部と体部の境に刻目。	剝離により不明。	石英砂粒を含む。	(外)黄橙色 (内) 浅黄橙色	
3	弥生土器 壺	炉内	口径(15.1)	頸部は直立気味に立ち上がり口縁部で大きく外反する。端部は上下に拡張して丸くおさめる。 端部は弱い凹線状のヨコナデ。	内外面ヨコナデ。	砂粒少量含む。	(外)赤褐色 (内) 明黄褐色	
4	弥生土器 甕	覆土	口径(18.6)	立ち気味の体部に外反する口縁部。 端部はやや肥厚し若干上方へつまみあげる。	口縁内外面ヨコナデ。体部外面磨滅により不明。 内面ヘラケズリ。	砂粒を含む。	(外) にぶい橙色 (内) 浅黄橙色	

番号	器　種	出土地点 層　位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	備　考
5	石鏃	覆土	1.7	1.2	0.2	0.3	サヌカイト	基端部欠損
6	磨製石斧	覆土	20.8	3.6	4.0	710	緑色片岩	柱状片刃石斧 完形
7	磨石	覆土	11.5	8.2	7.3	1000	砂岩	完形
8	紡錘車	覆土	径 5.4	——	0.3	19.8		土製紡錘車Ｂ種 完形
9	紡錘車	覆土	径 4.0	——	0.5	10.0		土製紡錘車Ｂ種 未穿孔

第16表　ＳＢ1002出土遺物観察表

番号	器　種	出土地点 層　位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	備　　考
10	石鏃	6区 ＳＢ1002 覆土	3.6	2.2	0.5	3.1	サヌカイト	完形
11	石鏃	覆土	(1.8)	1.2	0.4	(1.5)	サヌカイト	先端部欠損
12	石庖丁	覆土	9.5	4.5	0.8	61.3	結晶片岩	両端に抉りあり 完形
13	石庖丁	覆土	(7.2)	4.1	0.9	(33.3)	結晶片岩	抉りあり 欠損
14	石庖丁	覆土	(5.7)	4.3	0.6	(23.4)	結晶片岩	抉りあり 欠損
15	磨製石斧	覆土	(4.4)	(3.5)		(13.5)	緑色片岩	扁平両刃石斧 刃部
16	紡錘車	覆土	径 3.4	——	0.5	7.4	——	土製紡錘車Ｂ種 完形
17	紡錘車	覆土	径 (1.8)	——	0.4	——	——	土製紡錘車Ｂ種 欠損

第17表　ＳＢ1003出土遺物観察表　(1)

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
18	弥生土器 壺	6区 ＳＢ1003 覆土	口径(11.2)	内傾気味の頸部から強く外反する口縁部で、端部は若干上下に拡張。 頸部と体部の境に強いヨコナデによる段を持つ。口縁端部に弱い凹線状のヨコナデ。直径1cmの円形浮文を貼付し、その上に刺突文を施す。頸部外面下位に左下がりの篦圧痕文を施す。	口縁部内外面ヨコナデ、頸部外面7条／cmのタテハケ。 頸部内面ヨコナデ。 体部内外面ナデ。	砂粒少量含む。	(外)橙色 (内)赤褐色	
19	弥生土器 甕	覆土	口径　13.4 体部最大径 15.4	立ち気味の体部で「く」の字状に外反する口縁部。端部はやや肥厚し、方形におさめる。体部最大径やや上よりに篦圧痕文。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面6条／cmのタテハケ。内面磨滅のため不明、ヘラケズリか。	石英・赤色粒を含む。	(外)浅黄色 (内)暗灰色	

第18表　ＳＢ1003出土遺物観察表　(2)

番号	器　種	出土地点 層　位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	備　　考
20	石鏃	6区 ＳＢ1003 覆土	(3.0)	2.4	0.6	(2.9)	サヌカイト	基部～茎部欠損
21	石鏃	覆土	(3.3)	1.6	0.3	(1.9)	サヌカイト	有茎式 先端部欠損
22	石鏃	覆土	(3.3)	2.3	0.3	(3.0)	結晶片岩	基部欠損
23	円盤状 石製品	覆土	径 4.8	—	0.6	20.0	結晶片岩	
24	石庖丁	覆土	(6.2)	5.2	1.0	(55.6)	結晶片岩	両端欠損

第19表　ＳＢ1004出土遺物観察表　(1)

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
25	弥生土器 壺	6区 ＳＢ1004 覆土	口径(22.3)	大きく外反する口縁で頸部を上下に拡張。口縁端部凹線２条。	口縁部内外面ヨコナデ。外面下半７条／cmのタテハケ。	微砂粒含む。	(外)橙色 (内)橙色	
26	弥生土器 壺	覆土	口径(23.1)	大きく外反する口縁で、端部を上下に拡張し丸くおさめる。口縁端部に不明瞭な凹線３条。	口縁部内外面ヨコナデ。下半外面６条／cmのタテハケを疎に施す。	砂粒多く含む。	(外) にぶい橙色 (内)淡橙色	
27	弥生土器 壺	覆土	口径 (9.8)	やや扁平な体部から直線的に内傾した口縁を持つ。端部は若干外方に拡張するが、方形気味におさめる。口縁部に凹線５条。体部外面上半に左下がりの篦圧痕文。	口縁部内外面ヨコナデ。下半ユビオサエ。体部外面中位に横位のヘラミガキを密に施す。下半は斜位のヘラミガキ。	石英粒を含む。	(外)橙色 (内)橙色	
28	弥生土器 甕	覆土	口径(20.4)	ゆるやかに外反する口縁部。端部は方形気味におさめる。体部との境に強いヨコナデによる段を有する。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面横位のヘラケズリ。外面磨滅不明。	石英・片岩粒を含む。	(外) にぶい橙色 (内) にぶい橙色	
29	弥生土器 甕	覆土	口径(20.9)	強いヨコナデと段を持ち、口縁部はゆるやかに外反。端部は若干上方につまみあげて尖り気味におさめる。	内外面ヨコナデ。	砂粒を含む。	(外)橙色 (内)浅黄橙色	

第20表　ＳＢ1004出土遺物観察表　(2)

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
30	弥生土器 鉢	6区 ＳＢ1004 覆土	口径(25.8)	体部は内反気味に立ち上がり、口縁下に段を有する。口縁端部は方形気味におさめる。 口縁部と体部の境に凹線１条。	磨滅により不明。	微砂粒を含む。	(外) にぶい橙色 (内) にぶい橙色	
31	弥生土器 底部	覆土	底径 (6.7)	あげ底の底部に直立気味の体部を持つ。	外面９条／cmのタテハケ。底部付近ユビオサエ後ヨコナデ。 内面縦位のヘラケズリ。	微砂粒含む。	(外) にぶい黄橙色 (内) にぶい黄橙色	
32	弥生土器 底部	覆土	底径　4.4	あげ底の底部より外反気味にたちあがる体部。	外面ユビオサエで底部を形づくり上方へナデあげる。 内面斜位、縦位のヘラケズリ。	砂粒多く含む。	(外) 灰黄褐色 (内) 褐灰色	

番号	器　種	出土地点 層　位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	備　考
33	石鏃	覆土	(4.9)	2.2	0.7	(6.1)	サヌカイト	有茎式 基部欠損
34	石鏃	覆土	(4.0)	1.9	0.4	(3.4)	サヌカイト	有茎式 先端部欠損
35	石鏃	覆土	3.8	2.0	0.5	3.3	サヌカイト	有茎式 完形
36	石鏃	覆土	2.9	1.4	0.4	1.4	サヌカイト	凸基式 未成品か
37	磨石	覆土	10.0	2.8	0.9	52.8	泥岩	平坦面の両面を使用
38	磨石	覆土	8.0	2.2	1.6	44.0	泥岩	長軸方向に使用
39	石庖丁	覆土	10.0	4.7	1.3	69.1	結晶片岩	両端に抉りあり 完形
40	石庖丁	覆土	(5.3)	5.5	0.9	(40.2)	結晶片岩	抉りあり 欠損

第21表　ＳＢ1004出土遺物観察表　(3)

番号	器　種	出土地点 層　位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	備　　考
41	台石	6区 ＳＢ1004 覆土	28.0	20.4	13.2	14100	砂岩	平坦面の両面を使用 完形
42	紡錘車	覆土	径 3.3	—	0.4	6.09		土製紡錘車Ｂ種 完形
43	紡錘車	覆土	径 3.1	—	0.5	5.4		土製紡錘車Ｂ種 完形
44	紡錘車	覆土	径 4.5	—	0.4	10.3		土製紡錘車Ｂ種 完形
45	紡錘車	覆土	径 5.0	—	0.6	(15.2)		土製紡錘車Ｂ種 欠損
46	紡錘車	覆土	径 5.0	—	0.6	(16.5)		土製紡錘車Ｂ種 欠損
47	紡錘車	覆土	径 3.2	—	0.2	(4.9)		土製紡錘車Ｂ種 欠損
48	紡錘車	覆土	径 3.1	—	0.4	(5.7)		土製紡錘車Ｂ種 欠損
49	紡錘車	覆土	径 3.2	—	0.5	(6.3)		土製紡錘車Ｂ種 欠損
50	紡錘車	覆土	径 4.4	—	0.4	(18.2)		土製紡錘車Ｂ種 欠損
51	紡錘車	覆土	径 4.0	—	0.5	(9.6)		土製紡錘車Ｂ種 欠損
52	紡錘車	覆土	径 4.3	—	0.5	(10.5)		土製紡錘車Ｂ種 欠損
53	紡錘車	覆土	径 3.5	—	0.6	(8.9)		土製紡錘車Ｂ種 欠損
54	紡錘車	覆土	径 4.1	—	0.5	(8.2)		土製紡錘車Ｂ種 欠損
55	紡錘車	覆土	径 3.3	—	0.4	(5.2)		土製紡錘車Ｂ種 欠損

第22表　ＳＢ1004出土遺物観察表　(4)

番号	器　種	出土地点 層　位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	備　　考
56	紡錘車	6区 ＳＢ1004 覆土	径 (2.9)	―	0.5	(4.2)	―	土製紡錘車Ｂ種 欠損
57	紡錘車	覆土	径 3.6	―	0.6	(5.8)	―	土製紡錘車Ｂ種 欠損
58	紡錘車	覆土	―	―	0.4	(2.6)	―	土製紡錘車Ｂ種 欠損
59	紡錘車	覆土	―	―	0.5	(3.4)	―	土製紡錘車Ｂ種 欠損
60	紡錘車	覆土	(2.3)	―	0.5	(2.0)	―	片面より穿孔途中 欠損
61	紡錘車	覆土	2.8	―	0.6	4.4	―	未穿孔
62	紡錘車	覆土	4.6	―	0.7	15.7	―	未穿孔

第23表　ＳＢ1005出土遺物観察表　(1)

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
63	弥生土器 壺	14区 ＳＢ1005 覆土	口径(18.7)	外反気味の頸部から更に大きく口縁部が外反。端部上下に拡張し、丸くおさめる。口縁端部に凹線２条。	内外面に強いヨコナデ。頸部外面７条／cmのタテハケ。内面ナデ。	砂粒少量含む。	(外)橙色 (内)橙色	
64	弥生土器 甕	覆土	口径(20.7)	立ち気味の体部に外反する口縁。 端部を上方に拡張し、尖り気味におさめる。端部に擬凹線１条。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面３条／cmの横位のタタキ。部分的に７条／cmのタテハケを施す。 内面はユビオサエ後ナデ。	砂粒少量含む。	(外)橙色 (内)赤褐色	
65	弥生土器 甕	覆土	口径(17.6) 体部最大径 (23.4)	立ち気味の体部に「く」の字状に強く外反する口縁部。 端部は上下に拡張し尖り気味におさめる。端部に擬凹線１条。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面３条／cmの左下りのタタキ後、９条／cmのタテハケを施す。 内面はユビオサエ後ナデ。	微砂粒を含む。	(外)橙色 (内) 明赤褐色	

第24表　ＳＢ1005出土遺物観察表　(2)

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
66	弥生土器 甕	14区 ＳＢ1005 覆土	口径(13.2)	立ち気味の体部に「く」の字状に外反する口縁。端部は上方に拡張し、丸くおさめる。 口縁端部擬凹線１条。	口縁部内外ヨコナデ。 体部外面３条／cmの横位タタキ後６条／cmのタテハケ。内面ユビオサエ。	石英・片岩の細粒を含む。	(外)淡橙色 (内)浅黄橙色	
67	弥生土器 甕	覆土	口径(15.6)	「く」の字状に強く外反する口縁部で、端部は上方につまみ上げ尖り気味におさめる。 端部に擬凹線１条。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面磨滅により不明。内面ヘラケズリ後ナデ。	石英・赤色粒を含む。	(外)橙色。 (内)黒褐色	
68	弥生土器 甕	覆土	口径(15.3)	やや肥厚する口縁部で、端部を上方に拡張し尖り気味におさめる。 口縁端部に不明瞭な凹線。	内外面ヨコナデ。	微砂粒を含む。	(外)橙色 (内)黄橙色	
69	弥生土器 甕	覆土	口径　15.4	外反し、やや肥厚する口縁部で、端部を丸くおさめる。 口縁端部に擬凹線１条。	内外面ヨコナデ。	精良	(外) にぶい橙色 (内)橙色	
70	弥生土器 甕	覆土	口径(16.2)	やや肥厚する口縁部で、端部を上方につまみあげ、丸くおさめる。 口縁端部に擬凹線２条。	内外面ヨコナデ。	微砂粒を含む。	(外)淡橙色 (内)淡橙色	
71	弥生土器 甕	覆土	口径(15.5)	大きく外反する口縁部で、端部を若干上下に拡張し、丸くおさめる。 口縁端部に擬凹線１条。	内外面ヨコナデ。	１～２mm の砂粒を含む。	(外) 明赤褐色 (内) にぶい黄橙色	
72	弥生土器 壺	覆土	口径(13.8)	頸部で大きく外反する口縁部で、頸部との境に強いヨコナデによる段を有する。端部は方形気味におさめる。 口縁端部に擬凹線１条。	口縁部内外面ヨコナデ。	２mm大の石英砂粒を含む。	(外)灰褐色 (内)褐灰色	
73	弥生土器 底部	覆土	底径　7.4	上げ底の底部より、外反しながら立ち上がる体部。	外面７条／cmのタテハケを疎に施す。 底部付近ヨコナデ。 内面ナデ、底部と体部の境に粘土紐接合痕を残す。	石英結晶片岩の粒を多く含む。	(外) にぶい橙色 (内) 灰褐色	

第25表　ＳＢ1005出土遺物観察表　(3)

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
74	弥生土器 底部	14区 ＳＢ1004 覆土	底径（7.3）	上げ底の底部から外反気味に立ち上がる体部。	外面縦位のヘラミガキ。 内面縦位のヘラケズリ。 底面ユビオサエ。	１～２㎜の石英砂粒含む。	(外) にぶい黄橙 (内) 黒褐色	
75	弥生土器 高杯	覆土	口径　22.2 底径　7.4	直線的な体部からわずかに内傾して立ち上がる口縁部。端部は丸みを持った方形状におさめる。脚柱部は短く、裾部にかけてゆるやかに外下方へ開く。脚端部は上方に拡張し、端部尖り気味におさめる。口縁部外面に凹線４条。裾部に４個１組の竹管文を５ヶ所に刺突、脚端部に弱い凹線状のヨコナデ。	内面ヨコナデ。体部外面縦位のヘラミガキを密に施す。内面縦位のヘラミガキ密に見込部は横位のヘラミガキを密に施す。 脚部外面縦位のヘラミガキを密に、内面斜位のヘラケズリ。 体部見込み円盤充てん。	石英含む。	(外) 浅橙色 (内)橙色	完形
76	弥生土器 高杯	覆土	口径(20.1)	口縁部直立。口縁部は尖り気味におさめる。口縁部外面凹線５条、下部に２個１対の円形刺突。	口縁内面ヨコナデ。体部内外面縦位のヘラミガキ。	微砂粒を含む。	(外)橙色 (内)橙色	
77	弥生土器 高杯脚部	覆土	脚部中央部 2.8	比較的細目の脚部で裾部において、ヘラケズリにより器厚を減じている。	外面細い縦位のヘラミガキ。内面横位のヘラケズリ。 紋り目残る。	砂粒を多く含む。	(外)橙色 (内)橙色	
78	縄文土器	覆土	——	数条の平行沈線間を何ケ所かで沈線で区画する。	内面ナデ。	砂粒多く含む。	(外)暗褐色 (内)暗褐色	縄文後期

番号	器　種	出土地点 層　位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	備　考
79	磨製石斧	覆土	18.2	2.9	4.1	473.0	緑色片岩	柱状片刃石斧 完形
80	石庖丁	覆土	(5.4)	3.8	0.7	(22.5)	結晶片岩	抉りなし 欠損

第26表　ＳＡ1001出土遺物観察表

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
81	弥生土器 甕	7区 ＳＰ1087	口径(17.6) 体部最大径 (19.6)	立ち気味の体部で、口縁「く」の字状に強く外反する。口縁部はやや肥厚気味で端部を上方に拡張し、尖り気味におさめる。口縁端部に凹線1条。	内外面ヨコナデ。 頸部外面に強いヨコナデで稜を有する。 体部外面は4条／cmのタタキを水平方向に施す。 内面上半は9条／cmのヨコナナメハケ、後ナデ消し。下半は縦位のヘラケズリを密に施す。	1㎜大砂粒を含む。	(外)橙色 (内)橙色	
82	弥生土器 甕	7区 ＳＰ1083	口径(14.9)	体部上半で段を持ち、「く」の字状に強く外反する口縁部。やや肥厚気味で端部は上方へ拡張尖り気味におさめる。 口縁端部に凹線3条。	内外面ヨコナデ。 体部外面8条／cmのタテハケ。内面ユビオサエを多く残す。	石英粒を含む。	(外) 浅黄橙色 (内)淡橙色	

第27表　ＳＡ1002出土遺物観察表　(1)

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
83	弥生土器 壺	2区 ＳＰ1102	口径(16.8)	口縁大きく開き上方で外反。端部は上下に拡張され、上方は丸く、下方は尖り気味におさめる。 口縁端部に凹線3条。	内外面ヨコナデ。 頸部外面9条／cmのタテハケ。 内面ナデで下半にユビオサエを残す。	砂粒含む。	(外)橙色 (内)橙色	
84	弥生土器 壺	2区 ＳＰ1102	口径(16.9)	外側に開き気味の頸部から口縁部で、更に大きく外反。端部は上下に拡張し、丸くおさめる。 口縁端部付着物により不明。	内外面ヨコナデ。 頸部内外面ヨコナデ。	砂粒含む。	(外)橙色 (内)橙色	
85	弥生土器 甕	2区 ＳＰ1099	口径(19.6)	口縁端部を上方に拡張し、丸くおさめる。口縁端部凹線3条、内面凹線1条。	内面ヨコナデ。	微砂粒を少量含む。	(外)橙色 (内)橙色	
86	弥生土器 甕	2区 ＳＰ1101	口径(26.2)	口縁「く」字状に強く外反。端部上下に拡張、丸くおさめる。 端部に凹線2条。	口縁内外面ヨコナデ。体部外面タテハケ。体部内面ユビオサエ、ヨコナデ。	石英粒含む。	(外) にぶい橙色 (内)橙色	

第28表　ＳＡ1002出土遺物観察表　(2)

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
87	弥生土器 甕	2区 ＳＰ1103	口径(20.0)	「く」字状に外反する口縁部で、端部は上下に拡張し、尖り気味におさめる。 口縁端部凹線２条、内面凹線１条。	内面ヨコナデ。 体部外面磨滅により不明。 内面幅の狭い縦位のヘラケズリを疎に施す。	砂粒を少量含む。	(外)黒褐色 (内) にぶい橙色	

番号	器　種	出土地点 層　位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	備　考
88	石鏃	2区 ＳＰ1102	(4.6)	2.3	0.4	(3.9)	サヌカイト	茎部欠損

第29表　ＳＡ1003出土遺物観察表

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
89	弥生土器 高杯	2区 ＳＰ1117	口径(28.4)	直立気味に立ち上がった口縁で、口縁端部をわずかに外側へ拡張する。 口縁外面に凹線３条。上面に不明瞭な凹線１条を施す。	口縁部内面ヨコナデ。 体部内外面縦方向のヘラミガキ。	微砂粒を含む。	(外)橙色 (内)赤褐色	

第30表　ＳＡ1004出土遺物観察表

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
90	弥生土器 壺	2区 ＳＰ1126	口径(17.6)	外反した頸部からさらに大きく外反する口縁部で、端部は若干拡張するが、方形気味におさめる。 口縁端部に格子状の刻目。	口縁部内外面ヨコナデ。 頸部外面５条／cmのタテハケを疎に施す。内面ヨコナデ。	砂粒少量含む。	(外) にぶい橙色 (内) にぶい橙色	
91	弥生土器 甕	2区 ＳＰ1149	口径(18.4)	やや立ち気味の体部に「く」字状に外反する口縁を持ち、端部を上方に拡張し、尖り気味におさめる。 端部に擬凹線１条。	内外面ヨコナデ。	微砂粒を含む。	(外) 明赤褐色 (内) にぶい赤褐色	
92	弥生土器 底部	2区 ＳＰ1150	底径 (5.4)	平底の底部より、やや丸みを持って立ち上がる体部を持つ。	外面磨滅により不明。 内面底部にユビオサエ。	石英粒を含む。	(外) 黄橙色 (内) にぶい橙色	

第31表　ＳＡ1006出土遺物観察表

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
93	弥生土器 壺	7区 ＳＰ1160	口径(13.7)	頸部やや内傾気味に立ち上がり、口縁部で外反、やや肥厚した端部は方形気味におさめる。	口縁部内外面ヨコナデ。頸部磨滅のため不明。	砂粒を多く含む。	(外)橙色 (内)淡橙色	
94	弥生土器 甕	7区 ＳＰ1160	口径(13.4)	口縁端部を上下に拡張し、端部は丸くおさめる。 口縁端部に幅の広い凹線１条を施す。	内外面ヨコナデ。	微砂粒を含む。	(外)淡黄色 (内)灰白色	
95	弥生土器 甕	7区 ＳＰ1160	口径(20.0)	口縁端部を上下に拡張して、丸くおさめる。口縁端部に凹線２条。	内外面ヨコナデ。	精良	(外) にぶい黄色 (内)黄灰色	
96	弥生土器 甕	7区 ＳＰ1156	口径(21.0)	「く」字状に強く外反する口縁部で、端部を上方に大きく、下方に小さく拡張し、それぞれ丸くおさめる。口縁部内面に強いヨコナデによる稜を持つ。 口縁端部に凹線３条。	内外面ヨコナデ。	砂粒を含む。	(外) にぶい橙色 (内) 淡赤橙色	

第32表　ＳＡ1007出土遺物観察表

番号	器　種	出土地点 層　位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (ｇ)	材質	備　考
97	石鏃	3区 ＳＰ1177	(3.9)	2.1	0.5	(3.7)	サヌカイト	有茎式 茎部、先端部欠損

第33表　ＳＫ1004出土遺物観察表（１）

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
98	弥生土器 壺	6区 ＳＫ1004 覆土	口径　18.6 体部最大径 (28.0)	丸みをおびた体部に太い直立した口縁を持つ。端部は上下に拡張し、尖り気味におさめる。端部に凹線３条。 頸部と体部の境に左下がりの篦圧痕文。	口縁部内外面ヨコナデ。 頸部外面７条／cmのタテハケ。 内面ナデで、絞り目を残す。体部外面タタキ後、上半は７条／cmのタテハケ。下半はヘラミガキ。 内面上半はユビオサエをとどめ下半は縦位のヘラケズリ。	微砂粒含む。	(外) にぶい橙色 (内) にぶい橙色	

第34表　ＳＫ1004出土遺物観察表　(2)

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
99	弥生土器 壺	6区 ＳＫ1004 覆土	口径(22.2)	頸部外反気味に立ち上がり、口縁で大きく外反。端部を上下に拡張し丸くおさめる。口縁端部は不明瞭な凹線２条。	口縁部内外面ヨコナデ。 頸部外面６条／cmのタテハケを密に施す。内面ナデ。	砂粒を含む。	(外)橙色 (内) 浅黄橙色	
100	弥生土器 壺	覆土	口径(14.2)	頸部やや内傾気味に立ち上がり、口縁で大きく外反。端部方形におさめる。 頸部下端に篦圧痕文。	口縁部内外面ヨコナデ。 頸部外面９条／cmのタテハケ。内面ナデ。	１～３㎜の砂粒を含む。	(外) にぶい橙色 (内)褐灰色	
101	弥生土器 壺	覆土	口径　11.9	頸部直立気味で、口縁部でわずかに外反。端部は丸みをおびた方形状におさめる。口縁部から頸部の外面に４条の幅広い凹線。頸部の中位と下位に左下りの篦圧痕文を巡らせる。	頸部から体部にかけて外面に７条／cmのタテハケを施す。 口縁部から頸部上半ヨコナデ、下半ナデ、ユビオサエ。絞り目残す。	１～３㎜の砂粒を含む。	(外)橙色 (内) 明赤褐色	
102	弥生土器 壺	覆土	口径　11.5	頸部直立、口縁で外反し、端部を上下に拡張、尖り気味におさめる。 口縁端部に凹線２条。 頸部外面に凹線５条。	口縁部内外面ヨコナデ。 内面ナデで絞り目残す。 体部ヘラケズリ。	砂粒を含む。	(外)橙色 (内) 明赤褐色	
103	弥生土器 壺	覆土	口径(12.3)	立ち気味の体部から短い頸部が直立し、口縁端部を内外に拡張し、内側は尖り気味に、外側は丸くおさめる。 頸部外面に凹線４条。	口縁部内外面ヨコナデ。 頸部内面ヨコナデ。	微砂粒含む。	(外)橙色 (内)橙色	
104	弥生土器 甕	覆土	口径　20.8	内彎気味の体部に「く」の字状に強く外反する口縁部はやや肥厚する。	内外面ヨコナデ。 体部外面８条／cmのタテハケを密に施す。部分的にナナメハケが入る。 内面横位のヘラケズリを密に施す。口縁部～体部に粘土紐接合痕。	１～５㎜大の砂粒を多く含む。	(外) 橙～褐灰色 (内) 橙～灰褐色	

第35表　ＳＫ1004出土遺物観察表　(3)

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
105	弥生土器 甕	6区 ＳＫ1004 覆土	口径(22.6)	内彎気味の体部に強く外反する口縁部は肥厚気味で、端部は若干拡張する。	口縁部内外ヨコナデ。体部外面6条／cmのタテハケを密に施し後ナデ。 内面横位のヘラケズリ。	1～5㎜大の石英等を少量含む。	(外)橙色 (内)褐灰色	
106	弥生土器 甕	覆土	口径(24.1)	立ち気味の体部に「く」字状に外反する口縁部。 端部は方形気味におさめる。	口縁部内外面ヨコナデ。体部7条／cmのタテハケを密に施す。内面は剝離により不明。	1～5㎜大の石英等を少量含む。	(外)黄橙色 (内)褐灰色	
107	弥生土器 甕	覆土	口径(13.9)	立ち気味の体部に「く」字状に強く外反する口縁部で、端部をわずかに上方につまみあげる。 口縁部と体部の境に強いヨコナデによる稜を有する。 端部に擬凹線1条。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面6条／cmのタテハケ。 内面はユビオサエ後横位、縦位のヘラケズリ後ナデ。	1～5㎜大の石英等を少量含む。	(外)橙色 (内)褐灰色	

番号	器　種	出土地点 層　位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	備　考
108	石鏃	覆土	1.7	1.2	0.3	0.4	サヌカイト	凹基式 基端部欠損

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
109	弥生土器 底部	覆土	底径 (9.5)	上げ底の底部から直線的に立ち上がる体部。	外面縦位のヘラミガキを密に施す。 内面縦位のヘラケズリ。	石英砂粒含む。	(外) にぶい橙色 (内)褐灰色	
110	弥生土器 底部	覆土	底径(9.5)	上げ底気味の底部から大きく外反し立ち上がる体部。	外面6条／cmのタテハケを密に施す。底部付近はヨコナデでハケを消す。 内面スス状の炭化物付着により不明であるがヘラケズリか。底面にはユビオサエを残す。	1～5㎜の石英等を含む。	(外) にぶい橙色 (内)黒色	

第36表　ＳＫ1004出土遺物観察表　(4)

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
111	弥生土器 底部	6区 ＳＫ1004 覆土	底径 (8.6)	上げ底気味の底部から直線的に立ち上がる体部。	内外面剝離が著しいが残る部分を観察すると内面縦位のヘラケズリが施されたものと思われる。	1～10㎜の石英多量に含む。	(外) にぶい橙色 (内) 明褐灰色	
112	弥生土器 底部	覆土	底径 (5.8)	上げ底気味の底部から内彎気味に立ち上がる体部。	外面縦位のヘラミガキ。内面剝離により不明。	微砂粒含む。	(外)橙色 (内)褐灰色	
113	弥生土器 底部	覆土	底径 (9.6)	平底の底部から直線的に立ち上がる体部。	外面縦方向のヘラミガキ。内面剝離のため不明であるが底部に縦位のヘラケズリ、ユビオサエが認められる。	1～5㎜の石英等の砂粒含む。	(外) にぶい橙色 (内) 褐灰色	
114	弥生土器 底部	覆土	底径 (6.5)	上げ底の底部から内彎気味に立ち上がる体部。	外面6条／cmのタテハケ、底部付近にヨコナデ。内面縦位のヘラケズリ。	1～3㎜大の砂粒含む。	(外) にぶい橙色 (内)黒褐色	
115	弥生土器 底部	覆土	底径 (6.5)	平底の底部から直線的に立ち上がる体部。	外面8条／cmのタテハケ後縦位のヘラミガキ。底部付近ヨコナデ。内面斜位のヘラケズリ。	1～5㎜の砂粒含む。	(外) 褐灰色 (内) 黒褐色	
116	弥生土器 高杯	覆土	口径(27.3)	口縁は体部から直立。端部は外方へ拡張、やや尖り気味におさめる。 口縁上端は平坦。脚柱部から裾部にかけてゆるやかに外下方へ開く。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面に縦位のヘラミガキを密に施す。内面横位のヘラケズリ。 絞り目残る。	微砂粒を含む。	(外) 明赤褐色 (内)橙色	脚部は同一の個体と思われる。
117	弥生土器 高杯	覆土	口径(24.0)	強く「く」字状に内反する口縁部。端部を丸くおさめる。	外面口縁直下横位のヘラミガキ。下半縦位のヘラミガキ。 内面縦位のヘラミガキ。	石英粒を含む。	(外)橙色 (内) にぶい橙色。	

第37表　ＳＫ1060出土遺物観察表　(1)

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
118	弥生土器 甕	12区 ＳＫ1060 覆土	口径　21.4 底径　8.5 体部最大径 24.2 器高　22.5	上げ底の底部から丸みを持って立ち上がり、体部上半に最大径を持つ。 ゆるやかに外反し、口縁端部は方形気味におさめる。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面８条／cmのハケ。上下半はタテハケ、中位はヨコハケ、全体にナデ。内面上半は横位のヘラケズリ、中位～下位は斜位のヘラケズリ、底面にユビオサエを残す。	１～３㎜の石英砂粒を含む。	(外)橙色 (内) にぶい橙色	
119	弥生土器 甕	覆土	口径(23.9)	立ち気味の体部にゆるやかに外反する口縁部。端部は方形気味におさめる。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面５条／cmのタテハケを密に施す。 内面横位のヘラケズリ。	片岩・石英を含む。	(外)褐灰色 (内) 灰黄褐色	
120	弥生土器 甕	覆土	口径(14.6)	「く」字状に外反する口縁部で、端部は上方につまみあげ尖り気味におさめる。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面剝離により不明。 内面横位のヘラケズリ。	砂粒を含む。	(外)橙色 (内)黒褐色	
121	弥生土器 甕	覆土	口径(15.7)	立ち気味の体部から「く」字状に外反する口縁部は肥厚気味で、端部は方形気味におさめる。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面磨滅により不明。 内面横位のヘラケズリ。	１～３㎜の石英を多く含む。	(外) にぶい黄橙色 (内) にぶい黄橙色	
122	弥生土器 底部	覆土	底径　(6.8)	上げ底気味の底部から直線的に立ち上がる体部。	外面縦位のヘラミガキ、底部付近ヨコナデ。 内面縦位のヘラケズリ、下部ユビオサエ、ヨコナデ。底面ヘラミガキ後周縁をヨコナデ。	砂粒少量含む。	(外) 明褐色 (内)褐色	
123	弥生土器 高杯脚部	覆土	脚台部径 (9.8)	脚柱部内傾し、裾部で肥厚しながらゆるやかに外下方に開く。 脚端部は上下に拡張し丸くおさめる。	外面剝離のため不明。端面は広い凹線状のヨコナデ。裾部は内面横位のヘラケズリ。脚柱部内面に絞り目残る。	１～２㎜の石英を多く含む。	(外)橙色 (内)黄橙色	

第38表　ＳＫ1060出土遺物観察表　(2)

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
124	弥生土器 ミニチュア 土器	12区 ＳＫ1060 覆土	口径　3.8 底径　2.6 体部最大径 3.3 器高　4.6	手づくねのミニチュア土器。口縁をゆるく外側に折りまげ、端部を丸くおさめる。	外面ナデ、ユビオサエ。底部近くに絞り目。内面ナデ。	やや密 砂を含む。	(外)黄橙色 (内)黄褐色	

番号	器　種	出土地点 層　位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	備　考
125	砥石	覆土	18.2	11.4	13.2	3200	砂岩	片面を使用
126	砥石	覆土	27.2	9.6	11.4	3700	砂岩	3面を使用
127	台石	覆土	34.8	24.6	12.3	15700	砂岩	片面を使用

第39表　ＳＫ1018出土遺物観察表

番号	器　種	出土地点 層　位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	備　考
128	石鏃	7区 ＳＫ1018 覆土	(1.9)	1.7	0.4	(1.1)	サヌカイト	凹基式 先端部欠損
129	磨製石斧	覆土	(11.2)	2.2	2.6	(116.4)	緑色片岩	柱状片刃石斧 刃部欠損

第40表　ＳＫ1024出土遺物観察表

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
130	弥生土器 甕	2区 ＳＫ1024 覆土	口径(19.4)	「く」字状に強く外反する口縁部で端部は方形気味におさめる。	内外面磨滅で不明。口縁部ヨコナデと思われる。	石英(1～3㎜)を多く含む。	(外)橙色 (内)橙色	
131	弥生土器 底部	覆土	底径 (8.4)	平底の底部から直線的に立ち上がる体部。	外面磨滅不明。内面磨滅不明。	石英粒含む。	(外) にぶい橙色 (内)黒褐色	スス状の炭化物付着
132	弥生土器 底部	覆土	底部　6.5	平底の底部から外反気味に立ち上がる体部。	外面ヨコナデ。内面縦位のヘラケズリ。	微砂粒含む。	(外)灰黄褐 (内)灰黄褐	

第41表　ＳＫ1027出土遺物観察表

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
133	弥生土器 壺	2区 ＳＫ1027 覆土	口径(16.8)	外反する口縁部で端部を上下に拡張し、尖り気味におさめる。口縁端部に凹線３条。	内面ヨコナデ。	砂粒多く含む。	(外) 明赤褐色 (内) 明赤褐色	
134	弥生土器 壺	覆土	口径(13.0)	外反する口縁部で端部を上下に拡張し丸くおさめる。口縁端部に凹線３条。	内外面ヨコナデ。	１～３㎜の砂粒多く含む。	(外) 明赤褐色 (内) 明灰褐色	
135	弥生土器 底部	覆土		平底の底部から直線的に立ち上がる。	外面８条／cmのタテハケ 内面磨滅不明。	石英、長石含む	(外)黒色 (内)褐色	
136	弥生土器 鉢	覆土	底径(4.7) 口径(14.4)	あげ底気味の底部から内彎気味に立ち上がる体部。口縁端部方形におさめる。	外面ヘラミガキ。 内面磨滅のため不明。	１㎜大の砂粒少量含む。	(外)橙色 (内)橙色	

第42表　ＳＫ1037出土遺物観察表

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
137	弥生土器 甕	3区 ＳＫ1037 覆土	口径(14.6)	丸みを帯びた体部にゆるく外反する口縁部。端部は方形気味におさめる。	口縁部外面ヨコナデ。内面ヨコナデ。 体部外面磨滅により不明。 内面は横位のヘラケズリ。	石英等の砂粒を含む。	(外) にぶい黄橙色 (内)橙色	

番号	器　種	出土地点 層　位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	備　考
138	石庖丁	覆土	11.3	4.4	0.6	46.1	結晶片岩	両端に抉り 完形

第43表　ＳＫ1045出土遺物観察表

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
139	弥生土器 壺	3区 ＳＫ1045 覆土	口径(17.7)	短めの直立した頸部から外反する口縁部を持つ。端部は上下に若干拡張し、尖り気味におさめる。 体部と頸部の境に左下がりの篦圧痕文を施す。	口縁端部は磨滅不明。 口縁部内外面ヨコナデ。 頸部外面７条／cmのタテハケを密に施す。 内面ヨコナデ。	石英を含む	(外) 浅黄橙色 (内) 橙色	

番号	器　種	出土地点 層　位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	備　考
140	石庖丁	覆土	10.2	4.4	0.8	43.7	結晶片岩	抉りなし 完形

第44表　ＳＫ1049出土遺物観察表

番号	器　種	出土地点 層　位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	備　　考
141	紡錘車	3区 ＳＫ1049 覆土	2,9	——	0.7	6.4		未穿孔

第45表　ＳＫ1063出土遺物観察表

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
142	弥生土器 壺	14区 ＳＫ1063 覆土	口径(24.0)	頸部から口縁部にかけて大きく外反し、端部は上下に拡張し尖り気味におさめる。口縁端部に凹線３条。 円形浮文貼付	内面ヨコナデ。 頸部外面に８条／cmのタテハケ密。	砂粒含む	(外)橙色 (内)橙色	
143	弥生土器 甕	覆土	口径(24.6)	「く」字状に外反し、口縁端部を若干上下に拡張し、丸くおさめる。	口縁内外面ヨコナデ。体部外面７条／cmのタテハケ。 内面剝離のため不明。	砂粒を多く含む。	(外)橙色 (内) 浅黄橙色	
144	弥生土器 底部	覆土	底径 (6.6)	平底の底部から直線的に立ち上がる体部。	外面剝離のため不明。 内面縦位のヘラケズリ。	砂粒を少量含む。	(外) にぶい橙色 (内) にぶい橙色	

第46表　柱穴出土遺物観察表　土器　(1)

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
145	弥生土器 壺	14区 ＳＰ1426	口径(17.1)	直立した頸部から口縁外反。端部は上下に拡張し、尖り気味におさめる。	口縁部内外面ヨコナデ。 端部磨滅。 外面に９条／cmのタテハケ。内面ナデ。	微砂粒含む。	(外) 明黄褐色 (内) にぶい橙色	
146	弥生土器 甕	14区 ＳＰ1426	口径(15.2)	やや立ち気味の体部から「く」字状に強く外反した口縁部を持つ。端部は上方に拡張し、尖り気味におさめる。 口縁端部に擬凹線。	内面ヨコナデ。 体部外面水平方向のタタキ後７条／cmのタテハケ。内面５条／cmのタテハケ後ナデ。	微砂粒含む。	(外)褐色 (内)橙色	
147	弥生土器 甕	14区 ＳＰ1426	口径(19.3)	やや立ち気味の体部に「く」字状に強く外反する口縁部で端部を方形気味におさめる。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面磨滅により不明。 内面ヘラケズリか。	石英、片岩粒を多く含む。	(外)橙色 (内)橙色	

第47表　柱穴出土遺物観察表　土器　(2)

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
148	弥生土器 甕	6区 SP1057	口径(20.9)	「く」字状に外反する口縁部で、端部を上方につまみあげ、尖り気味におさめる。 端部に擬凹線1条。	内外面ヨコナデ。	砂粒を多く含む。	(外) 浅黄橙色 (内)橙色	
149	弥生土器 甕	2区 SP1089	口径(12.5)	「く」字状に強く外反する口縁部。 端部は上方に拡張し、尖り気味におさめる。口縁端部に不明瞭な凹線3条。	内外面ヨコナデ。 体部外面8条／cmのタテハケ。内面に縦位のヘラケズリ。	砂粒を含む。	(外) にぶい橙色 (内)橙色	
150	弥生土器 甕	6区 SP1059	口径(12.4)	口縁端部を方形気味におさめる。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部内面横位のヘラケズリ。口縁部内面に一部黒斑。	石英を少量含む。	(外) にぶい橙色 (内) にぶい橙色	
151	弥生土器 甕	7区 SP1079	口径(16.5)	立ち気味の体部に強く「く」字状に外反する口縁部。端部はやや肥厚するが方形におさめる。	口縁部内外面ヨコナデ。	石英粒を含む。	(外)淡橙色 (内) 浅黄橙色	
152	弥生土器 鉢	6区 SP1058	口径(19.0)	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部でゆるやかに外反。口縁端部は方形におさめる。 口縁部と体部の境に凹線1条。	体部外面磨滅のため不明。内面ナデ。	砂粒を多く含む。	(外)褐色 (内)褐色	

第48表　柱穴出土遺物観察表　石器

番号	器　種	出土地点 層　位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	備　考
153	磨製石斧	14区 SP1414	14.7	3.2	2.0	202	結晶片岩	柱状片刃石斧
154	石鏃	11区 SP1331	1.1	1.2	0.2	0.3	チャート	凹基式、完形
155	石鏃	14区 SP1405	3.1	1.9	0.4	(1.3)	サヌカイト	凹基式 基端部欠損
156	石庖丁	6区 SP1038	(4.1)	4.0	6.7	(12.5)	結晶片岩	抉りを持つ 欠損

第49表　平安時代遺構内出土遺物観察表 (1)

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
157	土師器 杯	2区 SK1025 覆土	底径 (7.6)	平底の底部から内彎気味に立ち上がる体部を持つ。底部と体部の境に成形による段を残す。	外面ヨコナデ。 内面磨滅により不明。 一部に赤彩を残す。 底部ヘラ切り後ナデ。	やや軟 微砂粒 多量混入	(外)橙色 (内) 黄橙色	
158	土師器 杯	2区 SK1034 覆土	口径(15.6)	外反気味にたちあがり、端部尖り気味におさめる。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。	精良	(外)灰白色 (内) にぶい黄橙	
159	土師器 皿	2区 SK1034 覆土	口径　20.8 底径　15.8 器高　3.1	口縁でゆるく外反。 端部はやや尖り気味。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部ヘラ切り後ナデ。	砂粒少量 含む	(外) 灰黄褐色 (内) にぶい黄橙	大形。 盤の可能性あり。
160	須恵器 杯蓋	2区 SK1034 覆土	口径　19.7	端部は尖り気味。 端部に弱い凹面を形成。	内外面ヨコナデ。	密	(外)灰白色 (内) 浅黄橙色	焼成軟質
161	須恵器 皿	2区 SK1034 覆土	高台径 22.3	高台断面は方形。	内外面ヨコナデ。 底部回転ヘラ切り。	微砂粒を 少量含む	(外) 灰白色 (内) 浅黄橙色	焼成軟質
162	須恵器 杯蓋	3区 SK1052 覆土	口径(14.3)	口縁部はやや内反し、口縁端部は尖り気味におさめる。	内外面ヨコナデ。 天井部はヘラ切り、ヘラケズリ。	砂粒を少 量含む	(外) にぶい橙色 (内) にぶい橙色	
163	須恵器 甕	12区 SR1001 覆土	口径(32.2)	口縁端部は上方に拡張。 断面は方形気味。	内外面ヨコナデ。	密 砂粒を含 む。	(外) 暗青灰色 (内) 暗青灰色	
164	須恵器 壺	12区 SR1001 覆土	口径(20.4)	頸部は外反気味に立ち上がり、口縁部で大きく外反。 端部を断面方形気味におさめる。	内外面ヨコナデ。	密 微砂粒を 含む。	(外) 暗青灰色 (内)青灰色	
165	須恵器 壺	12区 SR1001 覆土	口径(10.7)	外反気味に開く口縁部。 端部は方形におさめる。	内外面ヨコナデ。	密	(外) 明オリーブ色 (内) 暗青灰色	
166	須恵器 杯蓋	12区 SR1001 覆土	——	つまみ扁平	天井部回転ヘラ切り。 上半ヘラケズリ。 下半ヨコナデ。	密 砂粒を少 量含む。	(外) オリーブ灰色 (内)灰色	
167	須恵器 杯	12区 SR1001 覆土	口径(11.8) 底径 (8.2) 器高 (2.9)	やや丸味をおびて、外反気味に立ち上がる。 端部尖り気味。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転ヘラ切り後ナデ。	精良	(外)灰 (内)灰	

第50表　平安時代遺構内出土遺物観察表 (2)

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
168	須恵器 底部	12区 ＳＲ1001 覆土	高台径 9.8	高台はやや外側に開く。 断面は方形。	内外面ヨコナデ。 底部回転ヘラ切り後ナデ。	密 1～5㎜ の砂粒を 含む。	(外)緑灰色 (内) 明オリーブ 灰色	
169	須恵器 底部	12区 ＳＲ1001 覆土	高台径 8.5	高台はやや外方に開く。 断面は方形。	内外面ヨコナデ。 底部回転ヘラ切り。	精良	(外)灰白色 (内) 明オリーブ 灰色	
170	須恵器 底部	12区 ＳＲ1001 覆土	高台径 10.4	高台は低く扁平。	内外面ヨコナデ。 底部回転ヘラ切り。	密 砂粒を少 量含む。	(外) 暗青灰色 (内) 暗青灰色	
171	須恵器 底部	12区 ＳＲ1001 覆土	底径(10.2) 高台径 (10.6)	直線的に立ち上がる。 高台断面は方形。	内外面ヨコナデ。	密 砂粒を少 量含む。	(外) オリーブ灰 色 (内) 明オリーブ 灰色	
172	須恵器 円面硯	12区 ＳＲ1001 覆土	口径(13.4) 底径(18.3)	硯面欠失。硯部は圏台により支えられ、側面に4個の長方形の透しを有する。 外提下、圏台下部に凸帯を持ち圏台部を方形におさめる。	内外面ヨコナデ。	密 3～10㎜ の白色砂 粒を含 む。	(外)灰白色 (内) 明オリーブ色	
173	土師器 甕	12区 ＳＲ1001 覆土	口径(26.5)	「く」字状に強く外反する口縁。端部方形におさめる。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 体部内面ユビオサエ残る。	1～3㎜ の石英等 砂粒多く 含む。	(外)橙色 (内) にぶい黄橙	

第51表　中世遺構内出土遺物観察表 (1)

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
174	土師質土器 皿	11区 ＳＰ1264	口径 (7.7) 底径 (5.0) 器高 (1.0)	直線的に立ち上がり、口縁端部でやや外反。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	微砂粒を 少量含 む。	(外) 浅黄橙色 (内) にぶい黄橙	
175	土師質土器 皿	1区 ＳＫ1036 覆土	底径 (7.8)	平底の底部より、内彎気味に立ちあがる。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部静止糸切り。	精良	(外) にぶい黄橙 (内)灰黄褐	
176	土師質土器 鍋	11区 ＳＫ1055 覆土	口径(29.4)	口縁弱く「く」字状外反。端部内側尖り気味。口縁やや肥厚。 底部に向かい丸底状になる。	外面ユビオサエ成形後ナデ。 内面口縁ヨコナデ。胴部境に稜を持つ。下半ナデ。	1～2㎜ 大の石英 多量に含 む。	(外)黒褐色 (内)橙色	外面全体にススス状炭化物付着。
177	土師質土器 杯	11区 ＳＫ1058 覆土	口径(11.3)	口縁部でやや外反し、端部は尖り気味におさめる。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。	精良	(外)暗褐色 (内) にぶい黄褐	

第52表　中世遺構内出土遺物観察表　(2)

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
178	瓦器 椀	11区 SK1058 覆土	高台径 4.0	体部やや内反気味に立ち上がる。 断面半円形の高台を貼付。	体部外面下半ユビオサエ。 内面へラミガキで見込は平行線。	微砂粒多く含む。	(外)灰白色 (内)灰白色	炭素吸着不良
179	瓦器 椀	11区 SK1058 覆土	高台径 4.3	体部内反。 断面半円形の高台を貼付。	体部外面下半ユビオサエ。 内面へラミガキ。	微砂粒を多量に含む。	(外) にぶい橙色 (内)灰白色	炭素吸着不良
180	磁器 碗	11区 SK1058 覆土	口径(19.8)	直線的にたちあがり、口縁部で若干外反。端部は方形気味におさめる。	内外面ロクロナデ。内外に薄く釉を施す。全面に細かい貫入がみられる。	密	緑灰色 素地暗灰色	龍泉窯系 青磁(?)
181	土師質土器 杯	14区 SK1061 覆土	口径(10.0) 器高 (3.3) 底径 (5.6)	直線的に立ち上がり、口縁部で若干外反。 端部丸くおさめる。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	石英、赤色粒含む。	(外) 明茶褐色 (内) 明茶褐色	
182	土師質土器 皿	14区 SK1061 覆土	口径　7.1 底径　5.8 器高　1.4	直線的にたちあがる。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	石英、赤色粒含む。	(外) 明茶褐色 (内) 明茶褐色	
183	土師質土器 皿	14区 SP1061 覆土	口径　7.4 底径　5.4 器高　1.4	直線的にたちあがる。 端部丸くおさめる。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	石英、赤色粒含む。	(外) 明黄褐色 (内) 明黄褐色	
184	土師質土器 皿	14区 SK1061 覆土	口径　7.4 底径　5.8 器高　1.6	短く直線的に立ちあがる。 口縁部断面三角形。 端部丸くおさめる。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	石英、赤色粒含む。	(外) 明黄褐色 (内) 明黄褐色	
185	土師質土器 杯	16区 ST1001 覆土	底径 (7.6)	底部から直線的に立ち上がる。	内外面ヨコナデ。 底部静止糸切り。	石英含む	(外) 淡黄褐色 (内) 淡黄褐色	
186	瓦器 椀	2区 SH1001 覆土	口径　14.6 高台径 4.8 器高　4.0	底部強く張り出し屈曲する。 底部から丸みをもって立ち上がり、口縁部で外反、端部丸くおさめる。 断面半円形の低い高台貼付ユビオサエ残る。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面下半ユビオサエ顕著。 内面横位のへラミガキ密に施す。	微砂粒含む。	(外)黒褐色 (内)黄灰色	炭素吸着不良
187	土師質土器 皿	2区 SH1001 覆土	口径 (8.4) 底径 (6.8) 器高 (1.3)	口縁部は短く直線的。 端部は丸くおさめる。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	精良	(外)橙色 (内) にぶい橙色	

第53表　中世遺構内出土遺物観察表 (3)

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
188	瓦器 椀底部	2区 SH1002 覆土	——	断面三角形の低い高台を貼付。	内面見込みに斜格子状のヘラミガキ。	精良	(外)灰色 (内)暗灰色	和泉型
189	土師質土器 皿	2区 SH1003 覆土	底径 (8.0)	底部からゆるやかにたちあがる。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	微砂粒混入	(外)黄橙色 (内)橙色	

番号	器　種	出土地点 層　位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	備　考
190	石鏃	9区 SO1005 覆土	(1.5)	1.4	0.3	(0.7)	サヌカイト	平基式 先端部欠損

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
191	土師質土器 皿	14区 SO1006 覆土	口径 (8.7) 底径 (5.8) 器高 (1.9)	直線的に立ちあがる。 端部は丸くおさめる。	外面ヨコナデ。 内面ナデ。 底部回転糸切り。	砂粒少量含む。	(外) 淡赤褐色 (内) 淡赤褐色	
192	土師質土器 杯	11区 SP1197	口径(11.0) 底径 (8.0) 器高 (3.6)	直立気味に立ち上がり、口縁部やや外反して尖り気味におさめる。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	精良 砂粒少量含む。	(外) 浅黄橙色 (内) 浅黄橙色	
193	土師質土器 皿	11区 SP1197	口径　7,8 底径　4,8 器高　1,5	ゆるやかに立ち上がる。口縁部で外反、端部尖り気味。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	砂粒少量含む。	(外) にぶい橙色 (内) にぶい橙色	
194	土師質土器 杯	11区 SP1385	口径(11,2)	丸みをおびてたちあがる。 端部はやや尖り気味。	口縁部外面ヨコナデ。 体部内面ナデ。	微砂粒を多く含む	(外) 浅黄橙色 (内) にぶい黄橙	
195	土師質土器 皿	11区 SP1385	口径　7.6 底径　6.5 器高　1.6	口縁短く直線的。 断面三角形。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	微砂粒を少量含む。	(外)橙色 (内)橙色	
196	瓦器 椀	11区 SP1385	口径　14.5 高台径 5.2 器高　4.4	底部が強く張り出して屈曲する。 直線的に立ち上がり、口縁部で若干外反端部は丸くおさめる。 断面三角形の低い高台を貼付後粗いナデ。	口縁部外面ヨコナデで一部ヘラミガキ。 体部外面ユビオサエ。 内面横位のヘラミガキ、見込平行線。	精良 砂粒少量含む。	(外)淡黄色 (内)灰黄色	炭素吸着不良
197	瓦器 椀	11区 SP1385	口径(15.0)	体部直線的に立ち上がり、口縁部でやや外反。 端部肥厚気味で丸くおさめる。	口縁部外面ヨコナデ。 体部外面ユビオサエ。 内面横位のヘラミガキ。	精良 砂粒少々含む。	(外)灰色 (内)灰色	和泉型

第54表　中世遺構内出土遺物観察表 (4)

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
198	瓦器 椀	11区 ＳＰ1193	高台径 (3.6)	ゆるやかに立ち上がる。 断面半円形の高台貼付後ナデ。	体部外面下半ユビオサエ。 内面磨滅著しく不明。	精良	(外)暗灰色 (内)灰白色	炭素吸着不良
199	土師質土器 皿	11区 ＳＰ1193	口径 (8.1) 底径 (6.7) 器高 (1.3)	口縁部直線的。 口縁端部は丸くおさめる。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	微砂粒を少量含む。	(外)灰白色 (内) 浅黄橙色	
200	土師質土器 皿	11区 ＳＰ1193	口径 (8.0) 底径 (6.7) 器高 (1.1)	口縁部はやや直線的に立ち上がる。 端部尖りぎみ。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	精良 砂粒少量含む。	(外) にぶい褐色 (内) にぶい褐色	
201	土師質土器 皿	11区 ＳＰ1200	口径 13.1 底径 8.5 器高 2.4	底部から直線気味に立ち上がり、口縁部でやや内反する。 端部は丸くおさめる。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	精良	(外) 浅黄橙色 (内) 浅黄橙色	
202	瓦器 皿	11区 ＳＰ1251	口径 (7.7) 底径 (5.7)	口縁部外反、端部丸くおさめる。	内外面口縁部ヨコナデ。 底部外面ユビオサエ。	微砂粒を少量含む。	(外)灰色 (内)灰白色	炭素吸着不良
203	磁器 小碗	11区 ＳＰ1287	口径(10.9)	丸味をもってたちあがり口縁部が強く外反。端部は丸くおさめる。 体部外面に箆工具により蓮弁文を施す。	内外面口クロナデ。 内外に厚く釉を施す。	精良	明緑白色 素地灰色	龍泉窯素青磁 小碗Ⅲ-4
204	土師質土器 杯	11区 ＳＰ1249	口径 10.7 底径 6.5 器高 3.1	直線的に立ち上がり、口縁部肥厚し、端部丸くおさめる。	内外面とも剝離により不明。	砂粒少量含む。	(外)橙色 (内) 浅黄橙色	二次火熱受ける。
205	瓦質土器 釜脚部	11区 ＳＰ1249	残存長11.9 径 3.4	断面ほぼ円形。基部大きく屈曲。 身部直線的。	脚部は全体にヘラケズリ後ナデ。 体部は外面ユビオサエ。 内面体部ナデ。 脚貼付部ユビオサエ後上部はナデ。	砂粒を多く含む。	(外)褐灰色 (内)褐灰色	
206	瓦器 椀	14区 ＳＰ1415	口径(14.5) 高台径 (3.8) 器高 (5.2)	球形状に立ち上がり、口縁部で外反。端部は丸くおさめる。 断面三角形の高台貼付。	口縁部内外ヨコナデ。 体部外面ユビオサエ。 内面横位のヘラミガキ。	精良 微砂粒少量含む。	(外)暗灰色 (内)灰白色	和泉型

第55表　中世遺構内出土遺物観察表　(5)

番号	器　種	出土地点 層　位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	備　　考
207	刀装具	11区 ＳＰ1350	3.0	3.0	2.0	——	銅	中央に縣通穴
208	鞴羽口	6区 ＳＰ1018	(8.4)	外径 (9.0) 内径 (2.8)	2.6	——	——	先端に滓付着 吸気部欠損

第56表　ＳＨ1005出土遺物観察表　(1)

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
209	梵鐘 アラ型	14区 ＳＰ1005 覆土	上端径 (60.6) 下端径 (64.8) 高さ 14.4	台形状。内面に段をもち、上面中央に龍頭孔。 下端に合印２ヶ所。	粘土ブロックを積みあげた後、指ナデ整形。 内面に菱垣状沈線。	籾、わらを含む。	橙色	最上部
210	梵鐘 アラ型	覆土	下端径 (63.6)	筒状。やや内傾する。 下端接合面。	内面ユビナデ。	籾、わらを多量に含む。	(外)暗褐色 (内)橙色	中位
211	梵鐘 アラ型	覆土	上端径 (70.2)	筒状。やや内傾する。 上端接合面。	内面沈線。 真土付着。	籾、わらを多量に含む。	(外)暗褐色 (内) にぶい橙色	中位
212	定盤	覆土	外径(93.0) 内径(45.6) 高さ　11.4	大型の輪状。６ヶ所で切断。	全面にユビナデ。上面に部分的に真土付着。	籾、わらを多量に含む。	橙色～にぶい褐色	最下部

第57表　ＳＨ1005出土遺物観察表　(2)

番号	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	残存厚 (cm)	部　位	備　考
213	7.0	16.6	4.0	龍頭	胎土赤変
214	6.5	15.1	3.7	龍頭	胎土赤変
215	3.8	17.9	3.8	龍頭	鋳型面剝落
216	4.5	10.3	3.4	龍頭	鋳型面剝落
217	3.0	3.2	0.5	中帯	
218	2.8	2.7	1.4	笠型付近か	
219	3.8	5.9	1.5	笠型付近か	
220	5.8	9.5	2.5	笠型付近か	クロミ残
221	4.2	3.7	1.7	笠型付近か	クロミ残
222	3.9	5.8	1.7	笠型付近か	クロミ残
223	4.9	4.1	2.1	笠型付近か	クロミ残
224	4.2	5.5	2.3	笠型付近か	クロミ残
225	4.2	5.8	1.6	笠型付近か	
226	3.2	2.0	1.0	間、部位不明	クロミ残
227	4.2	4.5	1.7	笠型付近か	クロミ残
228	3.2	4.1	1.7	笠型付近か	クロミ残

番号	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	残存厚 (cm)	部　位	備　考
229	3.8	2.7	1.0	笠型付近か	
230	3.4	2.9	1.4	笠型付近か	
231	6.4	6.0	0.5	池の間	
232	5.9	7.4	1.5	池の間か	クロミ残
233	4.6	4.2	2.0	池の間か	
234	3.3	4.8	1.9	池の間か	クロミ残
235	3.3	5.8	0.8	間、部位不明	クロミ残
236	2.5	3.0	0.6	間、部位不明	クロミ残
237	3.3	2.9	1.9	池の間か	
238	3.3	3.6	0.9	池の間か	クロミ残
239	2.7	3.8	1.2	池の間	
240	2.5	3.0	1.0	間、部位不明	
241	2.2	2.2	0.6	間、部位不明	クロミ残
242	1.9	3.5	1.2	間、部位不明	
243	3.0	4.0	1.8	間、部位不明	
244	3.1	2.9	0.7	乳頂部	内面クロミ残

第58表　ＳＨ1005出土遺物観察表　(3)

番号	残存長(cm)	残存幅(cm)	残存厚(cm)	部　位	備　考
245	2.9	2.8	0.7	乳頂部	内面クロミ残
246	2.8	3.0	0.5	乳頂部	接合部 内面クロミ残
247	2.9	1.6	0.5	乳頂部	接合部
248	2.5	1.7	0.5	乳頂部	接合部 内面クロミ残
249	1.9	1.9	0.6	乳頂部	内面クロミ残
250	2.7	2.0	0.6	乳頂部	
251	2.0	2.4	0.5	乳頂部	接合部
252	2.3	1.7	0.6	乳頂部	内面クロミ残
253	(2.0)	(4.0)	(1.1)	乳(乳径2.6)	
254	(2.5)	(3.8)	(1.1)	乳(乳径2.6)	
255	(2.3)	(4.0)	(1.2)	乳(乳径2.7)	下面にクロミ残
256	2.8	4.1	1.2	乳(乳径2.7)	
257	2.5	4.1	1.2	乳(乳径2.6)	
258	2.1	4.0	1.2	乳(乳径2.7)	
259	2.0	3.8	1.1	乳(乳径2.6)	
260	(1.8)	(3.7)	(0.9)	乳(乳径2.7)	
261	(2.0)	(3.8)	(1.3)	乳(乳径2.7)	
262	(2.4)	(3.7)	(1.1)	乳(乳径2.6)	
263	(2.2)	(3.7)	(1.3)	乳(乳径2.7)	下面にクロミ残
264	2.6	3.8	1.4	乳(乳径2.7)	下面にクロミ残
265	2.4	3.8	1.1	乳(乳径2.6)	
266	2.2	3.6	1.0	乳(乳径2.6)	
267	4.1	3.2	1.9	——	梵鐘外型 乳埋込部
268	4.9	4.6	3.0	——	梵鐘外型 乳埋込部
269	9.2	11.4	3.2	縦帯	
270	4.8	4.1	1.6	縦帯か	クロミ残
271	4.7	4.5	1.9	中帯もしくは 駒ノ爪	クロミ残
272	14.7	13.6	2.1	中帯	クロミ残
273	4.6	4.1	2.3	中帯	
274	4.4	2.3	2.1	帯部	クロミ残
275	4.2	3.7	2.5	帯部	クロミ残

番号	残存長(cm)	残存幅(cm)	残存厚(cm)	部　位	備　考
276	3.3	4.0	2.3	帯部	クロミ残
277	6.5	6.2	2.2	上帯	
278	5.0	5.9	1.8	縦帯か	クロミ残
279	8.2	5.3	2.9	帯部	クロミ残
280	3.5	3.5	1.9	帯部	胎土赤変
281	3.0	3.5	1.3	帯部	クロミ残
282	4.5	6.1	3.0	帯部	クロミ残
283	6.3	5.5	2.7	不明	縦方向の曲面を持つ
284	3.0	3.5	1.7	間か	胎土赤変
285	2.8	2.2	1.6	帯部	クロミ残
286	2.4	2.6	1.8	帯部	クロミ残
287	5.8	5.8	3.3	中帯	
288	4.4	5.8	2.5	中帯	
289	4.3	6.9	1.6	中帯	クロミ残
290	5.0	3.7	1.6	中帯	クロミ残
291	2.3	4.8	1.7	中帯	クロミ残
292	3.0	3.2	0.5	中帯	
293	2.5	2.7	1.1	中帯	クロミ残
294	2.3	2.6	1.2	中帯	クロミ残
295	1.8	2.5	0.6	中帯	
296	2.9	2.9	1.6	中帯	
297	3.4	3.1	0.9	中帯	
298	2.0	3.2	1.7	中帯	クロミ残
299	1.2	2.1	0.8	草の間(唐草)	
300	2.5	2.1	0.7	草の間(唐草)	
301	2.0	2.5	0.6	草の間(唐草)	
302	2.2	2.4	1.0	草の間(唐草)	
303	2.1	3.0	0.9	草の間(唐草)	
304	2.9	4.4	1.8	草の間(唐草)	クロミ残
305	1.7	2.1	0.8	草の間(唐草)	
306	1.9	2.4	0.7	草の間(唐草)	

第59表　ＳＨ1005出土遺物観察表　(4)

番号	残存長(cm)	残存幅(cm)	残存厚(cm)	部　位	備　考
307	2.7	2.7	1.1	草の間(唐草)	
308	1.8	2.5	0.5	草の間(唐草)	
309	1.6	2.1	0.5	草の間(唐草)	
310	1.7	2.8	1.1	草の間(唐草)	
311	1.8	2.3	0.7	草の間(唐草)	
312	2.1	3.8	1.1	草の間(唐草)	
313	1.6	2.9	0.9	草の間(唐草)	クロミ残
314	1.7	2.1	0.7	草の間(唐草)	クロミ残
315	2.1	3.5	1.3	草の間(唐草)	
316	2.5	2.5	2.2	草の間(唐草)	
317	1.7	2.7	0.6	草の間(唐草)	
318	2.3	2.9	1.1	草の間(唐草)	
319	2.3	2.4	0.6	草の間(唐草)	
320	3.1	2.7	1.8	草の間(唐草)	
321	2.4	2.8	0.6	草の間(唐草)	
322	2.8	3.4	1.0	草の間(唐草)	
323	4.1	3.1	1.1	草の間(唐草)	
324	4.3	3.8	0.8	草の間(唐草)	
325	4.0	4.4	2.7	草の間(唐草)	クロミ残

番号	残存長(cm)	残存幅(cm)	残存厚(cm)	部　位	備　考
326	3.9	3.8	1.5	草の間(唐草)	
327	3.0	5.7	1.3	帯部又は草の間	クロミ残
328	3.5	3.6	0.9	間か	
329	3.2	3.7	0.7	草の間か	クロミ残
330	2.5	3.4	0.7	草の間か	
331	2.7	3.2	1.2	草の間(唐草)	
332	3.6	6.1	1.3		
333	2.3	3.9	1.6	草の間(唐草)か	胎土赤変
334	2.1	3.4	1.8	草の間(唐草)か	胎土赤変
335	2.2	5.2	2.7	帯部か	胎土赤変
336	1.8	3.2	1.1	草の間(唐草)か	胎土赤変
337	2.9	6.1	2.4	帯部か	胎土赤変
338	3.8	3.7	2.2	間か	胎土赤変
339	2.8	8.2	3.4	間か	クロミ残 胎土赤変
340	3.8	10.1	2.0	駒ノ爪か	クロミ残
341	4.3	4.2	4.0	駒ノ爪か	クロミ残
342	8.7	12.9	2.3	駒ノ爪	
343	9.1	24.6	3.4	駒ノ爪	

第60表　ＳＨ1005出土遺物観察表　(5)

番号	器　種	出土地点 層　位	法量(cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
344	溶解炉	覆土	下端径 (86.4)	円筒状。下端接合面。 内面は暗赤褐色を呈し、ひびわれが著しい。	内外面ユビナデ。 外面下部に縄圧痕。 内面下部に真土。	籾、わらを含む。 やや粗い	(外) にぶい橙色 (内) 暗赤褐色	上こしき
345	溶解炉	覆土	下端径 (81.6)	やや外開きの円筒状。下端接合面。中位に羽口装着。 内面には滓が厚く付着。	外面ユビナデ。 下端面に位真土塗付。	籾、わらを含む。 やや粗い	(外) にぶい橙色 (内) 暗赤褐色～ 暗青色	中こしき
346	溶解炉	覆土	上端径 (78.0)	上端から底部にかけてゆるやかにカーブする。内面には滓が厚く付着。	外面タタキ。	籾、わらを少量含む。 堅緻。	(外)黄橙色 (内) 暗赤褐色～ 暗青色	湯溜
347	筒状有孔 土製品	覆土	下端径 (35.0)	筒状で全面に径2.8cm前後の穴を内面より穿孔。	内外面ユビナデ。 外面に縄圧痕５段以上。	籾、わらを含む。	橙色	
348	輪状 土製品	覆土	外径(76.8) 内径(40.8) 高さ　8.4	大型の輪状で形態的には212に類似。 内面に滓状の皮膜付着。３ヶ所で切断。	上面、側面ユビナデ。 上面に真土塗付。	籾、わらを含む。	明黄褐色	

第61表　ＳＨ1005出土遺物観察表　(6)

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
349	輪状 土製品	覆土	外径(81.0) 内径(48.0) 高さ　7.8	大型の輪状で形態的には212に類似。内面に滓状の皮膜付着。5ヶ所で切断。	上面側面ユビナデ。 上面に真土塗付。	籾、わらを含む。	明黄褐色	

第62表　ＳＨ1005出土遺物観察表　(7)

番号	器　種	出土地点 層　位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備　考
350	煙管雁首	ＳＨ1005 覆土	(6.4)	(0.6～0.8)	——	火皿欠損
351	煙管雁首	覆土	(6.0)	(0.6～0.8)	——	火皿欠損
352	煙管雁首	覆土	(6.2)	(0.6～0.8)	——	火皿欠損 線刻有り
353	煙管吸口	覆土	(4.4)	(0.4～0.8)	——	
354	煙管吸口	覆土	(4.0)	(0.4)	——	ラウ寄りつぶれる
355	煙管火皿	覆土	(1.5)	(1.0)	——	
356	銅製品	覆土	(2.0)	(1.2)	(1.2)	筒状
357	銅製品	覆土	(2.8)	(0.5)	——	筒状
358	銅製品	覆土	(8.4)	(0.9)	(0.2)	板状
359	銅製品	覆土	(3.9)	(0.8)	(0.2)	鍵状
360	銅製品	覆土	(3.8)	(0.6)	(0.2)	両端に孔を持つ
361	銅製品	覆土	(2.6)	(7.2)	(0.4)	
362	銅製品	覆土	0.9	1.8	——	鈑、完形
363	銅製品	覆土	(2.6)	(2.0)	(0.1)	装飾品の一部か
364	銅製品	覆土	(3.4)	(1.8)	(0.2)	口縁部に折り返しを持つ容器
365	銅製品	覆土	(5.0)	(2.2)	(0.2)	片口椀(？)
366	銅製品	覆土	(8.4)	(2.8)	——	宝珠形
367	木製品	覆土	(7.0)	(2.9)	(1.5～1.9)	銅滓、木炭が付着
368	砥石	覆土	(3.8)	(2.6)	(1.4)	欠損
369	銅銭	覆土	径 4.9	——	——	寛永通宝(古)
370	銅銭	覆土	径 4.8	——	——	寛永通宝(古)
371	銅銭	覆土	径 4.4	——	——	寛永通宝(古)欠損
372	銅銭	覆土	——	——	——	寛永通宝(古)欠損

第63表　包含層出土遺物観察表　(1)

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
373	縄文土器深鉢	16区 包含層	器厚 0.6	口縁部から体部にかけての部分で、境で大きく屈曲する、屈曲部のすぐ上に、横位の爪形文を施す。	内外面ナデ。	砂粒を多く含む。	(外)明赤褐 (内) にぶい黄橙	縄文中期 船元Ⅰ式
374	縄文土器 深鉢	16区 包含層	器厚 0.7	山形口縁で、頂部に抉りを持つ。外面にＲＬの太い縄文を横位に施文。 その下に２条の微隆帯を設け上面に爪形文を施文。	内外面ナデ。内面にナデによる段をもつ。	１～５㎜大の砂粒を多く含む。	(外)橙 (内)橙	縄文中期 船元Ⅰ式？
375	縄文土器 深鉢	16区 包含層	器厚 0.6	体部から口縁部にかけて屈曲し段をもつ。端部は外方に若干張り出すが、方形におさめる。口縁部下端に２条の微隆帯を設け、上面に横位の爪形文を施文。口縁上端にも爪形文を施文したと思われるが風化により不詳。	内外面ナデ。	砂粒を多く含む。	(外)明赤褐 (内) にぶい橙	縄文中期 船元Ⅰ式
376	縄文土器	14区 包含層	器厚 0.7	体部破片。 太いＬＲの縄文を３条押圧施文。	不明	砂粒を多く含む。	(外)暗褐 (内)浅黄橙	
377	縄文土器 浅鉢？	14区 包含層	器厚 0.7	山形口縁。頂部に穿孔あり。頂部に向かい２条の沈線を施し、体部との境を沈線で画する。	内面ミガキ？	砂粒を多く含む。	(外)橙 (内) にぶい黄橙	縄文後期 縁帯文土器
378	縄文土器 浅鉢？	14区 包含層	器厚 0.6	山形口縁。頂部に沿う形で３本沈線により三角形を描出。	内面ナデ。 焼成堅緻。	砂粒を含む。	(外)浅黄 (内) にぶい黄橙	縄文後期 福田ＫⅡ式？
379	縄文土器 深鉢	14区 包含層	器厚 0.6	体部の破片。ＲＬの磨消縄文。	不明。	砂粒を多く含む。	(外)橙 (内)橙	縄文後期
380	縄文土器 深鉢	14区 包含層	器厚 0.5	体部の破片。３条の垂下条線。	内外面ナデ。	砂粒を多く含む。	(外) にぶい黄褐 (内)灰黄褐	縄文後期
381	縄文土器 深鉢	14区 包含層	器厚 0.6	体部の破片。ＬＲの磨消縄文。	内面ナデ。	１～５㎜大の砂粒を多く含む。	(外)赤褐色 (内)明褐	縄文後期 中津式
382	縄文土器 深鉢	14区 包含層	器厚 0.5	平口縁。若干内反気味にたちあがり、端部を方形におさめる。	内外面ナデ。	砂粒を多く含む。	(外)橙 (内)暗褐	縄文後期

第64表　包含層出土遺物観察表 (2)

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
383	弥生土器 壺	14区 包含層	口径(17.0)	大きく外反する口縁部で、端部を上下に拡張し、上方は尖り気味に、下方は方形気味におさめる。口縁端部に凹線3条と5個1組の刻目。内面に櫛描波状文。	口縁部内外面ヨコナデ。	微砂粒少量含む。	(外)橙色 (内)橙色	
384	弥生土器 壺	14区 包含層	頸径　13.5	外反気味の頸部。頸部外面凹線5条。体部との境に断面三角形の貼付突帯を施す。	内面はヨコナデで絞り目を残す。	砂粒を多く含む。	(外)橙色 (内)橙色	
385	弥生土器 壺	14区 包含層	口径(20.8)	外反気味の頸部からさらに大きく外反する口縁部で、端部は上下に拡張し、尖り気味におさめる。口縁端部に凹線3条施した後、棒状浮文（3個1組）左下がりの刻目（4本1組）を施す。体部との境に左下がりの篦圧痕文を巡らす。	内外面ヨコナデ。 頸部外面6条／cmのタテハケ。内面ユビオサエ後ナデ。	石英、片岩粒を含む。	(外) 浅黄橙色 (内) にぶい橙色	
386	弥生土器 壺	14区 包含層	口径(17.7)	短い頸部。外反気味に立ち上がり口縁部で強い屈曲を持ち外反。端部を上下に拡張し尖り気味におさめる。 口縁端部に凹線2条。頸部と体部の境に断面方形状の貼付突帯。上面に刺突文。	口縁部内外面ヨコナデ。 頸部外面に8条／cmのタテハケを密に施す。 内面ヨコナデ。	2～3㎜の石英。長石粒含む。	(外)橙色 (内)明黄褐色	
387	弥生土器 壺	14区 包含層	口径(16.2)	頸部から口縁部にかけてゆるやかに外反。端部は丸くおさめる。	口縁端部ヨコナデ。その他磨滅により不明。	砂粒を多く含む。	(外)橙色 (内) にぶい橙色	
388	弥生土器 甕	14区 包含層	口径(18.2)	「く」の字状に外反する口縁部で端部は若干上下に拡張。 端部に不明瞭な凹線1条。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面磨滅により不明。	石英等の砂粒を含む。	(外)明赤褐色 (内)明赤褐色	
389	弥生土器 甕	14区 包含層	口径(13.6)	立ち気味の体部に「く」の字状に外反する口縁で端部をつまみあげる。	口縁部内外ヨコナデ。体部外面磨滅により不明。内面はヘラケズリ。	砂粒を少量含む。	(外)橙色 (内)橙色	
390	弥生土器 高杯	7区 包含層	口径(22.2)	直線的な体部から口縁部が直立。 端部は外方へ拡張し、丸くおさめる。口縁部外面凹線3条。	体部外面下半縦位のヘラミガキ、口縁部内面ヨコナデ。その他磨滅のため不明。	微砂粒を含む。	(外)浅黄橙色 (内)橙色	

第65表　包含層出土遺物観察表 (3)

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
391	弥生土器 甕	6区 包含層	口径(14.3)	強く外反する口縁部。 端部を上方につまみあげ、丸くおさめる。	口縁部内外面ヨコナデ。	石英・長石粒を多く含む。	(外)黄橙色 (内)浅黄橙色	
392	弥生土器 高杯	7区 包含層	口径(24.1)	内彎気味に立ち上がる口縁で、端部を外方へ拡張し、尖り気味におさめる。 口縁部外面に凹線3条。	内面ヨコナデ。 体部内外面剝離により不明。	砂粒多量に含む。	(外)淡橙色 (内)淡橙色	
393	弥生土器 器台	14区 包含層	台径(22.6)	直線的に立ち上がる体部に大きく開く裾部を持つ。体部外面に7条の沈線。 裾部は沈線で山形文を描出。 その頂部に外側からの円孔。山形文内部は7本の左下がりの沈線で充てん。	内外面ナデ。	微砂粒を多く含む。	(外) 灰黄褐色 (内)黒褐色	
394	須恵器 杯身	2区 包含層	口径　9.9 底径　5.9 器高　2.4	かえりの先端は尖り気味、端部は丸くやや内傾。	下半はヘラケズり。 上半はヨコナデ。 内面はヨコナデ。 底部はヘラ切り。	密 砂粒を少量含む。	(外) 暗青灰色 (内) 暗青灰色	
395	須恵器 杯蓋	12区 包含層	口径(14.1)	口縁部は外傾。 端部は尖り気味におさめる。	天井部回転ヘラ切り。天井部付近回転ヘラケズり。口縁付近はヨコナデ。	微砂粒を少量含む。	(外)灰白色 (内)灰白色	
396	須恵器 壺	11区 包含層	口径 (9.6)	直線的に立ち上がり口縁部で外反。 端部はやや尖り気味。	内外面ヨコナデ。	砂粒を少量含む。	(外) オリーブ灰色 (内)灰白色	
397	須恵器 壺	14区 包含層	高台径 (10.3)	底部から内反気味に立ち上がる。 高台断面は方形で、内側にやや突出。	内外面ヨコナデ。高台貼付後、丁寧にナデつける。	砂粒を少量含む。	(外) 明オリーブ灰色 (内) オリーブ灰色	
398	須恵器 甑 把手	11区 包含層		把手部上面、下面とも凹あり。	把手部ユビサオエにより貼り付け、ハケ目を施す。 ハケ目 (10条／cm)	微砂粒を多量に含む。	(外)灰白色 (内)灰白色	

番号	器　種	出土地点 層　位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	備　考
399	ナイフ形石器	表採	(4.4)	2.2	0.9	7.3	サヌカイト	下半・先端部欠損
400	ナイフ形石器	8区 包含層	(3.3)	1.7	0.6	—	サヌカイト	上半欠損

第66表　包含層出土遺物観察表 (4)

番号	器　種	出土地点 層　位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	備　　考
401	ナイフ形石器	8区 包含層	3.6	1.6	0.7	3.5	サヌカイト	完形
402	ナイフ形石器	9区 包含層	(2.4)	(2.7)	1.0	(6.2)	赤色チャート	上半欠損
403	翼状剝片	8区 包含層	5.4	3.2	1.1	18.3	サヌカイト	
404	横長剝片	16区 包含層	4.3	6.3	0.6	21.1	サヌカイト	
405	石核	14区 包含層	6.3	5.7	3.3	100.6	サヌカイト	
406	翼状剝片石核	3区 包含層	3.7	8.1	2.0	50.6	サヌカイト	
407	有舌尖頭器	8区 包含層	(2.3)	(2.0)	0.6	(2.8)	チャート	先端部、基端部欠損
408	石鏃	表採	2.2	1.9	0.4	0.8	サヌカイト	凹基式 完形
409	石鏃	2区 包含層	2.3	1.3	0.3	(0.6)	サヌカイト	凹基式 基端部欠損
410	石鏃	12区 包含層	(2.0)	2.1	0.4	(1.0)	サヌカイト	凹基式 先端部欠損
411	石鏃	3区 包含層	1.7	1.5	0.2	0.5	サヌカイト	凹基式 完形
412	石鏃	16区 包含層	2.1	1.7	0.3	1.1	サヌカイト	凹基式 完形
413	石鏃	6区 包含層	(1.7)	1.5	0.3	(0.6)	サヌカイト	凹基式 基端部欠損
414	石鏃	6区 包含層	(1.7)	1.2	0.4	(0.7)	サヌカイト	凹基式 基端部欠損
415	石鏃	6区 包含層	(1.1)	1.3	0.3	(0.4)	チャート	凹基式 先端部欠損
416	石鏃	14区 包含層	(1.8)	1.3	0.3	(0.5)	サヌカイト	凹基式 先端部、基端部欠損

第67表　包含層出土遺物観察表 (5)

番号	器　種	出土地点 層　位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	備　　考
417	石鏃	16区 包含層	(1.3)	(1.2)	0.3	(0.4)	サヌカイト	基端部、先端部 欠損
418	石鏃	1区 包含層	2.2	1.9	0.4	1.0	サヌカイト	凹基式 完形
419	石鏃	3区 包含層	1.9	1.2	0.4	0.8	サヌカイト	凹基式 完形
420	石鏃	11区 包含層	1.8	1.5	0.4	0.7	サヌカイト	平基式 完形
421	石鏃	14区 包含層	(3.0)	2.8	0.4	(3.9)	サヌカイト	平基式 先端部、基部欠損
422	石鏃	14区 包含層	2.7	1.6	0.4	1.2	サヌカイト	平基式 完形
423	石鏃	表採	(2.4)	1.5	0.5	(2.0)	サヌカイト	平基式、先端部欠損
424	石鏃	6区 包含層	(2.1)	1.8	0.5	(1.3)	サヌカイト	基部欠損
425	石鏃	2区 包含層	(1.9)	1.8	0.4	(1.1)	サヌカイト	平基式 先端部欠損
426	石鏃	14区 包含層	1.6	1.4	0.3	0.8	チャート	平基式 完形
427	石鏃	10区 包含層	1.9	1.3	0.3	(0.9)	サヌカイト	平基式 先端部欠損
428	石鏃	11区 包含層	(1.8)	1.4	0.5	(1.6)	サヌカイト	先端部、基部 欠損
429	石鏃	2区 包含層	(1.6)	1.2	0.4	(0.8)	サヌカイト	先端部、基部 欠損
430	石鏃	8区 包含層	1.9	1.4	0.3	(0.8)	サヌカイト	平基式 基端部欠損
431	石鏃	14区 包含層	2.1	1.2	0.2	0.9	サヌカイト	凸基式 完形
432	石鏃	14区 包含層	1.8	1.1	0.3	0.5	サヌカイト	凸基式 完形

第68表　包含層出土遺物観察表 (6)

番号	器　種	出土地点 層　位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	備　　考
433	石鏃	6区 包含層	3.6	2.5	0.7	5.3	サヌカイト	凸基式 完形
434	石鏃	14区 包含層	(2.2)	(2.7)	0.3	(2.1)	サヌカイト	凸基式 先端部欠損
435	石鏃	表採	3.3	2.0	0.6	4.5	サヌカイト	凸基式、先端部欠損
436	石鏃	2区 包含層	3.0	1.8	0.3	2.1	サヌカイト	凸基式 完形
437	石鏃	6区 包含層	(2.9)	1.9	0.5	(2.4)	サヌカイト	有茎式、先端部、茎部欠損
438	石鏃	12区 包含層	3.5	1.4	0.6	2.9	サヌカイト	有茎式 完形
439	石鏃	3区 包含層	(1.8)	2.1	0.4	(1.1)	サヌカイト	有茎式 先端部、茎部欠損
440	石鏃	6区 包含層	(3.0)	2.3	0.4	(2.5)	サヌカイト	有茎式、先端部、茎部欠損
441	石鏃	6区 包含層	(3.1)	2.7	0.5	(4.0)	サヌカイト	有茎式 先端部、茎部欠損
442	石匙	14区 包含層	8.7	2.4	0.9	19.2	サヌカイト	縦形 完形
443	石匙	8区 包含層	(5.2)	(3.9)	(0.6)	(12.5)	サヌカイト	横形か。刃部欠損
444	スクレイパー	14区 表採	6.4	3.4	0.8	21.4	サヌカイト	打点をとどめ、縁辺に主に片面調整により刃部を作りだす。
445	スクレイパー	14区 包含層	5.6	3.3	2.0	30.7	サヌカイト	一部に自然面を残す。縁辺に片面調整により刃部を作りだす。
446	スクレイパー	14区 包含層	4.2	4.0	0.3	7.1	サヌカイト	縁辺に両面調整により、刃部を作りだす。
447	スクレイパー	11区 包含層	4.7	3.2	0.9	10.8	サヌカイト	縁辺に両面調整により刃部を作りだす。
448	スクレイパー	14区 包含層	3.3	2.0	0.4	2.4	サヌカイト	縁辺に両面調整により刃部を作りだす。
449	石庖丁	6区 包含層	(4.2)	4.5	1.1	(30.1)	結晶片岩	抉りあり 欠損

第69表　包含層出土遺物観察表　(7)

番号	器　種	出土地点 層　位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	備　　考
450	石庖丁	14区 包含層	(4.6)	4.4	0.7	(18.3)	結晶片岩	抉りあり。 欠損
451	石庖丁	6区 包含層	(8.3)	4.1	0.6	(31.0)	結晶片岩	抉りあり。 欠損
452	石庖丁	14区 包含層	(3.7)	3.0	0.8	(12.8)	結晶片岩	抉りあり。 欠損
453	石庖丁	表採	(4.4)	5.7	0.6	(15.7)	サヌカイト	抉りなし。 欠損
454	石庖丁	14区 包含層	(5.3)	5.8	0.8	(48.2)	結晶片岩	抉りなし。 欠損
455	石庖丁	9区 包含層	(3.2)	4.0	0.5	(8.7)	サヌカイト	抉りなし。 欠損
456	石庖丁	14区 包含層	5.0	4.0	1.2	25.8	結晶片岩	抉りなし。 欠損
457	石庖丁	11区 包含層	(3.3)	3.8	0.5	(8.4)	サヌカイト	抉りあり。 欠損
458	石庖丁	14区北 包含層	8.5	4.5	1.2	70.1	結晶片岩	抉りあり。 完形
459	石庖丁	16区 包含層	(2.4)	2.1	0.4	(2.7)	結晶片岩	抉りなし。 欠損、小型
460	磨製石斧	9区 包含層	19.6	5.5	3.4	640	緑色片岩	乳棒状石斧 全面に敲打痕。 未成品。
461	磨製石斧	14区 包含層	(11.7)	5.9	4.8	(670)	緑色片岩	太形蛤刃石斧基部。敲打痕を周縁にとどめる。
462	磨製石斧	3区 包含層	(9.8)	1.5	2.8	(74.7)	緑色片岩	柱状片刃石斧 欠損
463	磨製石斧	6区 包含層	(3.4)	(1.9)	(2.2)	(9.1)	緑色片岩	柱状片刃石斧 刃部の破片。
464	砥石	11区 包含層	(7.3)	5.9	3.0	(193)	砂岩	全面使用。

第70表　包含層出土遺物観察表 (8)

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
465	土師質土器 杯	7区 包含層	口径(13.7) 底径 (8.4) 器高 (4.7)	やや丸みをもって立ち上がり、端部丸くおさめる。 底部全周に粘土のつぶれ。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	砂粒少量含む。	(外)淡黄色 (内)淡黄色	
466	土師質土器 杯	11区 包含層	口径(10.6) 底径 (7.8) 器高 (3.6)	丸みをもって立ち上がり、端部丸くおさめる。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	砂粒少量含む。	(外)淡橙色 (内)橙色	
467	土師質土器 杯	14区 包含層	口径(11.2) 底径 (8.4) 器高 (4.1)	直立気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	砂粒少量含む。	(外)赤橙色 (内)赤橙色	
468	土師質土器 杯	14区 包含層	口径(11.8) 底径 (8.2) 器高 (3.9)	直線的に立ち上がり、口縁部内反、端部は丸くおさめる。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	砂粒少量含む。	(外) 明褐灰色 (内) にぶい橙色	
469	土師質土器 杯	11区 包含層	口径(11.0) 底径 (7.8) 器高 (3.6)	直線的にたちあがり端部は丸くおさめる。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	砂粒少量含む。	(外)橙色 (内) 浅黄橙色	
470	土師質土器 杯	11区 包含層	口径(11.5) 底径 (8.3) 器高 (3.5)	底部から強い段を持ち立ち上がる。 口縁で若干外反、端部尖り気味、底部非常に薄い。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	砂粒少量含む。	(外) にぶい黄橙色 (内) にぶい黄橙色	
471	土師質土器 杯	11区 包含層	口径(13.8) 底径(10.0) 器高 (4.0)	直線的にたちあがり、口縁端部は丸くおさめる。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	砂粒少量含む。	(外)白灰色 (内)白灰色	
472	土師質土器 杯	11区 包含層	口径　11.2 底径　7.0 器高　3.5	内反しながら立ち上がる。 端部は肥厚し、尖り気味におさめる。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り	砂粒少量含む。	(外)橙色 (内)赤褐	
473	土師質土器 杯	11区 精査	口径(10.7) 底径 (5.8) 器高 (3.2)	口縁部は内反気味に立ち上がり端部は丸くおさめる。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	砂粒少量含む。	(外)灰白 (内)灰白	
474	土師質土器 杯	11区 包含層	口径(12.7) 底径 (8.8) 器高 (3.2)	直線的に立ち上がり、端部丸くおさめる。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	砂粒少量を含む。	(外) にぶい橙色 (内)浅黄色	

第71表　包含層出土遺物観察表 (9)

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
475	土師質土器 杯	11区 包含層	口径(12.1) 底径 (8.0) 器高 (3.2)	直立気味に立ち上がり、端部はやや尖り気味におさめる。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	砂粒少量含む。	(外)橙色 (内) 浅黄橙色	
476	土師質土器 杯	11区 包含層	口径(10.9) 底径 (6.4) 器高 (2.9)	口縁部内反。端部は肥厚し丸くおさめる。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	微砂粒少量含む。	(外)淡黄色 (内)淡黄色	
477	土師質土器 杯	11区 包含層	口径(11.6) 底径 (7.3) 器高 (2.9)	やや内反気味にたちあがり、口縁部でやや外反する。 端部は尖り気味におさめる。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	密。	(外)浅黄橙色 (内)浅黄橙色	
478	土師質土器 杯	11区 包含層	口径(13.9)	丸みをもって立ち上がり、端部やや尖りぎみにおさめる。	内外面ヨコナデ。	密。 砂粒少量含む。	(外)淡黄 (内)灰白	
479	土師質土器 皿	11区 包含層	口径　7.2 底径　6.3 器高　1.2	短く直線的にたちあがり、断面三角形。端部は丸くおさめる。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	密。	(外) にぶい橙色 (内) にぶい橙色	
480	土師質土器 皿	11区 包含層	口径　8.2 底径　7.1 器高　1.1	短く直線的にたちあがり、口縁断面三角形。端部尖り気味におさめる。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	砂粒を多く含む。	(外)橙色 (内)橙色	
481	土師質土器 皿	11区 包含層	口径　7.4 底径　6.4 器高　1.2	短く直線的にたちあがり、口縁断面三角形。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	砂粒少量含む。	(外)橙色 (内)橙色	
482	土師質土器 皿	11区 包含層	口径 (7.2) 底径 (6.4) 器高 (1.3)	短く直線的に立ち上がる。 断面三角形の口縁部。 端部は尖り気味におさめる。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	砂粒少量含む。	(外)橙色 (内)橙色	
483	土師質土器 皿	14区 包含層	口径　7.7 底径　5.2 器高　1.0	短く直線的にたちあがり、断面三角形の口縁。端部は尖り気味におさめる。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	砂粒少量含む。	(外)橙色 (内)橙色	
484	土師質土器 皿	11区 包含層	口径 (6.8) 底径 (6.0) 器高 (1.0)	短く直線的に立ち上がり、口縁断面三角形。端部は尖り気味におさめる。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	砂粒少量含む。	(外)浅黄橙 (内)浅黄橙	

第72表　包含層出土遺物観察表 ⑽

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
485	土師質土器 皿	11区 包含層	口径（8.1） 底径（5.2） 器高（1.5）	直線的に立ち上がる。口縁部は肥厚しながら、やや外反し、端部丸くおさめる。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	微砂粒を多量に含む。	(外)淡橙色 (内)淡橙色	
486	土師質土器 皿	11区 包含層	口径（7.9） 底径（5.2） 器高（1.3）	底部より直線的に立ち上がり、口縁部で若干外反。端部丸くおさめる。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	微砂粒を少量含む。	(外)橙色 (内)橙色	
487	土師質土器 皿	11区 包含層	口径（8.4） 底径（7.0） 器高（1.4）	外反気味に立ち上がる。 端部は尖り気味におさめる。	外面ナデ。 内面ナデ。 底部回転糸切り。	精良	(外) 浅黄橙色 (内) 浅黄橙色	
488	土師質土器 皿	11区 包含層	口径　8.3 底径　6.0 器高　1.5	外反気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	精良	(外) 浅黄橙色 (内) 浅黄橙色	
489	土師質土器 皿	3区 包含層	口径　8.0 底径　5.6 器高　1.2	短く外反気味に立ち上がる。 端部は丸くおさめる。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	砂粒少量含む。	(外) にぶい橙色 (内) にぶい橙色	
490	土師質土器 皿	14区 包含層	口径　7.6 底径　5.2 器高　1.7	底部から外反気味に立ち上がる。 端部は尖り気味におさめる。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	砂粒少量含む。	(外)橙色 (内)橙色	
491	土師質土器 皿	11区 精査	口径　7.2 底径　6.0 器高　1.3	内反気味にたちあがる。 端部尖り気味。	外面ナデ。 内面ナデ。 底部回転糸切り。	精良 砂粒少量含む。	(外)橙色 (内)橙色	
492	土師質土器 皿	14区 包含層	口径（7.7） 底径（5.8） 器高（1.9）	直線的に立ち上がり、口縁部やや内反。端部丸くおさめる。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	微砂粒を多く含む。	(外)橙色 (内)橙色	
493	土師質土器 皿	11区 包含層	口径（7.8） 底径（6.9） 器高（1.6）	直線的に立ち上がり、口縁部でやや内反。口縁端部尖り気味。	外面ヨコナデ。 内面ナデ。 底部回転糸切り。	砂粒含む。	(外) 浅黄橙色 (内) 浅黄橙色	
494	土師質土器 皿	11区 包含層 (精査)	口径（8.0） 底径（5.8） 器高（1.5）	底部より直線的に立ち上がり口縁部でやや内反。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	微砂粒を少量含む。	(外)淡橙色 (内)淡橙色	

第73表　包含層出土遺物観察表 (11)

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
495	土師質土器 皿	11区 包含層	口径 (8.0) 底径 (5.5) 器高 (1.0)	丸味をもってたちあがり口縁部で若干内反。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	砂粒少量含む。	(外)橙色 (内)橙色	
496	土師質土器 皿	11区 包含層	口径 (7.7) 底径 (6.1) 器高 (1.4)	直線的に立ち上がり、端部丸くおさめる。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	砂粒少量含む。	(外) にぶい橙色 (内)淡い橙色	
497	土師質土器 皿	14区 包含層	口径 (7.8) 底径 (5.8) 器高 (1.2)	口縁部外反。端部肥厚し、丸くおさめる。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	精良	(外)淡橙色 (内)淡橙色	
498	土師質土器 皿	11区 包含層	口径 (6.7) 底径 (2.4) 器高 (2.0)	口縁部波うち、ゆがみが大きい。内外面ともにナデとユビオサエを施しながら成形か。	外面ヨコナデ、ナデ。 内面ユビオサエ、ナデ。	砂粒含む。	(外) にぶい橙色 (内) にぶい橙色	
499	土師質土器 皿	11区 包含層	口径(11.6) 底径 (5.7)	丸みをおびてゆるやかにたちあがる。端部やや尖り気味。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。	砂粒少量含む。	(外)浅黄橙色 (内)浅黄橙色	高台付皿
500	土師質土器 皿	7区 包含層	底径　6.2	底部高台状に突出。	外面ナデ。 内面ヨコナデ。 底部静止糸切り。	微砂粒を少量含む。	(外) 浅黄橙色 (内)灰白色	
501	瓦器 椀	11区 包含層	口径(15.7)	丸みを帯びて立ち上がり、端部やや肥厚。 丸い。口縁下に強いナデによる段がつく。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面ユビオサエ。 内面ヘラミガキ。	精良	(外)暗灰色 (内)暗灰色	和泉型
502	瓦器 椀	9区 包含層	高台径 (5.0)	断面台形の高いしっかりした高台を貼付後ていねいにナデつける。	体部外面ユビオサエ。内面粗いヘラミガキ。	精良	(外)灰色 (内)灰色	和泉型
503	瓦器 椀	11区 包含層	口径(14.3) 高台径 (5.6) 器高 (4.9)	底部から丸みをもって立ち上がり、口縁部で弱く外反する。口端は、やや尖り気味におさめる。断面半円形のやや幅広の高台を貼付後ナデ。	口縁部外面、体部中位までヨコナデ。 体部外面、ユビオサエ、内面、横位の粗いヘラミガキ。	微砂粒多く含む。	(外)灰白色 (内) 浅黄橙色	炭素 吸着不良
504	瓦器 椀	11区 包含層	口径(13.6) 高台径 (5.0) 器高 (4.2)	底部から丸く立ち上がり、口縁端部で若干外反。口端は丸くおさめる。断面半円形の低い高台が貼付けられる。 粗雑で粘土紐の継目が残る。	口縁部外面ヨコナデ。 外面にユビオサエ残る。 体部外面ユビオサエ密。 内面ヘラミガキ、見込み平行線。	砂粒少量含む。	(外)灰白色 (内)灰色	炭素吸着不良

第74表　包含層出土遺物観察表 (12)

番号	器種	出土地点 層位	法量 (cm)	形態の特徴	技法	胎土	色調	備考
505	瓦器 椀	11区 包含層	口径(14.1) 高台径 (4.7) 器高 (4.0)	底部が強く張り出して屈曲する。 底部から直線的に立ち上がり、口縁若干外反し、端部丸くおさめる。 断面半円形の高台貼付後ナデ。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面ユビオサエ。 内面ヘラミガキ。	微砂粒を少量含む。	(外)褐灰色 (内)黒褐色	炭素吸着不良
506	瓦器 椀	11区 包含層	口径(15.0) 高台径 (5.4) 器高 (4.5)	やや外反気味に底部より立ち上がり、口縁部でさらに外反し、端部は丸くおさめる。断面半円形の高台貼付後ナデ。	口縁部内外面幅広のヨコナデ。体部外面ユビオサエ。内面粗いミガキ。	精良	(外)灰白色 (内)灰白色	炭素吸着不良
507	瓦器 椀	11区 包含層	口径(15.3) 高台径 (4.9) 器高 (4.2)	底部が強く張り出して屈曲する。 内反気味に立ち上がり、口縁部で若干外反。端部尖り気味におさめる。 断面三角形の低い高台。貼付後ナデ。	口縁部外面ヨコナデ幅広い。体部外面ユビオサエ密。内面横位のヘラミガキ密に施す。	微砂粒を含む。	(外)灰白色 (内)灰白色	炭素吸着不良
508	瓦器 椀	14区 包含層	口径(15.6)	内反気味に立ち上がり、口縁部でやや外反。端部は丸くおさめる。	口縁部内外面ヨコナデ。 体部外面ユビオサエ。 内面ヘラミガキ。	精良	(外)灰色 (内)灰白色	
509	瓦器 椀	14区 包含層	口径(12.6)	底部が強く張り出して屈曲する。 丸みをおびて立ち上がり、口縁部で外反。端部丸くおさめる。	口縁部外面ヨコナデ幅広い。体部下半外面ユビオサエ。 内面は磨滅により不明。	微砂粒を含む。	(外)暗灰色 (内)暗灰色	
510	瓦器 椀	11区 包含層	高台径 (4.2)	体部は浅く立ち上がる。 断面三角形の高台をやや外側に張り出した形ではりつけ、後ヨコナデ。	体部外面下半ユビオサエを密に施す。 内面磨滅により不明。	微砂粒を少量含む。	(外)黒褐色 (内)黒褐色	
511	瓦器 椀	14区 包含層	高台径 (3.7)	断面半円形の低い高台を貼付。	内外面磨滅により不明。	砂粒含む。	(外)橙色 (内)橙色	
512	瓦器 椀	11区 包含層	口径 14.0 底径 7.6 高台径 5.3 器高 4.8	底部強く張り出し屈曲する。 底部から直線気味に立ち上がり、口縁部でやや外反する。端部はやや丸くおさめる。断面三角形の高台貼付後ナデ。	外面底部までヨコナデ。 底部付近にユビオサエ。 内面上半ヨコナデ。下半から見込みにかけてヘラミガキ。 底部回転糸切り。	精良	(外) 口 暗灰色 胴 灰白色 (内)暗灰色	炭素吸着不良
513	瓦器 皿	11区 包含層	口径 (8.0) 底径 (6.5) 器高 (1.7)	丸みをおびた底部から口縁部外反。 端部は丸くおさめる。	口縁部内外面ヨコナデ。 底部外面ユビオサエ。	精良	(外)褐灰色 (内)褐灰色	和泉型

第75表　包含層出土遺物観察表 (13)

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
514	瓦器 皿	14区 包含層	口径 (8.2)	底部から強く外反して口縁が立ち上がる。端部尖り気味。	口縁部内外面ヨコナデ。 底部外面ユビオサエ。	精良	(外)灰色 (内)灰色	
515	瓦器 皿	11区 包含層	口径(10.7)	口縁部外反。端部丸くおさめる。 やや大型。	口縁部外面ヨコナデ。 内面ミガキ後ナデ。 底部ユビオサエ。	微砂粒を多く含む。	(外)灰色 (内)灰色	
516	瓦器 皿	11区 包含層	口径 (7.9) 底径 (5.6) 器高 (1.9)	口縁部やや外反。口縁端部は丸くおさめる。	口縁部外面ヨコナデ。 下半ユビオサエを残す。 内面ヨコナデ。	微砂粒を少量含む。	(外)褐灰色 (内)褐灰色	
517	瓦器 皿	11区 包含層	口径 (7.0) 底径 (5.2) 器高 (1.6)	底部は丸みを持ち、若干外反しながら立ち上がる。端部はやや肥厚し丸くおさめる。	口縁部外面ヨコナデ。 底部ユビオサエ。 見込みナデ。	精良	(外)暗灰色 (内)灰色	
518	瓦器 皿	11区 包含層	口径 (7.7) 底径 (5.9) 器高 (1.3)	底部から外反気味に立ち上がり、やや肥厚し、丸くおさめる。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	微砂粒を多く含む。	(外)褐灰色 (内)褐灰色	
519	瓦器 皿	11区 包含層	口径 (7.8) 底径 (5.9) 器高 (1.2)	底部から短く直線的に立ち上がる。 端部やや肥厚し丸くおさめる。	外面ヨコナデ。 内面ヨコナデ。 底部回転糸切り。	精良	(外)灰色 (内)灰白色	
520	瓦器 皿	11区 包含層	口径 (8.1)	厚い器壁で、口縁部で内反し、端部丸くおさめる。	口縁部内外面ヘラミガキ。	精良	(外)灰色 (内)灰色	炭素吸着不良
521	土師質土器 鍋	11区 包含層	口径(30.6)	口縁部が「く」字状にゆるく外反。 端部は平坦で内側を尖らせる。 外面にすす状炭化物付着。	外面ヨコナデ。 体部ユビオサエ。 内面ヨコナデ。	長石・石英砂粒多く含む。	(外)黒褐 (内) にぶい橙色	
522	土師質土器 釜脚部	11区 包含層	径　2.4	断面ほぼ円形、基部大きく屈曲。 身部直線的。	脚部は全体にユビオサエ後ヘラケズリ。 脚貼り付け部ユビオサエ後ナデ。 体部内面ハケ。	微砂粒を多量に含む。	淡橙色	
523	土師質土器 脚部	14区 包含層	長さ　9.7 径　2.7	断面ほぼ円形、身部やや曲線的。 先端部わずかに内側に折り曲げる。	縦方向にケズリを加え成形。	砂粒を多く含む。	にぶい黄橙色	

第76表　包含層出土遺物観察表 ⑭

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
524	土師質土器 脚部	11区 包含層	——	ミニチュア	ヘラケズリ。	砂粒を多く含む。	(外)橙色 (内)灰色	
525	須恵質土器 こね鉢	11区 包含層	口径(23.2)	口縁部は直線的に立ち上がり、端部は上下に拡張する。	内外面ヨコナデ。	砂粒少量含む。	(外)灰色 (内)灰色	東播系
526	須恵質土器 こね鉢	11区 包含層	口径(23.6)	口縁部は直線的に立ち上がり、断面形は丸味をおびた三角形。	内外面ヨコナデ。	砂粒少量含む。	(外)褐灰色 (内)灰黄褐色	東播系
527	須恵質土器 こね鉢	11区 包含層	口径(27.0)	口縁部は直線的に立ち上がり、肥厚する。端部の断面は丸みをおびた三角形。	内外面ヨコナデ。	砂粒少量含む。	(外)灰色 (内)灰色	東播系
528	須恵質土器 こね鉢	11区 包含層	口径(29.5)	口縁部は直線的にたちあがり、断面は丸味をおびた三角形。	内外面ヨコナデ。	砂粒少量含む。	(外)青黒青灰色 (内)青灰色	東播系
529	須恵質土器 こね鉢	11区 包含層	口径(33.8)	口縁部は直線的に立ち上がり端部の断面は丸味をおびた三角形。	内外面ヨコナデ。	砂粒を多く含む。	(外) 口　暗灰色 胴　灰白色 (内) 暗オリーブ灰色	東播系
530	須恵質土器 こね鉢	6区 包含層	口径(31.0)	口縁部は内反気味に立ち上がり、断面は丸味をおびた三角形。	内外面ヨコナデ。	砂粒を少量含む。	(外)灰色 (内)灰色	東播系
531	須恵質土器 こね鉢	11区 包含層	口径(30.0)	口縁部は直線的に立ち上がり、断面は丸味をおびた三角形。	内外面ヨコナデ。	微砂粒を少量含む。	(外)灰白色 (内)灰色	東播系
532	陶器 擂鉢	11区 包含層	口径(30.1)	口縁部内反。端部は平坦。 内面に櫛描条線（条単位不明)。	外面、口縁部ロクロナデ。 内面、口縁部ロクロナデ。	微砂粒を多く含む。	(外)黒褐色 (内)極暗褐色	備前窯
533	陶器 擂鉢	3区 包含層	底径(12.2)	体部やや外反。 体部内面に1単位11条櫛描条線。	体部外面ヨコナデ。 体部内面ナデ。	砂粒を少量含む。	(外)灰色 (内)暗赤褐色	備前窯
534	瓦質土器 火鉢	2区 包含層	口径(25.9)	口縁部が「く」字形に外反。 強いナデで段をつける。口縁部下に⊘状のスタンプ文。	内外面ヨコナデ。	砂粒多く含む。	(外)黒褐色 (内)暗褐色	
535	土師質土錘	表採	長さ (2.0) 胴径　0.8	紡錘形の管状土錘。	全体にナデ。	微砂粒を少量含む。	(外)黄灰色 (内)黄灰色	
536	瓦質土錘	14区 包含層	長さ (1.6) 胴径　0.8	紡錘形の管状土錘。	全体にナデ。	砂粒を少量含む。	(外)褐灰色 (内)褐灰色	

第77表　包含層出土遺物観察表 ⑮

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
537	瓦質土錘	11区 包含層	長さ (2.1) 径　(1.3)	管状土錘。	全体にナデ。	砂粒を多く含む。	(外)にぶい橙色 (内)にぶい橙色	
538 ノ	磁器 碗	11区 包含層	口径(16.0)	直線的に立ち上がり、口縁部で若干外反。 端部尖り気味。	内外面ロクロナデ。 内・外面に釉を施した後、端部の釉をかきとる。	密。	白色 素地白色	白磁Ⅸ-1
539	磁器 碗	14区 包含層	口径(16.0)	直線的に立ち上がり、口縁部で若干外反。 端部丸くおさめる。外面、明瞭な鎬を持つ蓮弁文を施す。	内外面ロクロナデ。 内外面にやや厚めに施す。貫入が著しい。	密。	オリーブ褐 素地黄味がかった白色	龍泉窯系 青磁 Ⅰ-5-b
540	磁器 碗	6区 包含層	口径(15.8)	丸みをおびて立ちあがり口縁部で外反。 端部丸くおさめる。	内外面ロクロナデ。 内外面に釉を厚く施す。	密。	明緑白色 素地灰白色	龍泉窯系 14C末 青磁
541	磁器 碗	6区 包含層	高台径 6.1	器底部は厚く、幅広の高台を低く削り出す。外面には鎬を持つ蓮弁文を施す。	内外面ロクロナデ。 内外面及び高台外面に釉を施す。高台畳付部釉カキ取り。	密。	オリーブ灰 素地灰白色	龍泉窯系 青磁 Ⅰ-5-b
542	磁器 碗	3区 包含層	高台径 6.1	器底部は厚く、やや幅の狭い高台を低く削り出す。内面見込みには一条の圏線、その内側に片彫りの草花文を施す。	内外面ロクロナデ。内外面及び高台外面に釉を薄く施す。 高台内面、及び畳付の釉はカキ取る。	密。 黒色細粒含む。	オリーブ灰 素地灰白色	龍泉窯系 青磁 Ⅰ-2 もしくは 4
543	磁器 碗	11区 包含層	高台径 4.9	器底部は厚く、幅の広い高台を低く削り出す。内面見込みに花文様のスタンプを施す。	内面ロクロナデ。内面に釉を薄く施す。 外面及び高台部は露胎。	密。	青白色 素地灰白色	龍泉窯系 青磁 Ⅰ-5-b
544	磁器 碗	6区 包含層	高台径 5.6	器底部は厚く、幅の広い高台を低く削り出す。内面見込み渦巻文風のスタンプを施す。	内面ロクロナデ。内面及び高台外面に釉を薄く施す。高台畳付は施釉後カキ取り。	密。	明緑白色 素地灰白色	龍泉窯系 青磁 Ⅰ-5-b
545	磁器 皿	3区 包含層	口径　16.6	外反気味にたちあがり、端部は方形におさめる。口縁部に稜花を施す。内面に片彫りの草花文を施す。	外面ロクロナデ。 内外面に釉を薄く施す。	密。	灰オリーブ 素地灰白色	龍泉窯系 青磁 高台付皿

第78表　包含層出土遺物観察表 (16)

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
546	磁器 皿	2区 包含層	底径　3.3	底部厚め。内面見込みに片彫による花文を施す。	内外面ロクロナデ。 内面、外面にやや厚目の釉を施す。外底面は施釉後カキ取り。	密。	オリーブ灰 素地灰白色	龍泉窯系 青磁Ⅰ
547	磁器 皿	7区 包含層	底径　5.3	体部中位で屈曲。内面見込みに櫛描によるジグザグ文を施す。	内面ロクロナデ。外面ヘラケズリ。外底面を除き、薄く釉を施す。	密。	オリーブ灰 素地灰白色	同安窯系 青磁 Ⅰ-1
548	磁器 皿	3区 包含層	底径（5.0）	底部と口縁部の境で屈曲。内面に櫛描によるジグザグ文を施す。	内外面ロクロナデ。 内面及び口縁部外面に釉を薄く施す。	密。 黒色細粒含む。	オリーブ灰 素地灰白色	同安窯系 青磁 Ⅰ-1-b
549	磁器 皿	11区 包含層	底径　5.8	体部中位で屈曲。内面見込みに櫛描によるジグザグ文及び片彫り文を施す。	内面ロクロナデ。外面ヘラケズリ。外底面を除き、薄く釉を施す。	密。	明緑灰 素地灰白色	同安窯系 青磁 Ⅰ-1-b
550	軒平瓦	11区 包含層	長さ　7.5 幅　3.9 厚さ　2.5	端面に唐草文。	やや軟質の焼成。	密。	灰	欠損
551	平瓦	11区 包含層	長さ　7.0 幅　7.9 厚さ　1.6	凸面に縄目ＬＲの縄蓆文。凹面に布目（1cm×1cm内にタテ8本、ヨコ8本）。	焼成は堅緻。	密。	灰	欠損
552	平瓦	14区 包含層	長さ　9.0 幅　10.3 厚さ　1.7	凸面に縄目ＬＲの縄蓆文を側線から内側に向かい施す。凹面に布目（1cm×1cm内にタテ7本、ヨコ5本）。	やや軟質の焼成。	砂粒多く含む。	黒	欠損
553	平瓦	6区 包含層	長さ　14.4 幅　14.6 厚さ　2.5	凸面に縄目ＬＲの縄蓆文を施す。 凹面に布目（織不明）。	焼成はやや堅緻。	砂粒多く含む。	灰	欠損

番号	器　種	出土地点 層　位	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	備　考
554	銅銭	11区 包含層	径 2.2	―	―	「開元通寶」、加工有 初鋳年621年
555	銅銭	12区 包含層	径 2.3	―	―	「洪武通寶」 初鋳年1368年

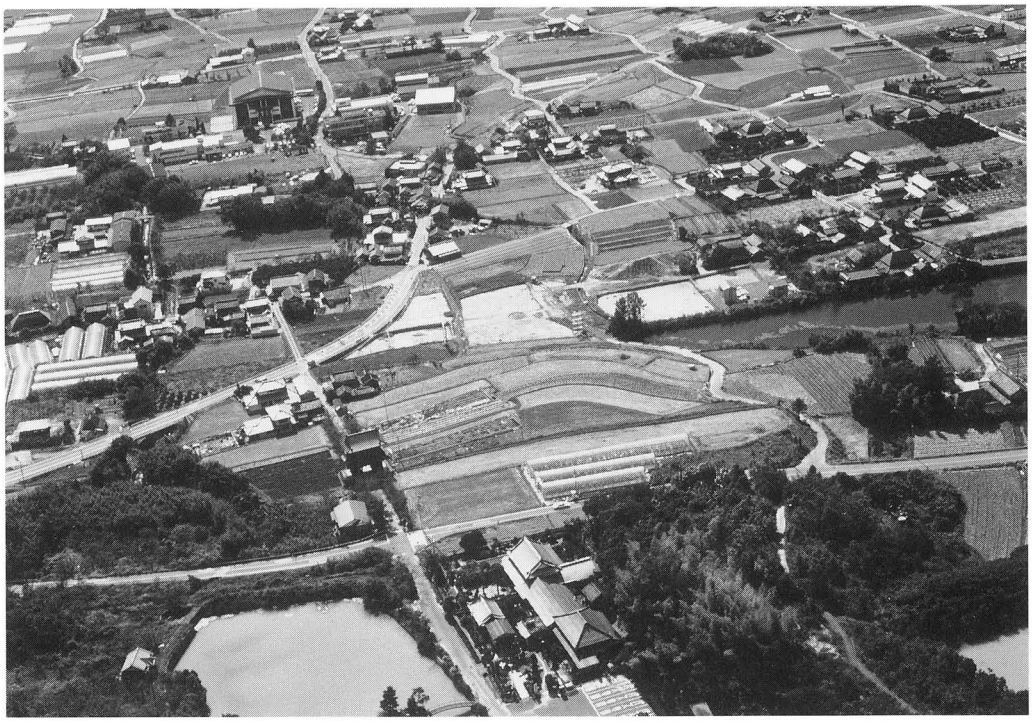
第79表　包含層出土遺物観察表 (17)

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
556	磁器 碗	11区 谷部分	口径(12.0) 高台径 4.6 器高　6.1	外面　圏線4条、体部丸文。 内面　圏線4条、見込みに五弁花のコンニャク印。 裏銘「寿」か。	畳付無釉。 砂粒付着。	密。 素地灰白色	呉須ややくすむ。	肥前系 染付
557	磁器 碗	11区 谷部分	口径(10.8) 高台径 4.5 器高　5.6	外面　圏線6条、体部網目文。 内面　圏線4条、口縁下に縦線。見込みに草文か。	畳付釉カキ取り、砂粒付着。	密。 素地灰白色	呉須発色良好	肥前系染付
558	磁器 碗	11区 谷部分	口径(11.2) 高台径 4.2 器高　5.6	外面　圏線3条、体部梅樹文。	内面見込み蛇ノ目釉ハギ、砂目跡。 畳付無釉、砂粒付着。	密。 素地白色。	呉須黒め。	肥前系 染付
559	磁器 碗	11区 谷部分	口径(12.0) 高台径 6.7 器高　6.6	外面　圏線4条、体部松樹文。 内面　圏線2条。	畳付無釉。 砂粒付着。	密。 素地灰白色	呉須にごる。	肥前系 染付 広東碗
560	磁器 碗	11区 谷部分	口径(11.3) 高台径 5.7 器高　6.8	外面　圏線4条、体部草花文。 内面　圏線2条、見込みに「寿」字？	畳付無釉。 砂粒付着。	密。 素地白色	呉須黒め。	肥前系 染付 広東碗
561	陶胎 碗	11区 谷部分	口径(11.3) 高台径 4.7 器高　6.4	外面　圏線5条、体部草花文。	畳付無釉。 内面見込みに砂粒付着。	粗。 素地褐色。	器面オリーブ灰。 呉須黒め。	肥前系 陶胎 染付
562	磁器 碗	11区 谷部分	高台径 3.8	外面　青磁。 内面　見込み圏線2条、青海波に船。 裏銘「寿」か？	畳付無釉。 貫入が著しい。	密。 素地白色。	外面ライトグリーン。 呉須くすむ。	肥前系 青磁
563	磁器 蓋	11区 谷部分	口径　9.7 台径　4.6 器高　3.5	外面　青磁。 内面　圏線2条、口縁下に四方襷文。	全体に気泡が著しい。	密。 素地白色。	外面ライトグリーン。 呉須くすむ。	肥前系 青磁
564	磁器 皿	11区 谷部分	口径　13.5 高台径 8.2 器高　3.5	外面　圏線3条、体部唐草文。 内面　圏線2条、菊に井桁、見込みに五弁花のコンニャク印。 裏銘渦「福」	畳付釉カキ取り。 砂粒付着。	密。 素地白色。	呉須黒め。	肥前系 青磁
565	磁器 皿	11区 谷部分	口径(13.2) 高台径 7.1 器高　3.6	口縁部　輪花6単位。 内面　山水図。 裏銘赤彩で「ゐほ」銘。	畳付施釉。 蛇ノ目凹形高台。 4ヶ所に目跡。	密。 素地白色。	呉須発色良好。	肥前系 染付
566	磁器 皿	11区 谷部分	口径　13.2 高台径 8.2 器高　3.4	外面　圏線1条、体部、文字？ 内面　圏線3条、体部見込み雪輪に笹。	畳付施釉。 蛇ノ目凹形高台。 貫入が著しい。	やや粗。 素地白色。	呉須発色良好。	肥前系 染付
567	磁器 鉢	11区 谷部分	口径(14.6)	外面　菱文等。 内面　丸文、唐草文。	口縁に稜花。	密。 素地白色。	呉須発色良好。	肥前系 染付 芙蓉手
568	磁器 小碗	11区 谷部分	口径　7.4 高台径 3.0 器高　3.2	外面　井桁と井筒。	畳付釉カキ取り。砂粒付着。	密。 素地白色。	呉須くすむ。	肥前系 染付
569	磁器 猪口	11区 谷部分	口径　6.9 底径　4.7 器高　6.0	外面　草花文。呉須垂れ気味。	畳付砂粒付着。	密。 素地白色。	呉須黒め。	肥前系 染付

第80表　包含層遺物観察表 ⑱

番号	器　種	出土地点 層　位	法量 (cm)	形態の特徴	技　法	胎土	色調	備考
570	磁器 筒形碗	11区 谷部分	口径　8.2	外面　圏線２条、体部井桁花菱文。 内面　口縁部下、四方襷文。		密。 素地灰白色。	呉須くすむ。	肥前系 青磁
571	陶器 油受皿	11区 谷部分	口径　11.3 底径　5.1 器高　2.5	内面から外面口縁直下まで施釉。下半露胎。	体部外面下半ヘラケズリ。	やや粗。 素地黄灰褐色。	釉、灰オリーブに発色。	

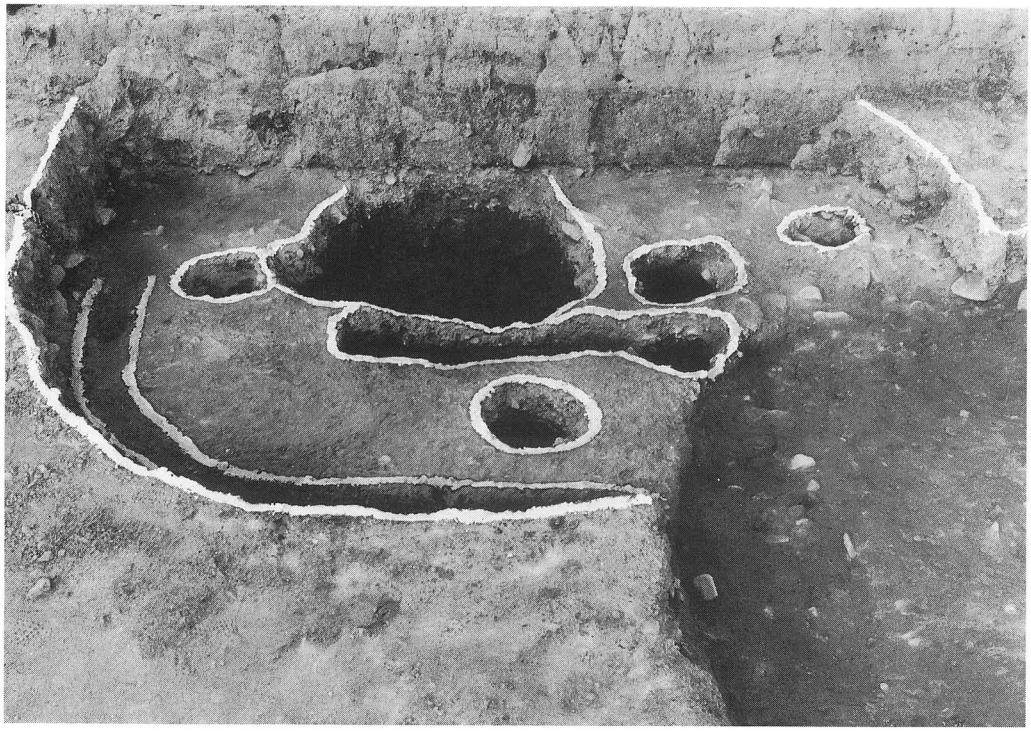
(1)　調査区遠景　南より



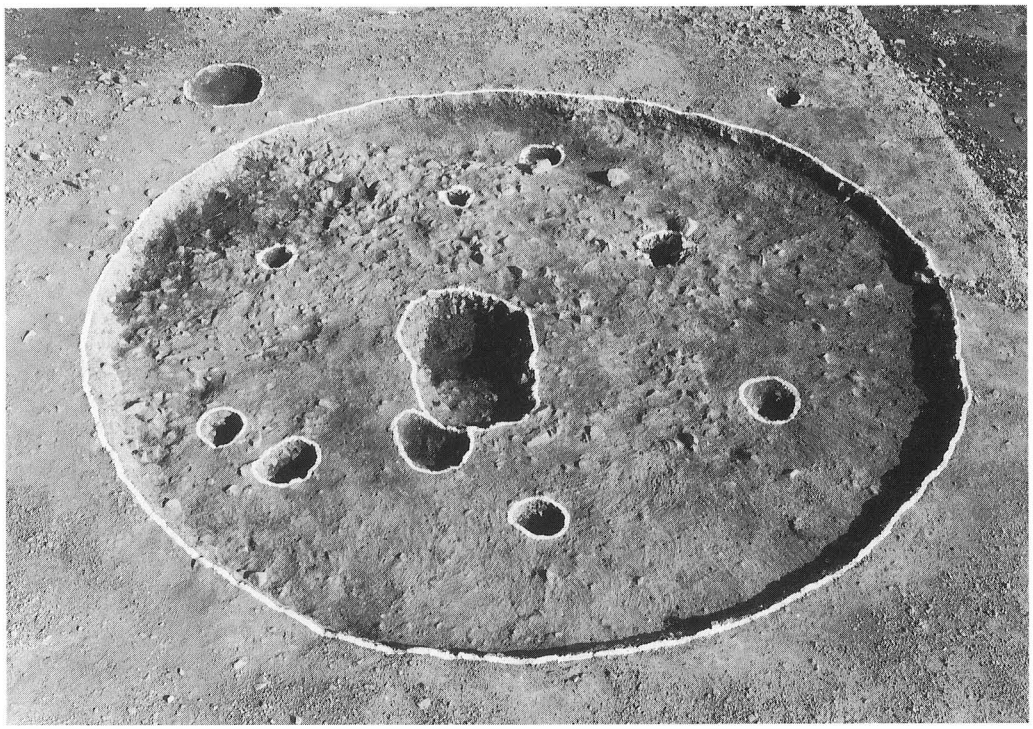
(2)　調査区近景（1～9調査区）　北より

図版 2

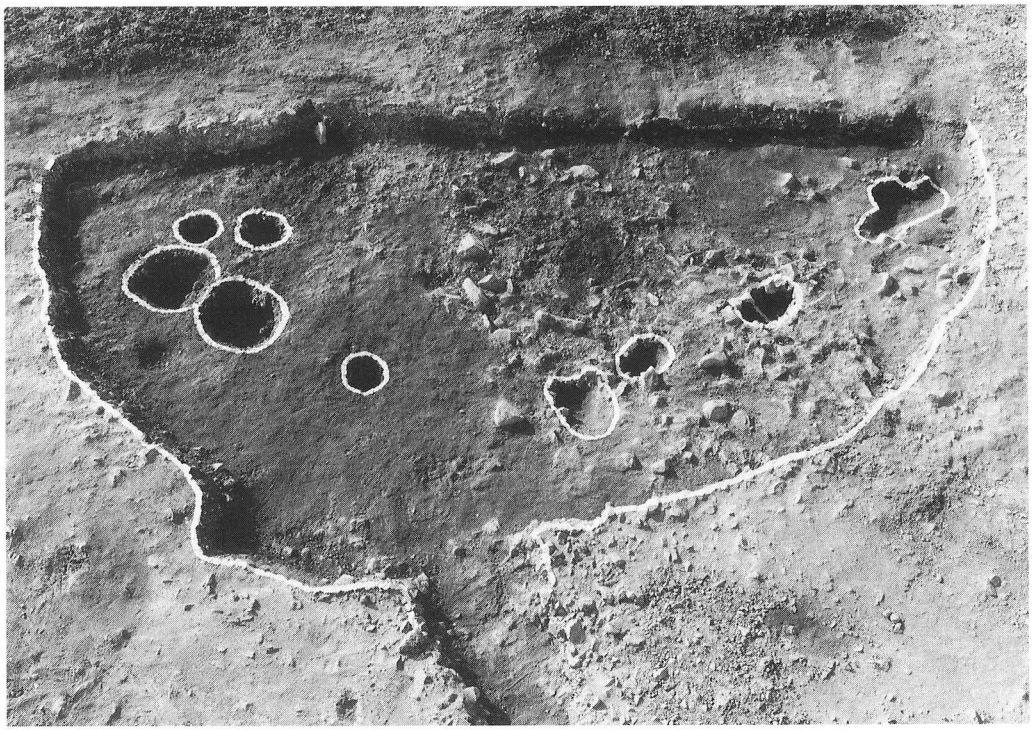
(1)　ＳＢ1001炉内遺物出土状況



(2)　ＳＢ1001完掘状況　南より

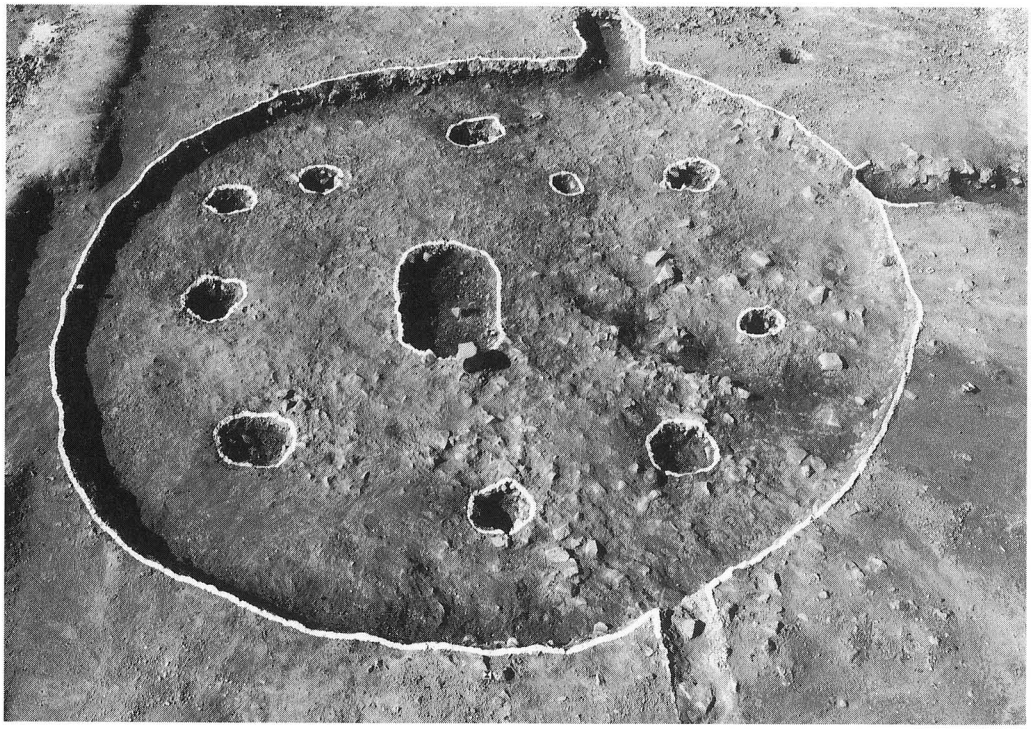


(1)　ＳＢ1002完掘状況　西より

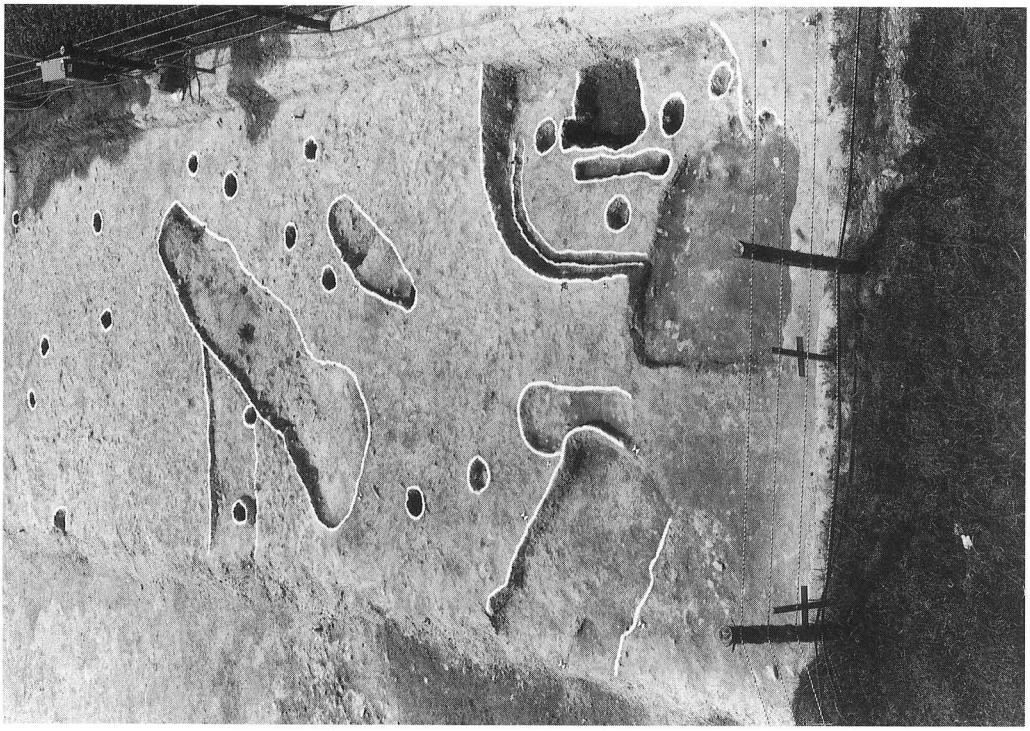


(2)　ＳＢ1003完掘状況　東より

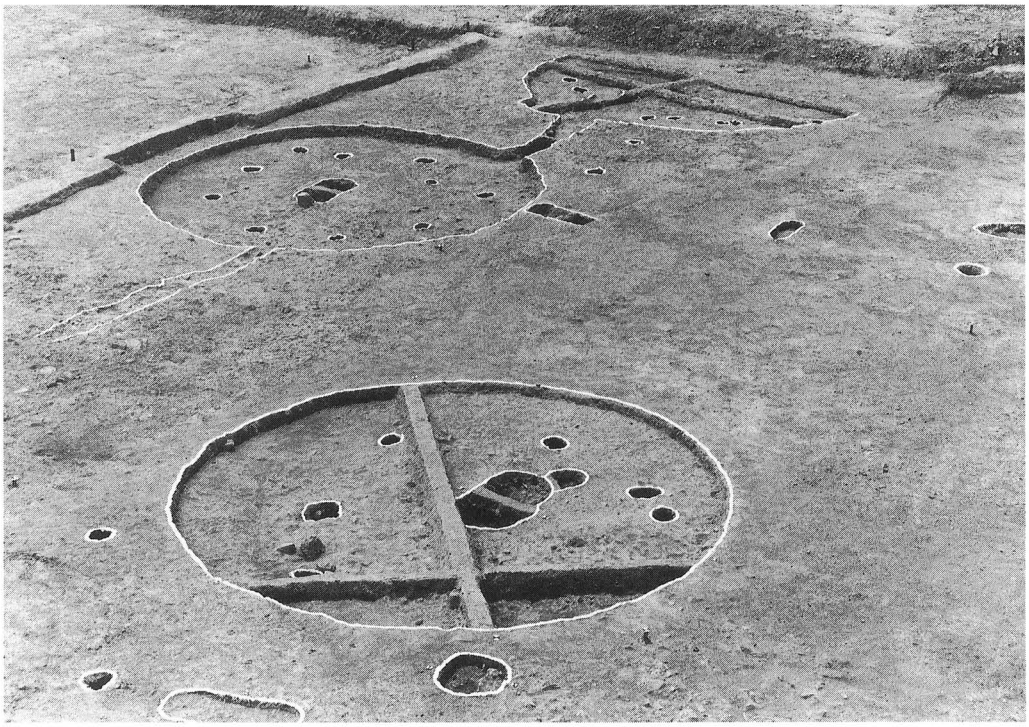
図版 4



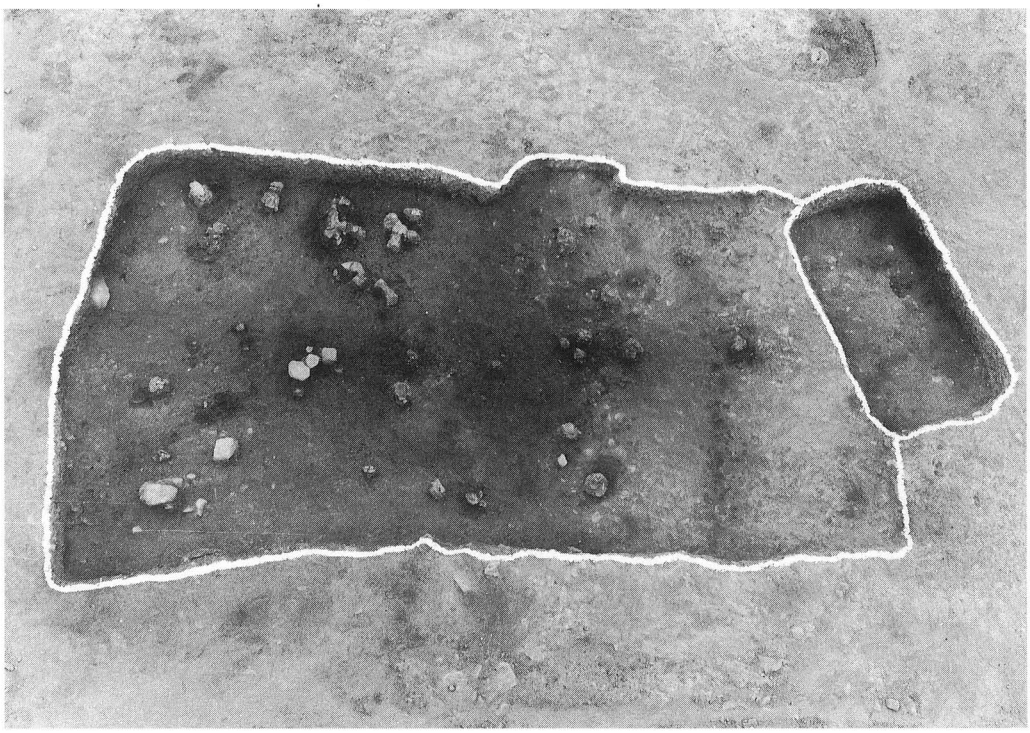
(1)　ＳＢ1004完掘状況　東より



(2)　ＳＢ1001周辺



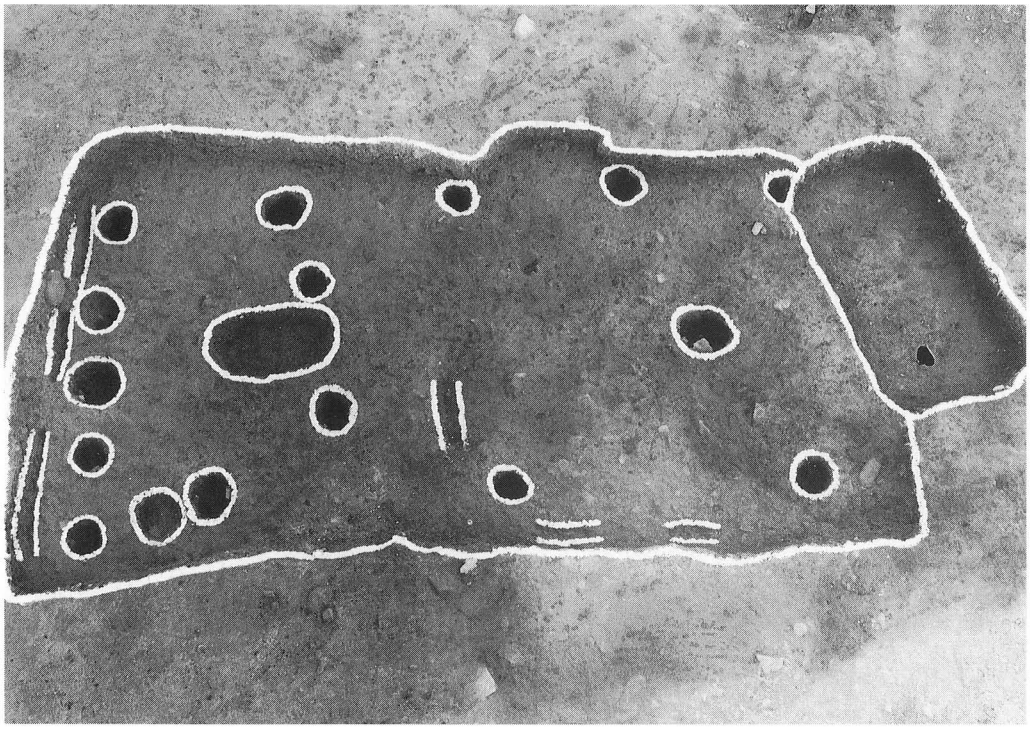
(1)　ＳＢ1002からＳＢ1004



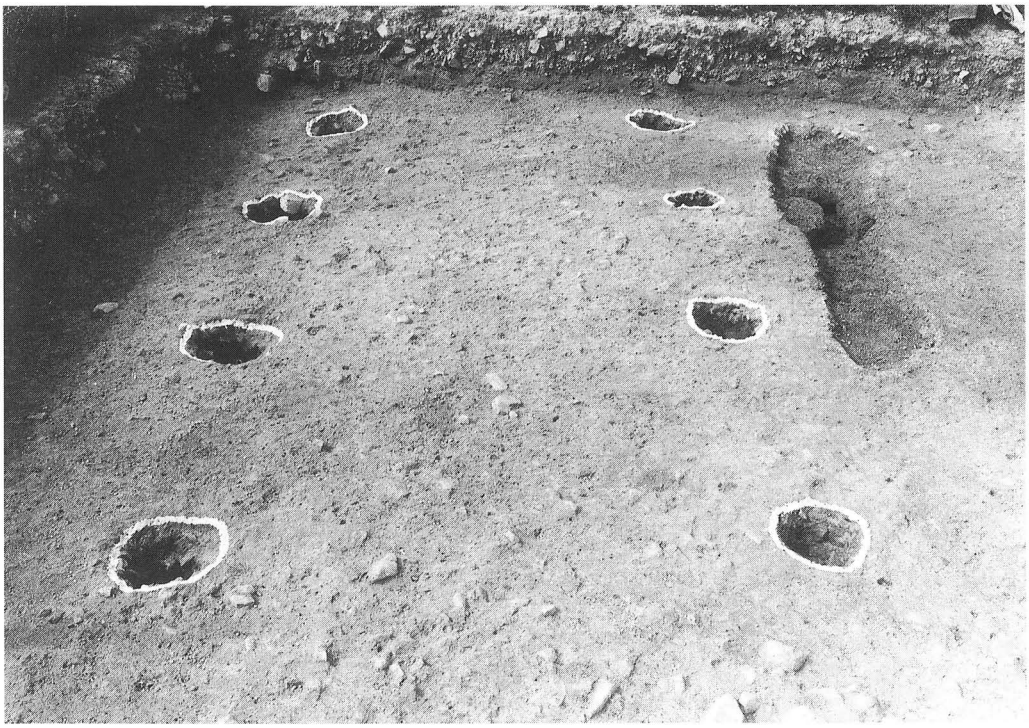
(2)　ＳＢ1005遺物出土状況　西より

図版 6

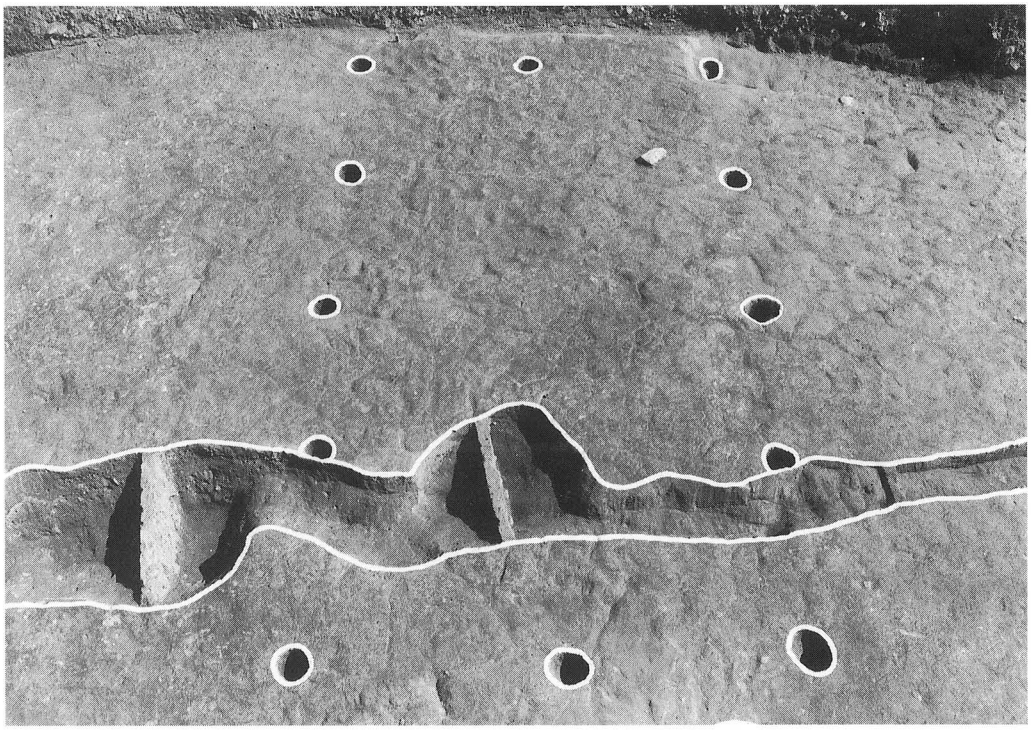
(1)　ＳＢ1005高杯出土状況



(2)　ＳＢ1005完掘状況　西より

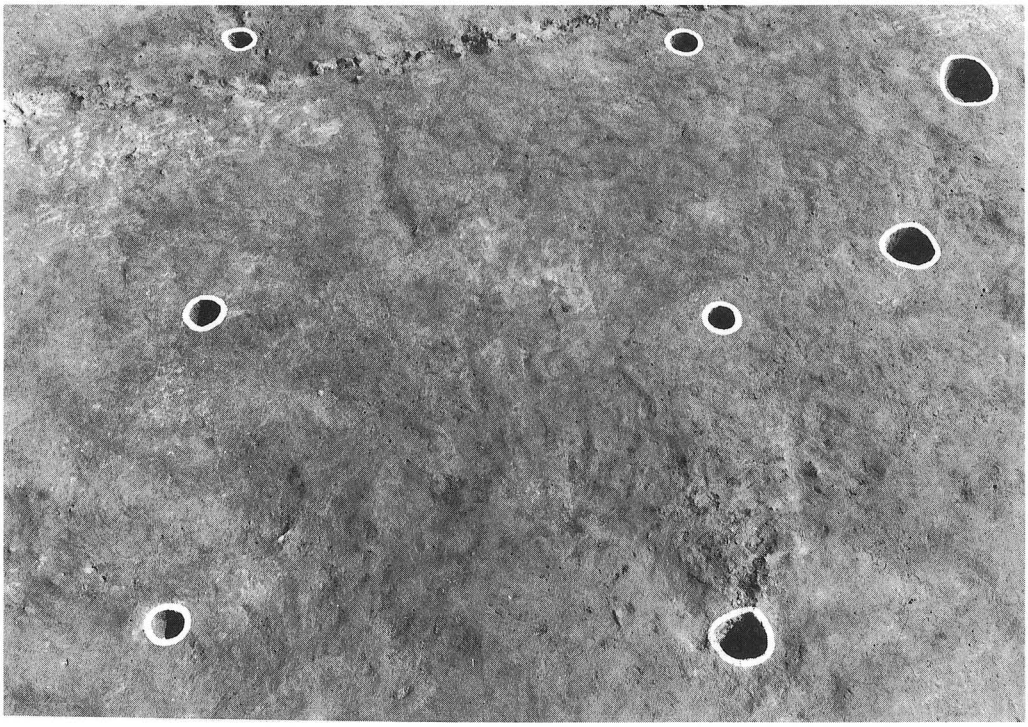


(1)　ＳＡ1001　東より

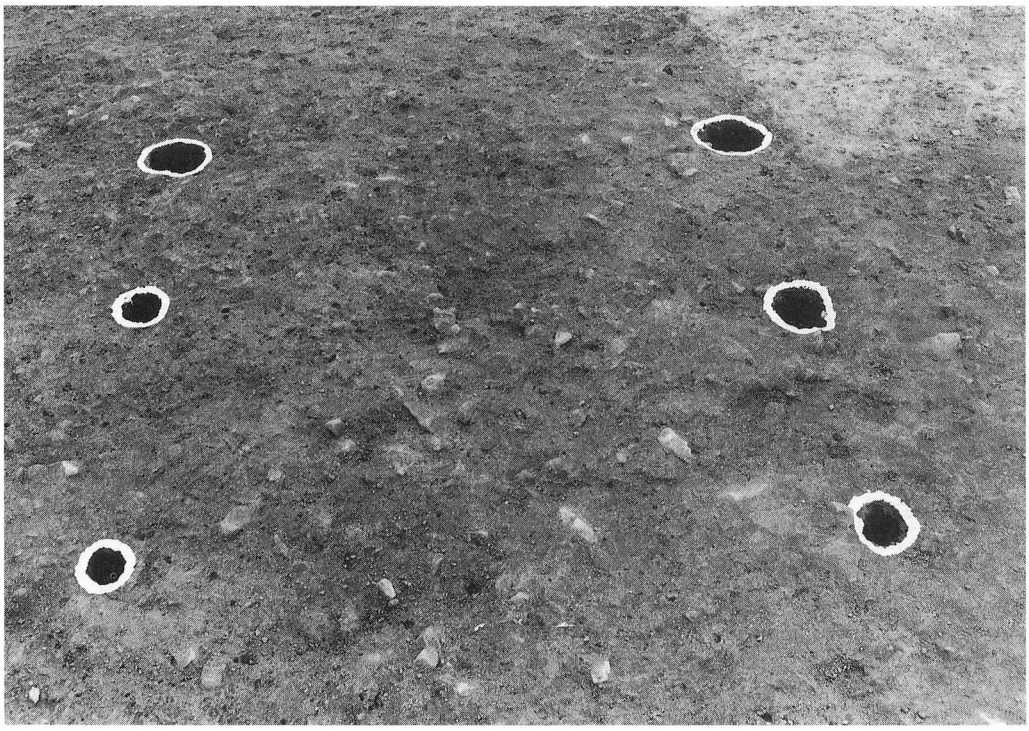


(2)　ＳＡ1002　西より

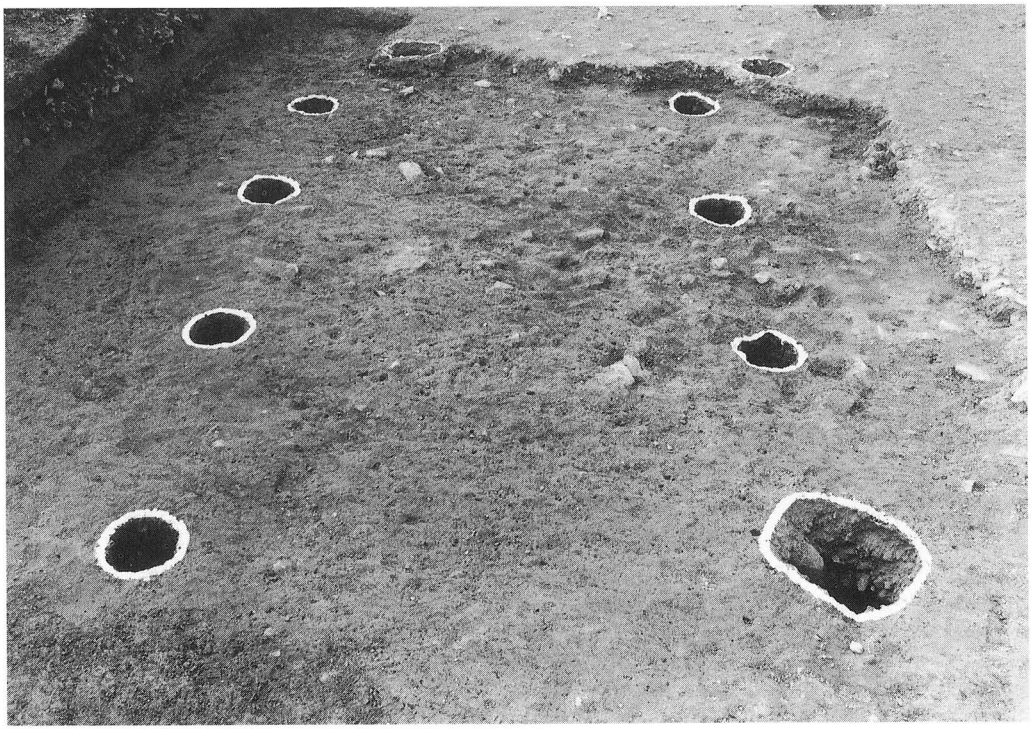
図版 8



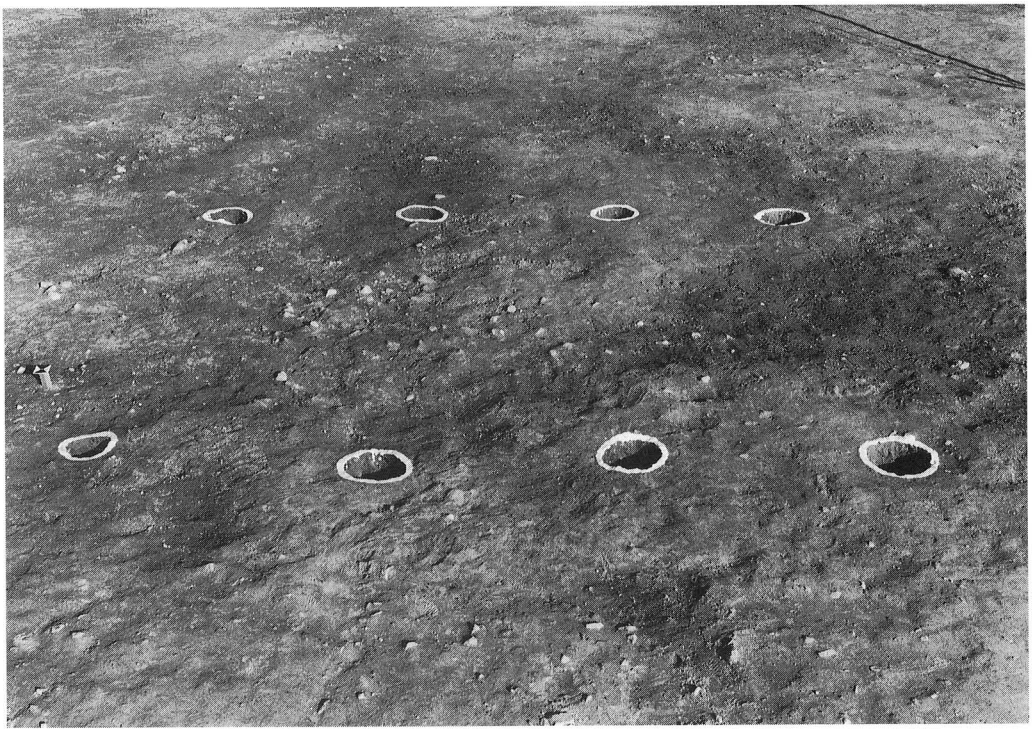
(1)　ＳＡ1003　西より



(2)　ＳＡ1004　東より

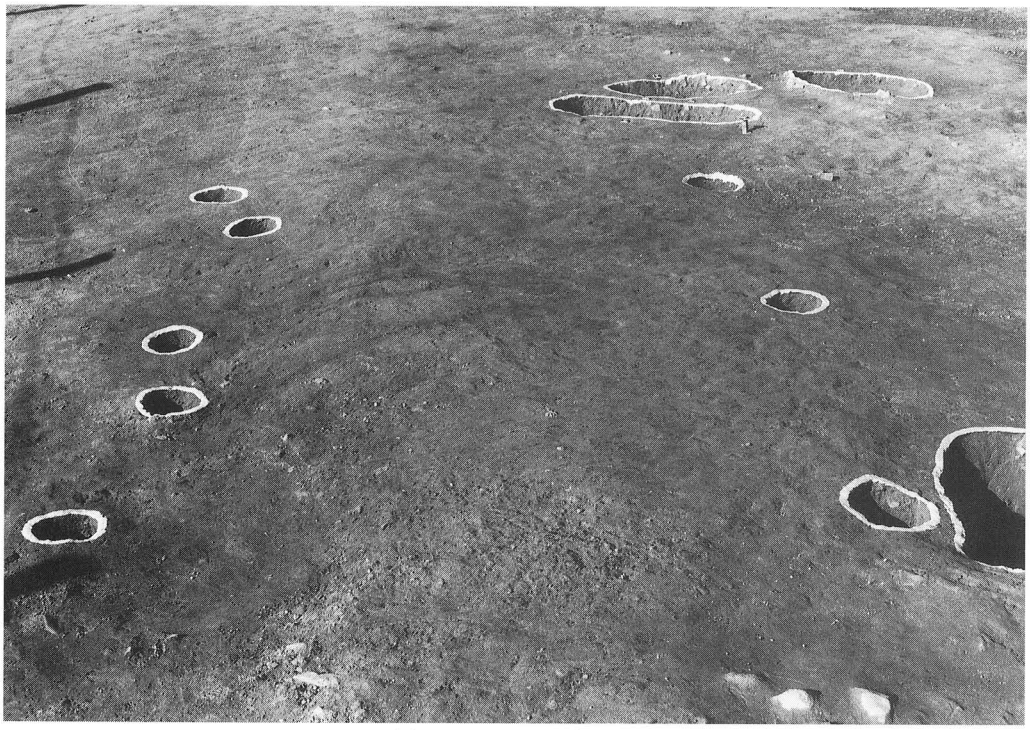


(1)　ＳＡ1006東より

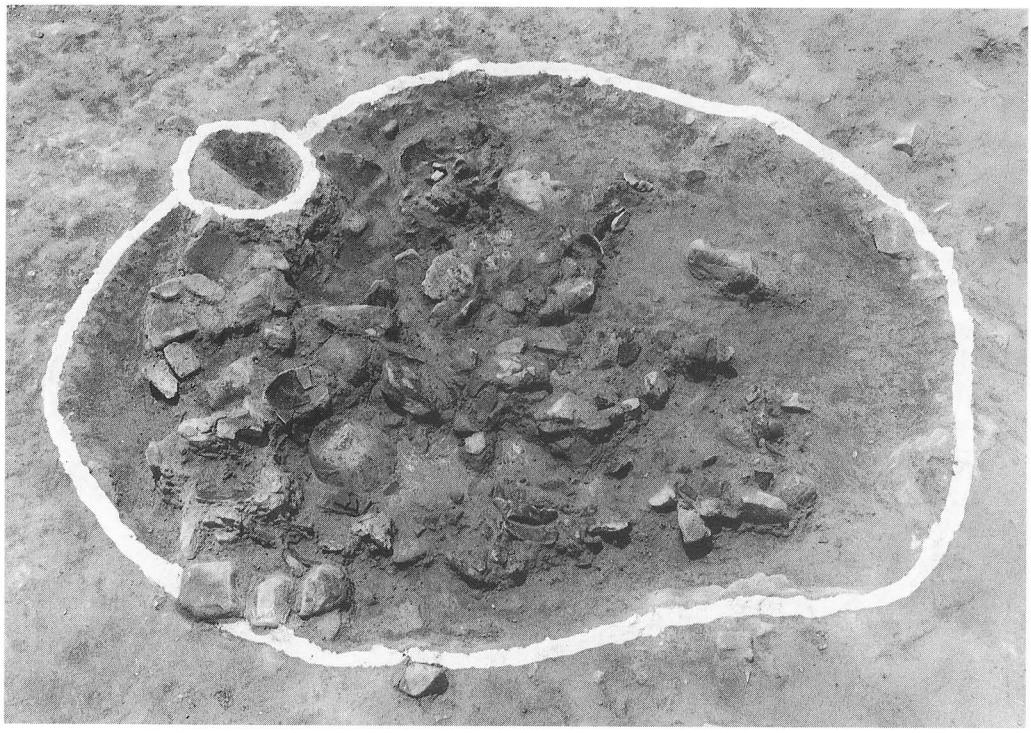


(2)　ＳＡ1007　北より

図版10



(1)　ＳＡ1008　東より



(2)　ＳＫ1004検出状況　北より